

気がついたら死亡寸前だった件について

花河相

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ラディッツというキャラをご存知だろうか。

悟空の父の兄という設定があるのにも関わらず、物語早々離脱させられてしまう不遇キャラ。

孫悟空の出自や宇宙の広さについて語る重要人物。

これは不遇のラディッツに突然憑依してしまい、どうにかドラゴンボール世界で生き抜く……そんな物語。

サイヤ人編完結

ナメツク星編完結

無印編完結

※ 作者はドラゴンボールの知識が不足してます。
何かあればご指摘していただけると幸いです。

<https://twitter.com/KAGAWASOU>
Twitter始めました。更新情報、執筆状況の報告します。

目次

サイヤ人編

ラディッツ	プロローグ	1
ラディッツ	……謎の悪役ムーブをかます。	5
ラディッツ	、警戒される	12
ラディッツ	が知らないうちに世界が動く。	19
ラディッツ	、助けられる。	25
ラディッツ	、覚悟を決める。	34
ラディッツ	、修行を始める。	41
ラディッツ	、決断を誤る。	47
ラディッツ	、見参する	54
ラディッツ	、戦闘開始する。	60
ラディッツ	、翻弄する	66
ラディッツ	、一瞬の覚醒	74
ラディッツ	、圧倒される。	82
ラディッツ	、絶望する	89
ラディッツ	、思考する	96
ラディッツ	、再び戦場へ	103
ラディッツ	、決死の覚悟を決める	108
ラディッツ	、決意する	114
ラディッツ	、いざ宇宙へ	124
ナメツク星編		
ラディッツ	、宇宙船にて。	133
ラディッツ	、新章初陣	139
ラディッツ	、圧倒す。	144

ラディッツ、驚かれる。

149

ラディッツ、勘違いする

152

ラディッツ、時間浪費する

157

ラディッツ、尻拭いをする

164

ラディッツ、最長老の元へ

171

ラディッツ、真実を話す

175

ラディッツ、覚醒する

179

ラディッツ、参戦す。

183

ラディッツ、衝動に駆られる

188

ラディッツ、奮闘する

191

ラディッツ、死にかける

196

ラディッツ、秘策準備に取り掛かる

202

ラディッツ、秘策実行

207

ラディッツ、堪える

211

ラディッツ、決死の一撃を仕掛ける

216

ラディッツ、失念する

220

ラディッツ、……決断。

225

無印編

ラディッツ、奇襲に合う。

234

ラディッツ、子供を騙す。

238

ラディッツ、約束す。

243

ラディッツ、悩みができる。

248

ラディッツ、いざ修行へ。

256

ラディッツ、行動開始。

261

ラディッツ、内定。

266

ラディッツ、静観される。	273
ラディッツ、成長を喜ぶ	277
ラディッツ、安心する。	282
ラディッツ、未来を語られる。	287
ラディッツ、さらなる高みを求めて	292

SS 短編集

301	【短編SS】気がついたら地獄に落ちた後だった件について
-----	-----------------------------

サイヤ人編

ラディッツ プロローグ

「ピッコロ……早く……さっきの技を！」

それは突然であった。

気がつくあたり一面は荒野、背中から見知らぬ男に拘束され、目の前にはおでこを光らせ殺気を放つ緑の生物がいた。

え……なんで拘束されてんの？

なんで目の前にいる左手がない緑の生物はおでこが光ってるの！
なんで俺を殺そうとしているの！

え？……やばいやばいやばいやばい。

この場でわかることは一つ。おそらく緑の生物は俺を殺そうとしている。

勘だがなんとなくそれだけは雰囲気から察することができた。

とりあえず俺がやることは

「放せ！俺が何をした！」

「またオラを騙そうとしてんだろ！早くしろ！ピッコロ！」

「もう少し……時間がかかる」

「ピッコロ……早く！」

俺が何した！

人を騙す？意味わかんねえよ！

とりあえず拘束をとくため、体に力を入れようとするが……。

「……ぐーなんで体が」

体がものすごく痛い。

特に腹が……あと、右肩がジンジン痛む。

そのせいだろうか。

拘束を振り解こうにも力が出しきれない。

どうすりゃいいんだよ！

「孫悟空よ……貴様も一緒に消えてもらえりや……俺には最高だ」

緑の生物が話しかけてきた。

こいつ絶対俺を……いや、俺ごと殺す気だ！

……あれ？

そういえば後ろの奴と緑の生物が気になる単語言ってたよな？

ピッコロ……孫悟空……。

どこかで聞いたことあるような……。どこか馴染みがある。

……もしかしてここって「ドラゴンボール」の世界？

え？マジで？

いや、だからなんだよ！

ここがドラゴンボールの世界だったとして、なんで俺殺されかけてんの！

なんで、体がボロボロなの！

わかんねええええええ！

「待たせたな……」

あ、……しぬ。

死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！

いや、なーにが、待たせたな……だ！

お前はどこかの世界線のシャンクスか！

かつこよくねえよ！

アニメを見ている良い子たちにしたら時がきた！

待つてました！

だが、俺にとつては違う！

死刑宣告やん！

あんなん食らったら死ぬわ！

どうにか……どうにか脱出を！

「やれええええええ！」

やるなああああああ！

死んでまう！

お腹に風穴空いて死んでまう！

何か……何か策は！

……あれ？

少し冷静になったけど、なんで俺力づくで抜け出そうとしてんだ？
やり方あるじゃん。

でも、孫悟空には申し訳ないけど、死ぬのは嫌だ。

俺は右足を上げ、思いつき後ろから拘束している悟空らしき男の
足を踏む。

「ふんー！」

「ぐあああああー！」

……よし！これで拘束が弱まった。これなら抜け出せる。

「魔貫光殺砲！」

くらわねえよ！

ピッコロが準備を終え、放つギリギリで拘束を解くことができた。

ピッコロから放たれた光線。

俺は素早く拘束を解いてその場から退く。

あの光線……多分俺の腹を貫こうとしているはずだ。

なら、直撃しなければ死は避けられる。

「間に合えええええー！」

俺は思いつき横に跳躍。

「何ー！」

ピッコロは驚き声を上げ、放たれた光線は俺の背後を通り、突き飛
ばされ後ろに倒れかけている孫悟空に向かって放たれる。

そして。

その一つの光線は孫悟空の胸を貫いた。

あ……やべ。

生きるの必死で悟空庇うの忘れてた。

今思えばこの光景どっかで見たことあんだよなあ。

悟空が自分ごと道連れに死のうとする。ピッコロの十八番、魔貫光殺砲で俺含め孫悟空ごと殺そうとするシーン。

……あ、これってもしかしてサイヤ人編の始まりかな。

話の規模を地球から宇宙の敵の存在を知る。

そして、今あったことを整理しよう。

孫悟空に拘束され、ピッコロが決死の覚悟で魔貫光殺砲を放つ。

ドカーン！

あ、そういうことか。

魔貫光殺砲が俺の横を素通りし、背後にある山にぶつかり爆発が起こったとき、頭にある情報からある結論に思い至った。

……俺ってもしかしてラディッツ？

ラデイツツ ……謎の悪役ムーブをかます。

前世という言葉がある。

今を生きる自分が生まれる前、別の人間として生きていた人生を表す。

おそらく、俺にはその前世があるのだろう。

そのおかげで俺は生き延びることができたのだ。

そして自覚した。ここはドラゴンボールの世界だと。

独特な容姿をしている緑の生物ピッコロ、オレンジ色の胴着を着ているギザギザヘアーが特徴、サイヤ人の孫悟空。

この情報で自覚した。

ドラゴンボール。

鳥山明先生が作者で週刊少年ジャンプでお馴染みの作品。

アニメは爆発的な人気があり、全世界80カ国以上で放送され世界中で絶大な人気を誇る、日本の漫画・アニメを代表する作品。

内容をざっくりいうと、幼少期に山奥に住んでいた主人公……孫悟空が水色の髪と整った容姿をもつ天才メカニックブルマと出会い7つ揃えると神龍が現れどんな願いを叶えてもらえるドラゴンボールの存在を知ることから始まる。

幼少期はドラゴンボール集めの冒険アドベンチャー。その後、三年の時を生きる武道の神様、亀仙人こと武天老師と同時期に弟子入りするクリリンと出会い、武道の世界一を目指す天下一武闘会で優勝するため、修行をする格闘要素も加わる。

それから悟空は地球を次々と現れる敵から守るために奮闘する王道の物語。

物語はサイヤ人編、フリーザ編、人造人間編、魔人ブウ編と続く。

……さて、少し語ったが内容はこんな感じだろう。

大雑把すぎるしお粗末な部分も。

抜けているところも多いと思うが、大目に見てほしい。

一つ言おう。

俺はにわかだ。

ドラゴンボールはアニメで見たくらいだし、原作は未読。

大雑把な流れしかわからない。だが、今その記憶のおかげで命拾いしたところだ。

少し話が脱線したが、今はいいだろう。

もっと大事なことがある。

今のこの現状。

俺はそんな不朽の名作の話を広げるためだけに存在するキャラ……ラディッツに憑依をしてしまった。

腰まで伸びた黒いギザギザしている髪型。険しい表情。戦闘民族の肩パットがついている黒とオレンジの特徴的な近未来的な戦闘ジャケット。

何よりサイヤ人の一番の特徴である尻尾。

もう、疑いようがない。

俺はラディッツになってしまったようだ。

ラディッツはドラゴンボールにおいて重要な役割を担ったキャラだ。

原作本編で悟空の出自や地球にくるまでの経緯で近未来的な要素を新たに加えるきっかけを与えた重要キャラ。

しかも悟空の兄という設定。

初めて地球にきた時、地球最強であったピッコロと悟空を相手に圧倒し、次元の違う強さを見せ絶望感を与えた人物でもある。

だが、そんな重要キャラなのだが……もつとも不遇キャラでもある。

このラディッツというキャラ……物語では早々に退場させられてしまう。

悟空の兄の兄という興味を持たれる要素がありながら、その要素が特に活かされることはなく物語からあっさり退場。

弱虫ラディッツ、出来損ない。

ベジータたちからはそういう評価をされてしまっている。

そんな不遇キャラに憑依してしまっているわけだが……。

「俺はどうすりゃいいんだろう?」

憑依直後、俺は原作崩壊させるという、神をも恐れぬ行為をしてしまった。

本来の物語ならピッコロの魔貫光殺砲で俺は悟空と共に胸を貫かれ、死にかけている最中にベジータとナツパがこっちに向かうことを伝え、ピッコロに殺害をされる流れであった。

だが、今の状況はこうだ。

胸を貫かれ「ちくししよう」と言い悔しがっている孫悟空。

左手がなく、息を切らし俺を睨み続けているピッコロ。

その近くに寝転がっている5歳くらいの子供……おそらく孫悟飯だろうか。

本当にどうしよう。

……とりあえず、話してみようか。黙っていると余計に怪しまれる。

急に話し方や性格が変わると怪しまれるかもしれないからラディッツに口調を近づかせながら。

「今のは危なかったぜ」

「ち……ちくししよう」

ピッコロは悔しがり、俺を睨む。

本当に怖いからそんな目で見ないでほしいなあ。

それを言いたいのが俺は怖いのを我慢する。身体中が痛い、目の前の息を切らしているピッコロ相手ならこのままでも勝てる。

だから少しだけ余裕なのだ。

「……今ので戦闘力をほとんど使ったようだな」

「……クッー」

……で、この後はどうしよう。

俺は死にたくない。

そうそう離脱したいが、宇宙船は悟空の息子……悟飯に壊されているはず。

それに今多分通信はベジータ達に繋がっていたはずだ。

可能ならなるべく原作と同じ流れにしておきたい。

ラディッツに転生してしまい、原作崩壊させてしまったが、せめて

俺の役目は達成すべきだ。

一年後にベジータ達がくること、ベジータが地球に興味を持つようにすること。

……どうするか。

本当ならこのまま悟空サイドに行きたいけど、急に態度を変えたら怪しまれる。

よし決めた！俺は悪者ですよアピールをしながら原作通りに行くようにする。

「……今まで気がつかなかつたが……お前……ナメツク星人だな？……なぜこんな辺境にいるかはわからんが……都合がいい。……ナメツク星人はなんでも願いが叶う特別な玉を作れると聞いたことがあるが……そこにある玉がそうなのか？」

「?!」

「その反応……凶星か」

ピッコロは困惑しているのだろう。黙って俺を睨んでくる。自分の正体を知ったことに。

まあ、今は気にしないでおこう。

「一年後に来る二人にいい手土産ができそうだ。……ふむ」

プツン。

……あれ？なんかスカウターから変な音した？

とりあえずボタンを……あれ？反応しない。

壊れた？

……ベジータ達に通信行ったよね？これで来なかったらやばくね？

まあ、いい。壊れてしまったものはしょうがない。

そういえばこの俺のスカウター本来の原作ではブルマが修理して使ったっけな。

なら、俺は。

「くそ！壊れやがった」

イラついたフリしてスカウターを左手で払い地面に落とす。

スカウターは地面を転がっていき、止まった場所には悟空とよく似た特徴をもつ悟飯が気絶していて、近くにオレンジ色の玉のついた帽子が落ちていた。

そういえば悟飯が被っていた帽子についていた掌サイズの星が4つあるオレンジの玉……これがドラゴンボールなのか。

俺は興味本意から不思議な玉に近づこうとしてー。

「ぐ……悟飯。た……頼む、やめてくれえ」

無理して声を出しているのだろう。

突然悟空に苦しそうに話しかけられる。

どうしよう。

良心が傷つく。

だが、これも全て原作と同じ流れにするためだ！

でもこれ以上いたら墓穴掘るかも。

悟空と少し話して悪役っぽい台詞いってその場を去ろう。

そう決意を改め、気絶している悟飯を摘み、倒れている悟空に近づき腰を下ろす。

「カカロット……そんなに息子が大切か？」

「……く……くうう……ぐ……ぐはん」

悪役ムーブは心が痛む。

……だが、そんな俺にも悪役としての美学っぽいものがあることを見せよう。

「ふ……惨めだなあカカロット……誇り高きサイヤ人がこの様とはなあ」

「く……く……くうう」

悔しそうにする悟空。

やめたいがやめられない。後には引けないのだから。

今のままならば俺はただのクズの悪役。慈悲も与えられない冷徹な存在だろう。

だが、そんな悪役にも感情があることを示そう。

「……ふ」

「……な…なにを」

俺は悟空の横に悟飯を放り投げる。

悟空は俺の突然の行動に理解が追いついていないのか、困惑している。

だが、それでいい。

教えてやろう！

俺のような悪役にでも、兄弟を想う心が少しでもあるということ

！

「たった一人の肉親だ…：最後まで頼みを聞いてやろうと思ってな」

「な…：なんのつもりだ」

なんのつもりも何も。

「単なる気まぐれだ…：。後一年で遙か遠い宇宙にいる仲間がくる。お前ら如きじゃ相手にできない奴らがな…：多少の慈悲をかけたに過ぎん」

「一年…：」

ピッコロは冷や汗をかき短い期間を口にした。よし、言いたいことは全て言えた。

後はひとこと言って立ち去ろう。空を飛ばうとして、

「俺如きに勝てぬ貴様らでは勝てる可能性はゼロだ。ふん！残り一年、短い余生、悔いが残らないよう過ごすんだな！フハハハハ！」

「ま、まてー！」

ピッコロは俺に向けて叫んできたが、無視して空を飛んでその場から去った。

なぜ飛べたかはわからない。

自然とやり方がわかる。気の使い方。

とりあえずこれでいいだろう。

この後ピッコロはクリリン達と合流して今あったことを話す。俺のやった行動は謎が多すぎる。

どういう解釈をするかは原作キャラ達に任せよう。

俺はこれから何もする気はない。とりあえず怪我を治すことを考える。

ピッコロ含めZ戦士達が俺に攻めて来るようなら返り討ちにする。できれば放っておいてほしいものだが

ラディッツ、警戒される

「……チツ！通信が途切れやがった」

ここは地球から遠く離れた惑星。

その惑星に2人のサイヤ人がいた。高身長でスキンヘッドのナツパ。そして小柄で髪がギザギザ来ている青い戦闘の鎧を着ているサイヤ人の王子ベジータ。

二人は宇宙の帝王フリーザの指示で星の生物の掃除をしていた。

「ラディッツめ、使えんやつだ。たかが戦闘力千ちよつとのやつに手こずるとは」

「どうする？この星を後回しにしていくか？」

「ラディッツのやつは最後の方に興味深いことを口にしていたな……なんでも願いが叶う玉があるとか」

ナメック星人は並はずれた戦闘力に不思議な能力を持ち、魔法使いのようなことができる種族。

ベジータとナツパは通信が途切れる前、ラディッツが口にしていた言葉に興味を惹かれていた。

「役立たずのあの野郎を殺してやろうと思ったが……少しは役に立つものだな。……よし、行こう」

「何を願うんで？」

「そうだな……俺たちがこのまま歳を取らず……永遠の命を……てのはどうだ？」

「ううん？」

「そうすれば永遠の戦闘を楽しめるぞ」

「なるほど……そりゃいいぜ……ふははははー！」

ベジータとナツパは宇宙船に乗り込む。

地球に向けて出発したのだった。

ここは地球。

ブルマ、クリリン、亀仙人の三人はラディッツとの戦闘に向かった悟空とピッコロを追うため飛行船で向かっていた。

悟空とピッコロはブルマが作ったドラゴンボールの反応を見るリーダー……ドラゴンリーダーを元にラディッツを追いかけた。

ブルマは大体の方角と場所がわかったため、記憶をたよりに向かっていた。

「あれ！あそこに誰か倒れてる！」

「立っているのは……」

「ピッコロじゃ」

飛行船から見える窓から何かを見つけたブルマ。

ブルマは人が倒れている場所に着陸した。

「ー」と言うわけだ」

ブルマ、クリリン、亀仙人は着陸後、一連の説明をピッコロから聞いた。

それを聞き、そこにいた一同は顔が青ざめた。

ラディッツ を倒せなかったこと。一年後に悟空とピッコロを圧倒したラディッツよりさらに強いサイヤ人が襲来することを聞いて。

だが、それよりも

「悟空！しっかりしろ！」

「大丈夫そうね……悟飯くんは気絶しているだけみたい」

クリリン、ブルマは倒れている二人の安否を確認する。

「よ……」

すると、先程反応がなかった悟空から声がする。

クリリンは急ぎ悟空に向き、安心したように息を吐いた。

「気がついたか」

「すまねえ……負けちまった。……チチにどやされちまう」

「そんなの気にすることねえよ！」

「悟空ー！」

悟空の言葉にクリリンは否定し、亀仙人は名前を呼ぶ。

だが、悟空は辺りを見渡し誰かを探す。

「……ご……はんは？」

「無事よ……孫君の隣にいるわ」

「そ……うか、は……は……は。どうやら……や……くそく……はでーじょうぶみてえだな」

「約束？なんのことだ？」

クリリンは悟空の絞り出すように喋る言葉を聞き漏らさないため、

「く……りりん」

「ああ」

「しぬっていうのは……いやなもんだな」

「何言ってるんだよ悟空！お前らしくないぞ！」

「こ……今度ばかりはだめ……みてえだ」

「安心しろ……すぐに生き返らせてやるから！」

「ああ……た……のむ」

「悟空ううう！」

悟空は最後にそれを言い残し、死んでいった。

その場にいるピッコロを除いた三人は涙を流す。

「どうすりゃいいんだよ！まだあのサイヤ人が地球にいるって言うのに！」

クリリンの叫びはその場にいる全員の表情を暗くする。

「……?!」

「消えおった！」

それは突然起こる。

あつたはずの悟空の死体が跡形もなく一瞬で消えた。

戸惑う一同。

だが、その疑問はピッコロによって解消される。

「そうか……神の仕業だな」

「ええ？」

「こんなことできるのはやつぐらいなもんだ。あの野郎またくだらんことを考えてやがる」

皆の視線がピッコロに刺さる。

「どうするつもりなんだろう？」

「しかし、神様じゃったら安心して良からう」

クリリン、亀仙人が続けて話す。

今はどうすれば良いかはわからない。

だが、今やるべきことは決まっている。

「どうなるにせよ、早く他の六個のドラゴンボールを集めて悟空を生き返らせてやらなくちゃ」

「集めるのはいいが、どうするつもりだ？あのサイヤ人がいつ襲ってくるかわからんだぞ？」

「そ……それは」

早くドラゴンボールを集めなければならぬ。

だが、地球にはラディッツがいる。

「あー…そういうえば悟空が言ってた約束ってなんのことなんだピッコロ」

突然に出た疑問。

それは誰もが思いつく疑問だ。

なぜラディッツはピッコロ含め悟空にとどめを刺さなかったのか。

一体どのような約束が交わされたのか。

「知らん……孫悟空はあのサイヤ人にガキが殺されそうになったとき、助けを求めた……奴はガキを殺すことなく、肉親だから頼みを聞いたと言っていたが。……俺が知っているのはそれだけだ」

「!?!」

ピッコロの説明に三人は驚き顔を見合わせる。

初めて会った時は残忍なやつだと思っていた。
だが、もしかしてそこまで悪い奴じゃー。

「その考えは捨て置くんだな」

ピッコロによる冷静な指摘。

三人はハツとなり、冷静さを取り戻す。

「た、確かにそうだよな……はあ」

淡い期待。

奴は敵なんだ。

その認識は変えてはいけない。

クリリンは冷静に考えを改める。

「わ、わりいな。ピッコ……口？」

「く！はああああ」

ピッコロは体に力を入れて何かをしていた。

クリリンは戸惑う。すると。

「ふああー！」

「いっえええええ！」

突然生えてきた腕に驚くクリリン。

ブルマと亀仙人は声は出していないものの、驚いていた。

「トカゲのしっぽみたい」

「貴様らはドラゴンボールを探せ、神の奴とて命を蘇らせるだけの力はない。……だがその孫悟空の子供はこの俺が預かる」

冷静なクリリンのコメントを気にすることなくピッコロは話を続ける。

「ど、どう言うことよ！」

「その悟飯とかいうガキは訓練次第で強力な戦力になるはずだ。サイヤ人どもを迎え撃つにはそいつの力がある。そのためにはこの俺が鍛えてやるしかなからう」

「鍛えるっていつても、地球に残ってる奴はどうするだよ」

「あいつは知らん……放っておけ」

「そんな無茶な！もしも地球を侵略し始めたらどうするだよ！」

「あいつも相当ダメージを負っていたはずだ。しばらくは行動はしな

いだろう。多少の被害は仕方あるまい」

多少の被害は出ても仕方がない。

いつ行動を開始するかわからない不安要素は気にしない。それがピッコロの考え。

だが、その考えに誰もが反論できない。今戦っても勝てないのは皆の共通認識。

ならば今ラディッツが動けないかもしれない期間で少しでも強くなった方がよい。

「……なら、ヤムチャと天津飯も、探さなきゃ！」

「そ……そうだ。戦える人は一人でも多い方がいいですよね！」

……だが、戦うための戦力を探す。

それは必要な行為だが、それでも。

「でも、どうしよう。……どこにいるかわからないわ……あ！そういうえば、孫君の兄貴って奴……なんている場所がわかったのかしら？……それが分かればもしかしたらヤムチャたちの場所も」

「そこに落ちている奴が付いていた妙な機械だ。相手の強さと場所もわかるらしい」

ブルマの疑問に答えるピッコロ。

ラディッツが放置した機械はすぐ足元に落ちていて、ブルマはそれを拾った。

「ふーん」

ブルマはスカウターを弄り始める。

そして、ポケットからドライバーを取り出して調べ始める。

「うんと……ここがこうなって……ここが……すごいメカよこれ……故障しているけど、なんとかかなりそうだわ」

「すごいんですねブルマさんって」

「これ、持って帰って修理すればヤムチャも天津飯ももしかしたら見つけられるかもしれないわね」

ブルマはヤムチャと天津飯を見つける手がかりが見つかり、ふっと笑った。

「とりあえず一度亀ハウスに戻ろうかね」

「そうね。ここじゃどうしようもないしね」

「では、私はその後すぐにドラゴンボールを探しに行きます」

亀仙人、ブルマ、クリリンの考えがまとまる。

「話し合いは終わったか？」

「……え？」

話し合いが終わるタイミングを見計らったのか、ピッコロが話に入ってきて、その後超能力を使い亀仙人が抱えていた悟飯を自分の手元に。

「二年たったらこのガキを連れて貴様らの家に行く。孫悟空が蘇ったら楽しみに待ってると伝えるんだな！」

ピッコロは最後に言い終えると飛んでいってしまった。

そして、最後に取り残された三人はと言うと。

「…チチさんになんと伝えれば良いのでしょうか？」

三人の表情は暗くなるのだった。

ラデイツツが知らないうちに世界が動く。

それぞれが動き出した時、悟空は神様の力によって肉体がある状態で天国か地獄かの審判をする閻魔大王の元へ来ていた。

「ーと言ったことがあります、界王様のところへ修行をさせたく生身のまままで連れてきたわけです。どうか、閻魔大王様、此奴を界王様のところへ連れて行くことの許可をいただきたいのです」

閻魔大王は少し考え込む。

天国へ行けるものをわざわざ危険を冒してまで行かせることに躊躇いがあるのだ。

「孫悟空か……確かにお前の功績は素晴らしい。わざわざ天国行きのものをののお」

閻魔大王様は考え込む。

蛇の道は長く、いけるかもわからない。途中落ちてしまったら強制的に地獄に落ちる。

今まで到達できたのは閻魔大王ただ一人。

自分の経験から、今から悟空がやろうとしていることに許可を出すかを考える。

「良かろう。……そんなに行きたければ界王様のところへ行くが良い。案内人と呼んでやる。あつちにいつて待っておれ」

「うんー」

もう勝手にしろ。

それが閻魔大王が出した答えだった。

閻魔大王様の許可がおりて悟空は言われた通りの出入り口に向かう。

「ただしー蛇の道から落ちてもワシは知らんからな」

「うん？」

自己責任。もう知らん。閻魔大王の言葉に悟空は意味は分からないものの、とりあえず返事をする。

「では、頑張るのじゃぞ。この一年が勝負だからな」

「ああ！なんのことがよくわからないけど、とにかくオラ……その界王様って人に会えばいいんだろ？」

「うん」

「ありがとう！ミスターポポにもよろしくな！」

神様と悟空はこうして別れた。

神様は地球の危機に焦る。

悟空が界王の元でどれだけ強くなるのか。神龍の願いでもサイヤ人の抹殺は難しいということ。そして、唯一の希望である悟飯、ピッコロによつてどれほどの実力になるのか。

「どうなってしまうんだ地球は」

そして、最も危険な存在のラディッツ。

神様はラディッツの謎の多い行動に疑問をもち、地球は大きな爆弾を抱えている状態に焦る。

何故あの時悟飯を助けたのか、何故すぐに悟空にとどめを刺さなかったのか。ピッコロを生かしたのか。

考えても答えはラディッツにしかわからない。

だが、もしもラディッツが地球侵略を開始し、修行中の乙戦士たちを殺してしまつたら。

ドラゴンボールを奪われてしまつたら？

考えたらキリがない不安要素。

「今はできることをしよう」

神様は出来る限りのことをしようと考える。

少しでも戦力を増やすため。

一年後来るサイヤ人を迎え撃つため。

神様は行動を開始した。

「さっさと目を覚ませ、孫悟空の息子よ……チ！」

ピッコロは悟空の死後、悟飯を連れて移動した。

場所は先ほどの戦闘をした場所よりも離れていて、今は水深が浅い湖にいた。

ピッコロは気絶からなかなか起きない悟飯に苛立ち、湖へと落とす。

「……ゴホー……はあ……はあ……はあ」

「話がある……水から上がれ」

「いえー！」

湖に落ち、目を覚ました悟飯は急に話しかけてきたピッコロに怯える。

「誰なの……お父さん……あれ？……あれ？……お父さーん、怖いよ！」

「……チツ、世話をやかすなー！」

悟飯はすぐに悟空に助けを求めるが返事はなく、湖の中を走り回り父の名を叫ぶ。

だが、その反応に見かねたのか、ピッコロは悟飯を掴み無理やり湖から連れ出す

「うえーん……ぐす……ぐす」

「喚くな！静かにしないと首の骨をへし折るぞ！」

「ひえ」

ピッコロの言葉に悟飯は怯え、メソメソしているものの、泣き止む。それを確認すると話始める。

「いいか、俺の話をよく聞け……お前の父は死んだ」

「にえー！」

「少しは覚えているだろう？あの男を倒すために……犠牲になったんだ……結果は無駄死にに終わったがな」

悟飯はその事実を告げられ思い出す。

目の前で自分の父親が死んだことを。

気絶していたから記憶はあやふやだが、なんとなく心当たりがあつ

たのだろう。

「……お父さんが……」

「おおっと！泣き喚くなよ！本当に首の骨をへし折るぞ！……ふん」
ピッコロは悟飯が泣くのをまたも脅して泣き止ませる。

「ドラゴンボールのことは父親から聞いているな？……今お前の仲間
がそれを集めている。……いずれは生き返らすだろう……だが！」

悟空はいずれは生き返る。

そのことを悟飯に聞かせ安心させる。

もつと重要なことがあるため。

「だが、問題は他にある。……今回お前をさらった奴は未だに生きて
いて、いつ地球で暴れるかわからんし、一年後にさらに恐ろしい奴が
2人もくる。……仮に孫悟空が生き返ったとしても、俺と奴だけでは
勝ち目はない」

3人のサイヤ人に立ち向かう。

それは現実的にいって不可能。

「そこでお前の力が必要だ。修行で戦術を身につけ、この地球を守れ
！」

「え……僕が？……僕なんて全然戦えないよ」

「ほう……自覚がないらしいな。自分の秘めたる力のことを。だから
その力を修行で引き出せるようになり、有効活用できるようにしろ」

「僕にそんな力ない」

「証拠が見たいか？」

「え？何するの？…痛い！痛い痛いよ！やめてよ！」

ピッコロは悟飯の頭を掴み、そして。

「ふん！……そら！」

近くにあった岩山に投げつける。

そして。

「あああああ！」

生命の危機反応を自覚した悟飯は力を解放。

岩山を含め後方まで一面消し飛ばした。

「……これは」

ピッコロは自分の想定していた以上の力に驚く。

「これ……僕がやったの？」

「なんとなく自覚したようだな。お前は感情が高ぶった時にだけ力を解放する。だが、それは一瞬だけだ。それでは使いものにならない」

「え？」

「この俺がお前を鍛え最強の戦士にしてやる」

将来自分の障害になり得る敵を自分で育てる。

その複雑な想いを抱くが、それでも、ピッコロの決意は変わらない。

「でも僕……武闘家なんてなりたくない。えらい学者さんになりたいの」

「ふ、ならなるといいき。だが、それはサイヤ人たちを倒してからだ。奴らは地球人を絶滅させる気だ。そうしたら将来もクソもないだろう？」

「でも僕怖い」

まだ4歳の子供。だが、こいつはサイヤ人の息子。サイヤ人どもを倒すためなら使えるものはなんでも使う。

それが例えば子供であっても。

「ガタガタ抜かすな！今すぐぶつ殺されたいか！時間はないんだ！早速始めるぞ！上着を脱げ！」

ピッコロは怒鳴り、悟飯の上着を脱がす。

そして、最初の指示を出す。

「……何をすればいいの？」

「まずは何もせんでいい。生きるんだ」

「生きる？」

「六ヶ月たって生き残っていたら戦い方を教えてやる」

まずはサバイバルで生き残り、タフさと強い精神力を身につけさせる。

まずはそれから。

「いやだよ……僕、寂しくて一人でいられないよ」

「甘ったれるな！地球の運命はお前が握っていると云っても過言ではない！自分のパワーを信じ、その使い方を自分で学ぶんだ」

「だって僕……」

「じゃあな」

ピッコロは泣き喚く悟飯を置いて空に飛んでいく。
今ピッコロ自身も忙しい。

自身の修行をしなければいけないし何より、地球にいるラディッツの警戒をしなければいけない。

「……チツ自分の運命が嫌になるぜ」

ピッコロは一人呟く。

この時のピッコロは自分の変化に気づいていない。
以前ならばガキを育てることはしない。

昔ピッコロはピッコロ大魔王として世界を征服しようとした。

だが、今はずる賢い粗暴さが失せていることに。

あと一年……それがピッコロの寿命。

本人はそれを自覚している。

それが自分がサイヤ人に殺されるのか、それとももう一人の自分である神様の寿命なのかはわからない。

二人の命は共通している。

ピッコロの死は神様の死で神様の死はピッコロの死でもあるのだから

ピッコロはこの世に何かを残したいと思ったのかもしれない。

それが孫悟空の息子でも。

神様が死ねばドラゴンボールも使えなくなる。

残り使えるのはあと一回。

世界の運命はどう動くのか……。

それはわからない。

原作にはないイレギュラー。ラディッツの存在がこの世界にどう影響するのは一年後……全てがわかる。

ラゲイツツ、助けられる。

ピッコロたちと別れた後、俺はできる限り出せる速さで飛んでいた。
下に映る景色は変わり荒野から森林へ。

よし！これでどうにかなった。

墓穴は掘っていない……はず！この後どうなるんだよ。

第一関門は突破した達成感といつ乙戦士たちが今後襲ってくるかの不安感が心の中で右往左往していた。

「ん……あれ？」

その異変は突然起こる。

お……おかしい、体の痛みそんなに大きくなかったよな？さっきまで普通に空飛んでたし、平気なはずなんだけど。

どんだん体が痛みだし、俺は飛ぶ速度を抑える。

「く……くそー！」

だめだ。

気力がもたない。

もしかしてアドレナリンが出たから行動できたのか？
多分それかもしれない。

安心した瞬間から体が痛み出したし。

……もうダメか。

一応ピッコロたちから可能な限り距離をひらいてある。

……大丈夫か？

いや、無理は良くない。

俺はゆつくりと下へと降りて行く。

なるべく人目につかなそうな場所を選んで。

そして、しばらく飛び続けると、近くにある村から目算でちょうど
草木で覆われ身を隠せそうなところを発見

ゆつくりと着地した。

「ち……畜生」

俺はついに気を失ってしまった。

「ん？……ここは？」

目が覚めるとあたりは森ではなく、どこかの一室だった。

木造の家で暖炉が焚いてあるシンプルな作りであった。

俺はあの時……森では倒れたはずだが……。もしかして、全て夢だったのか？

「起きたかね」

「誰だ！……く」

突然扉が開いて突然声がかけられる。俺は驚いて警戒体勢をとるも、身体中が痛み蹲る。

この痛みは……気のせいじゃなければ今までと比じゃない痛み。

「そんなに警戒せんでもいい。ワシはラオ・チュウ。しがない老人だ」
そう笑って俺に名前を名乗った老人は半袖のワイシャツに青いパ
ンツを履いている鼻の下に髭を生やす白髪の老人であった。

「怪我をしておるようだし無理はせんほうが良いだろう」

そう言ってきたラオ・チュウは持っていたトレーを近くの机に置く
と、近づいてきた。

目の前にはいる老人は多少武術の心得があるようだが、俺がその気
になればすぐに殺せる。

だが、俺はそれをせずにただただラオ・チュウと名乗った老人に言
われるがままにするのだった。

俺はどうやら本当にラディッツになってしまったらしい。

もしかして、これは夢だった。その期待はもうない。

ラオ・チュウと話をしているうちに確定してしまった。

ここはチャズケ村という名前らしく、ラオはこの家で雑貨屋を営み孫1人とその両親の4人で暮らしているらしい。

俺はラオが薪を取るための木を取るため、森を散策しているときに俺を見つけて介抱してくれ、今に至るとか……。

だが、一つ思うのが。

「ラオ……何故俺を助けた？」

ラオさんなんで俺を助けてくれたんですか？

人と話していて分かったことだが、俺の口調や精神は元々のラディッツの性格の影響を受けているらしく、敬語が使えない。

生意気な奴と思われるかもしれないが、ラオは気にしていないように、そのまま話を続ける。

「何、困っている人を助けるのは当たり前のこと」

その一言でラオは人が良すぎるのがわかる。

「俺が悪人だったらどうするつもりだったんだ？ 着ているものも怪しいとは思わなかったのか？」

「それを聞く時点でお前さんは悪者ではないじゃろ？」

「それは」

何も言い返せない。

俺は悪者だった。ラディッツになってからはもう人を殺したいとかは思っていない。

だが、過去は消せない。

今までラディッツがやってきた行い。それは払拭できない。

今のラディッツがあるのは俺が成り代わったからに過ぎない。

「感謝をしておこう。おそらくお前に助けられなければ俺はどうなっていたか分からん」

「人に礼を言える、お前さんは悪い人間には見えない。……ここで会ったのも何かの縁なのかもしれん。怪我が癒えるまでゆつくりし

ていきなさい」

そういえばラオ・チュウとかチャズケ村ってどっかで聞いたことがある名前なんだよなあ。

アニメで聞いたことが。

だが、うろ覚えの部分があり、うまく思い出せない。

「……世話になる」

とりあえず、せつかく助かった幸運に感謝しお言葉に甘えることにする。

俺はその後、ラオが持ってきてくれた食事を食べて寝ることにした。

その後、着ていた戦闘服を脱ぎ、用意してくれた服を着る。

どうも、俺が寝ていた間にわざわざ用意してくれたらしい。

至れりつくせりだな。

全てを終えるとラオは俺の手当てをしてくれた。

体の痛みが少し和らいだ気がする。

その日はしっかりと寝ることができた。

「……ん？」

窓から差ししてくる光で目が覚める。

……痛い。

体が痛む。

もう自覚したほうが良い。もう、俺はもうラディッツになってしまったらしい。

ここは夢ではなく現実。

トントントン！

ふと、考えの途中でドアからノックが聞こえる。

「なんだ？」

俺が返事をするやガチャツと扉があく。

すると赤髪の少女が入ってきた。
年は4歳くらいか？

「おじいちゃんに見てくるように言われて……」

あーあ、俺の顔ってそんなに怖いのか？

怯えちゃってるよ。

「そうか」

「……うん」

あれ、これだけ？もつと他に話すことない？怯えられてしまった。

「なんだ？他にあるのか？」

「いえー」

少女は逃げるように出ていった。

ヤベエ。心が痛い。

「起きるか」

俺は寝ていたベッドから立ち上がる。

「ほう。一日寝ただけで……ここまで」

戦闘民族サイヤ人の体の体を甘く見ていた。

まだ体は痛いものの一日寝ただけで、昨日の体の痛みが和らいだ。

これがサイヤ人の体か。

「いくか」

起き上がり、赤髪の少女が言った方向に向かう。

「起きたのか。どうじゃ具合は？」

「昨日よりはマシだ」

「それはよかった」

ラオはそういうと、すでに食事が用意されていた。

「あら、おはようございますー！」

「父さんから話は聞いていますよ。ゆっくりしてってください」

この二人がラオが言っていた夫婦か。

この家族は皆人が良すぎるのか、悪人面の俺に警戒心がない。

むしろ歓迎してくれている。

俺は黙って頷き座るように促された椅子に座り4人と食事をとつた。

少し多くの量を用意していたらしいが、俺はあまりの空腹に並べられていた料理をほとんど食べてしまった。

赤髪の少女……ライムは少し悲しい顔をしていて、両親の二人、母親のキウリと父親のレンモはそれを慰めていた。

いや、すまん。

だから泣かないでほしい。

後でちゃんとお詫びするからね。

「……メソメソするな」

「えええん！」

ライムはそれを聞き泣いてしまう。

本当にごめんなさい。

「すまないな、ラディッツさん。ライムを許してあげてほしい。あの子はまだ幼い」

あの後、夫婦二人は泣き喚くラウラを連れて部屋を出ていき、俺とラオが残された。

いや、言つて良いんですよ。

俺が悪いつて。

さっさと出ていけつて。

でも、可能なら体が完治するまでここにいたい。

右も左もわからない。

だが、今俺はなにもしなければ穀潰しで終わる。
何もしない居候。

これだけはどうかせねば。

俺ができることは戦闘民族サイヤ人の力だけ。

なら、俺がやることは食糧確保と力仕事くらいだな。

「気にしていない」

なぜだ！何故話したい言葉と実際に話す言葉が一致しない。

今はいい顔してくれているが、これが続くと心証が悪くなるかも。

さっさと退室しよう。

「……どこへ行くのじゃ？」

どこってちよつと森に行つて動物の肉とか果物とか取ってくる。

「俺がどこへ行くこうと勝手だろう？文句があるのか？」

………。

「いや、すまんかった。……気をつけてな」

………はい。行つてきます。

「ああ」

俺はそう言うと、家を出て森に行くのだった。

森に着くと、俺は鹿がいたから適当に仕留め、適当に毛皮を剥ぎ、食べれる部分を分ける。

森の深くまで行き、果物や薬草、キノコを取れるだけとる。

正直俺には毒か、どんな効力があるのかわからないので、匂いを嗅いだり、食べてみて体に異常がないものだけを厳選した。

少し気分が悪くなったり、ハイテンションになったりしたのはここだけの話。

「こんなものでいいだろう」

後の仕分けはお願いしよう。
わからなかつたら捨てればいいしね。

俺はでかい布で採取したものを包み、空を飛んで村へと戻った。

「……ラディッツさん、帰ってきたのか」

帰るとラオが薪割りをしていて、俺を見ると笑顔で迎えてくれる。

ラオは俺が背負ってきた大きな袋に気づく。

「ラディッツさん、それは？」

俺はその場に袋を置き、持っていた肉と皮もその場に置く。

どうぞ先ほどのお詫びです。食べてください。そう言おうとする
と。

「お前たちで処理しろ」

「こんなにたくさん」

ラオは袋の中身を見て驚く。

「俺は寝る。飯ができたら声をかけろ」

俺は黙って家のドアに手をかける。

何様なのだろう。

家に置いてもらっている立場なのに。

なんかこのままだとまずいな。

……何かできることは。

「おいラオー」

「なにかな？」

そういえばラオは薪割りをしていた。

まだ、量もあるし、やってあげよう。

「お前は効率が悪すぎる」

ラオは俺の言葉の意味がわからないらしい。

うん、俺もわからない。

俺は黙ってまだ割っていない薪の塊に近づき、空になげる。

「ディアア！」

「?!」

俺は素手で薪を割った。

ラオは目の前で起こった光景に驚いている。

「……すごい」

ラオは感心している。午前中にライムを泣かしてしまった手前、少しでも恩返ししたい。

できることをしよう。

体が癒えるまでは。

「俺は寝る」

俺はラオに一言断り、家に入った。

今は一人になって考えたい。

これからのことを。

まず強くなるための修行について、Z戦士たちが俺の動向をどう思っているのか、どう行動してくるのか。

最後にベジータたちとの戦闘について。

ラデイツツ、覚悟を決める。

「神様」

「これは……どうなっているんじゃない？」

ここはカリン塔より上にある神の神殿。

神様とその付き人、全身黒色の丸い体型、アラビア風の服を着ているミスターポポは困惑していた。

二人は神殿の上から地上の様子を窺っている。

対象は地球の危険分子サイヤ人のラデイツツ。

「……なぜ人間と暮らしている？」

神様はラデイツツは怪我が癒えると破壊行動をしようと思っていたのだが。

一月ほどが経つが、被害が全くない。それどころか、人間と暮らし始めていた。

「神様……あのサイヤ人、もう悪いことしない」

「いや、まだそう決めつけるのは危うい。まだ警戒すべきだ」

二人は警戒を解くことをしない。

理由はわからない。

だが、これは好都合だ。

今神殿には一年後にくるサイヤ人に向け戦士たちの修業をつけている。

集められた戦士は5人。

お馴染みクリリンとギザギザ頭に野性味溢れるイケメンフェイスヤムチャ、三つ目が特徴のスキンヘッドの天津飯、肌が白く小柄なチャオズ。

最後に太っていて着物を着ているヤジロベエ。

5人は戦闘力が上がり、実力も向上している。

だが、地球にいるサイヤ人は手負いとはいえ実力差はかけ離れている。

今、無理をして倒しに行くことはせず、力を蓄え備えることに専念した方が良い。

それが神様が下した判断だった。

「ここにきて一ヶ月か。そろそろ怪我也癒えたな」

チャズケ村にきてはやひと月。

Z戦士たちの襲撃はなく、平穩に過ごすことができた。

そのおかげで傷は完治した。

ゆつくり療養がてらラオたちの手伝い、主に食料採取と力仕事を行なう。

そのおかげで今ラオたち家族とは良好な関係を築けた。

ポジシヨン的には人のいいおじさん、便利な居候といったところだろう。

ライムは始めは怯えていたものの、今では懐いてくれている……勘違いではなければ。

だが、この生活は終わりだ。

これ以上迷惑はかけられない。

幸いにもここら一帯には湖はもちろん果物、肉も多くある。

ラオたちにとってきていた薬草や果物も採取して種類や効果を教わりある程度の知識はもちろん、価格とかも聞くことができた。

野宿は平気だし、やろうとすれば金も稼げる。

もう独り立ちできるのだ。

「これもまだ使えるな。……やはりこれがしつくりくる」

俺は家を出るための準備をしている。もともと着ていた右肩のパットが壊れ、鳩尾部分が少し割れている戦闘の鎧を着る。

この地球の服も良いが、安全性に欠ける。
これが一番安心できる戦闘服だ。

……さて、これで終わった。
俺が寝ていた部屋は掃除はした。布団もできる限り綺麗に畳んだ。
後は置き手紙も用意した。

たった一言「世話になった」とだけ記した置き手紙。
ここは俺にとって居心地が良すぎる。

ひどい考えだが、Z戦士が襲ってきてきても優しい彼らのことだ。
ラオさんを思つて本気で戦えない。俺に有利になる。
だが、その行為はダメだ。

ここを危険に晒したくない。
だから、ここを出ていー。

「何してるのおじさん？」

驚いた。

まだ朝早い。

時間ならいつも俺に声かけてきてくれるライム。時間はいつも7
時くらい。

今は4時。みんな寝ている時間だ。

なんでここに？

「なんでお部屋片付けてるの？」

………なんといえは良いのだろうか？

ここは正直に言うべきか？

騙す事はできるが、それだけはダメだ。

「俺はもうこの家を出る」

「お出かけ？ならお日様出てからにしよ。まだ暗いよ？」

………だめだ。子供は純粹と聞いたことがあるが。

「違う、今日でこの家に住むのは最後だ。もう二度と会うことはない」
「………え？」

キョトンとしているライム。

ラディッツに憑依してひと月。今は体と心は一致して一人の人間
となった。

前世の俺の人格とラディッツの人格は一つになりつつある。

やはりお互いに影響しあって今では口調はラディッツのままで性格は前世のものとなった。

前みたいにきつい口調になることはなく、今では率直に伝えられるようになった。

「もう……会えないの?」

「ああ」

「もう……一緒にご飯食べないの?」

「そうだと言っているだろう」

ライムは目に涙を溜めていて、今にも泣きそうになった。

だが、泣くのを我慢している。

「い……………」

「……………なんだ?」

なんだよ今の間は。

「いやあああああ!?!」

「?!……………おい泣くな!」

大泣きするなよ。

他のやつが起きたらどうするつもりだ。

俺はあやそうとする。

だが、それは遅かった。

「ライム!どうしたの?」

「うわあああああん!おじさんがあああ!」

「ラディッツさん?」

おい!その言い方だと俺が何かしたみたいだろ!

頼むから何あったのって目をやめろ、早く泣き止め!キウリ。どうにかしてくれよ。

「……………なんですかその格好は……………それになぜ部屋が片付いているので?」

「……………」

「おじさんもう少しいてよ!出ていかないでよ!」

うん、代弁してくれてありがとうライムあと、そろそろ泣き止もう

な。そうしないと。

「何があつた?!」

あーあ全員起きちゃったじゃん。計画台無しじゃん！

「随分世話になってしまった。これからお前たちを危険に晒してしま
う。これ以上は居られん」

俺は全てを語った。

自分がここにきた経緯、出自、これから起きること。

理由は納得のいく説明ができなかったから。

俺の尻尾について、地球にはまだ存在しない鎧。

俺の説明を聞くと4人は黙って見つめ合う。

戸惑っているのだろう。

「……なるほどの」

シンツとした沈黙を破ったのはラオだった。さすがは年長者だ。

「宇宙人ならばあの人間離れた動きも納得だ。気になってはいたが

……」

「地球がもうすぐ終わるとか……信じられないわね」

「その不思議な格好も、尻尾も……宇宙人なら説明がつく」

「おじさんすごい！お猿さんみたい！」

ラオ、キウリ、レンモ、ライムはそれぞれそうコメントした。

今、ライムに対して俺は尻尾を動かして遊んでいる。

普通、尻尾を掴まれたら力が抜けるんだが、怪我の療養中、やるこ
とがなく、自分の尻尾を触り続け、鍛えたら弱点を克服できた。

だから、説明する手前、泣いていたライムをあやすため尻尾を動かしていたら、今、真剣な話をしているのに、一人だけ楽しんでいた。

「お前さんは……どうするつもりなんだ？」

「どう……とは？」

「これから地球を滅亡させるつもりなのかと聞いておる」

ラオは真剣な表情で聞いてくる。

何を言っているのだから。

ひと月、ラオたち家族と過ごした。その生活の中で人としての喜びを知った。感謝されることの喜び。助け合うこと、頼られることの嬉しき。新しいことを覚える大切さ。

全て人同士で過ごさないと分からないことを知った。

前世では当たり前だったこと。だが、ラディッツに憑依してからは初めて感じる感情ばかり。

何故だろう？人と過ごすことで心が軽くなり、身体中が温かくなっていく。

これら全てラオたちと過ごさないとわからなかった。ラオに助けられなければ知る機会すらなかった。

「俺が恩を仇で返すように見えるか？」

すでに答えは出ている。

俺はサイヤ人として、地球人のために戦おうと。

他のやつはどうでもいいが、ラオたちがこれからも平和に暮らせるために……この一生かけても返せない恩に報いるために。

俺は強くなろうと決めたんだ。

「だからこそ修行をする。俺が強くなろうが勝算は低い。だが、ここにいると皆に迷惑がかかる。危険な目に遭わせる可能性がある」

俺の話を聞き終えると、3人は呆然としていた。

そして、お互いにまた顔を見合わせ微笑んでくる。

「なら尚更ここにいた方がいいだろう」

「私たちのために戦ってくれるのならできる限りのサポートもしなきゃ」

「ああ。それにラディッツさんがいなくなると大泣きする子もいる。

もう少しライムと一緒にあげてほしい。なんなら、戦いにいくその日まで」

……どれだけお人好しなんだ。

これがただの虚言かもしれないのに。

「俺が嘘をついているとは思わんのか？」

俺の問いはその答えは否であった。

「お前さんは正直な人だ。それはひと月過ごしてきてわかっておるつもりだが？」

もう勝てんわこの人には。

「一年だ。……それが過ぎたら俺はこの家を出る。それまでは好きにさせてもらう」

「ああ、それで良い」

俺はもう少しこの家で世話になることになった。

「ううう。おじさん、いかないで……むにやむにや」

ちなみにライムは俺の尻尾を枕に床で寝てしまっていた。後で判明したことだが、ライムはトイレで目を覚まし、俺のいた部屋の明かりがついてたので気になってきたそうだ。それでそのまま話し合いになった。

4歳児にはまだ寝足りないようだった。

俺たち4人は寝ているライムを見て、ほっこりするのだった。

ラディッツ、修行を始める。

俺の残留が決まったその日の朝、今日から修行をしようと思ってる。そして、朝食を食べた後、準備をして家を出ようとする。

「あ！おじさんおはよう！」

「ああ。よく眠れたか？」

「うん！おじさん今日から修行？行くんでしょ？私もいく！」

「来るんじゃない」

ライムに絡まれる。

懐かれるなら嬉しいが少し面倒くさい。

「こらライム、ラディッツさんを困らせてはいけません！」

「ええ！でもママ！」

お、キウリがきたか。

なら、話は早い。

ライムのことをお願いして外に出よう。

「すみませんラディッツさん。あ、今日は帰り遅くなりますか？」

「……ああ。行ってくる」

「お気をつけて」

俺は空を飛び、森まで移動する。

「さて……どうするか」

森に着くと修行の方針を考え始める。修行といっても何すれば良いのだろうか。

「まあ、まずやることといったら」

俺はまず自分の尻尾を抜いた。

少し痛かった。サイヤ人の誇りだが、月を見て大猿になるのは避けたい。ベジータは悟空との戦いで人工的に月を作り出していた。ベジータは大猿になっても理性を保てる。

しかし、俺は多分無理だ。戦況がどう転ぶかわからない不安要素は無くしておくに限る。

ライムは気に入っていたが、後で謝っておこう。

さて、これから修行に入るわけだが、俺に武術の心得はない。

サイヤ人は生まれ持つての戦いのセンスがあり、訓練しなくてもある程度の実力がある。

俺もそうだ。

センス任せの戦闘では限界がある。

武術は一朝一夕で身につくものじゃない。

……どうするか。

今は武術や技を身につけるのはやめよう。

とりあえず手っ取り早く強くするには身体能力向上と気を操れるようになること。

身体能力は筋トレか？

可能なら原作でもあった重力室でやりたいが、無理だ。

なんせ、それを作るのはカプセルコーポレーションのブルマの家族だけ。

人が良いブルマの両親ならば俺が今行ったとしても、注文通りの内容を作ってくれるかもしれない。

だが、リスクは負いたくない。

「この辺には大きい岩あるし、それを持ち上げれば大丈夫か」
筋トレはこれで少しはマシになる。

だが、それは問題は気のコントロール。

……まずは。

「気を感じるところからか」

修行と言ったら……やっぱり。

感謝の正拳突きだな。

ハンターハンターのネテロの代名詞。

己の肉体に限界を感じたわけではないが、気のコントロールのやり方、身につけるための方法はある。

この一ヶ月で考えついたやり方が。

まずは足を横に両肩くらい開き、合掌。この時に体内で気を最大に溜める。

自分の最大の気を溜められたら次にゆつくりと膝を曲げ重心を下げ、両腕を腰につける。

最後に拳を空間に打ち込む。

その時にゆつくりと体内で溜めた気を拳を移動させ、打ち切る。

ここまで10秒かかる。

すごく違和感があり、やりづらい。

この方法が正しいのかわからないが、まずは慣れることが大切だろう。

気のコントロールを繊細にできるようになれば自分より戦闘力の上の連中に一矢報いれる。

これもハンターハンターからのアイデアだが、念の攻防力がヒントだ。

細かい説明は省くが、強者からの一撃を受ける時、受ける部位に気を集めることでダメージを軽減できるのではと仮説づけた。

これに関して、まずは気を繊細に操れるようにならなくてはいけない。

「とりあえずやるか」

俺は修行の方針を固める。

やらないことには始まらない。

だって気のコントロールは誰にも教われない。

自力でできるようにならないといけないのだから

「くそー……もう気のコントロールが乱れてきた」

気のコントロール修行を開始して数時間が経過した。

残念ながら気のコントロール正拳突きは長時間やっても集中力が続かず、気を練れなくなる。

戦闘に支障はないが、コンディションは悪い。

こんな時に相手の気を探ればいいのだが、残念ながら相手の気を探るとかは無理だ。

何がいけないんだ？

……理由は後で考えよう。

それにしても。

「腹減った」

気を使うと腹が減る。

そういえば空腹の時ってなんか気の減り遅いんだよなあ。

帰るか。

昨日取りにいった肉や魚はラオの家に置いてあるし。

「おお、ラディッツさん、早い帰りだ。用事があるとキウリが言っていたが何をしていただけの？」

帰ると出迎えてくれたのはラオだった。

ラオは最近店が空いている時間や休憩時間には、以前薪割りをしている家の裏でゆっくりと過ごしていた。

俺がくる前はその時間を使い、力仕事をしていただけだが、今は俺が全てやってしまっている。

「……鍛錬をしていた」

「ほう」

俺が端的に答えると感心するよう俺を見る。

いや、何見てんだよ。なんか言えよ。

「なんだ？」

「いやなに……実はワシも昔武術をやっていたな。前々からラディツツさんが強いことは分かっていたのでな」

「それがなんだ？」

武術の経験者か。知ってる。

なるほどな。

「なに……よかつたら手合わせでもどうかかなと思ってな」

……いや、やったら殺しちゃうよ。

単なる気まぐれか？もしかして俺と交流を持とうとしてくれてるのか？

せっかくの申し出だが……どうしたものか。

「ワシは武術家を引退しておるが、昔は天下第一武道会にも参加したことがある」

「……いいだろう。死んでも知らんぞ」

そう言つてラオは腰を下ろし構える。

俺は構えは特にない。

脱力し、唯立つだけ。

出来るだけ手加減して勝とう。

気が減つて疲れているが、力の加減を。

「はああああー！」

ラオは俺にかかる。

ああ、遅い。

一撃目、右ストレート。

最小限の動きで躲す。

ラオは躲されると思ったのか、右の拳が空を切ると体勢を整え左の蹴りを。

俺は右腕で容易く受け流し左拳を寸止めで止める。

「……はは。ここまでとは」

「満足したか？」

「いやはや、並のパワーの持ち主じゃないと思っていたがここまでとは」

ラオはどこか満足していた。

だが、今の動きは洗練されていたと思う。

拳の打つ角度、体重移動。

……ただの人間だが、この人は間違いなく武術の達人だ。

殺さないように戦うのは気のコントロールの一環にもなるし、この人と手合わせして動きの観察をするのはメリットになる。

どうにか、毎日やってくれないだろうか。

「いい動きをしていた。」

老いても体が覚えているのだな」

「おお、ラディッツさんのような人に褒められるのは嬉しいものだな」

ラオは笑顔で答える。

「よければ偶にでいいから手合わせをお願いしてもいいかな？ワシも最近はまだ運動をしていないせいかな、なまってしまっただな」

お、これは都合がいい。

「……いいだろう。毎日この時間、お前がやりたい時に声をかけろ、いつでも相手をしてやる」

「わかった」

この人はいい人だ。

俺はもうただで何も返してもらってない。

……出来る範囲で恩を返している。

しかし、還元できていない。

考えても仕方ない。

こういう小さいことをコツコツとやっていこう。

こうして修行は開始された。

ラディッツ、決断を誤る。

修行を開始して二ヶ月が経過した。

修行スケジュールはこんな感じだ。

起床後は気のコントロール正拳突き。

午後は大岩を背負って筋トレ。

この二つがメイン。

そして一週間に2・3回のペースでラオとの自由組手。

正拳突きは今は8秒ほど。

以前に比べれば気の消費も最小限にできている。

そして、大岩は重さになれたらさらに大きいものを探してひたすら筋トレ。

ラオとの自由組手で動きを真似て無駄をなくせるように工夫する。

ラオの拳法は静だ。

相手の動きを読み、隙をつく。相手の攻撃を捌き、カウンターをする。

後は基礎がしっかりしていて、技の一つ一つが洗練されている。

俺は一人の時はラオの技を盗めるよう、動きを真似し自分に取り入れる。

後は最近ではラオとの組手中、技を受け止める時に少しだけ気を集中して避けることを意識してやっている。

気のコントロールは少しずつできるようになってるが、細かいのは無理。

原作のベジータは見ただけで気のコントロールを覚えていた。

もしかしたら俺がラディッツに憑依した、それが原因なのかもしれない。気を完全に0にするにはまだまだかかると思う。焦らずゆっくりとだ。

後は何か戦いで役に立つ気を使った技を考えよう。

いわゆるキャラ独特の代名詞みたいな技を。

クリリンの気円斬然り、ピッコロの魔貫光殺砲然り。

戦闘で役に立つ……そんな技を。

先は長そうだ。

修行開始して、半年が経過した。

未だに乙戦士たちは襲ってくることはない。

もしかして警戒されてない？弱虫ラディッツは眼中にないってか？

……と一度思ったことがあるのだが、多分自分の修行で手一杯なのだろう。

俺が暴れたら襲いにくるかもしれないが、ベジータたちがくるまで行動を起こす気はない。

今は修行に集中した方が良いからだ。

この半年、修行の成果は出てきている。

気のコントロール正拳突きも今は一連の流れは5秒ほど。身体能力も上がった。

後は何となくだが、自分以外の気が分かるようになった。

まあ、方角くらいで詳しい数値はわからないが。

後はラオとの組手のおかげで俺の技は洗練されてきた。

やはりラオとの組手は取り入れて正解だったようだ。

あと気になるのは気のコントロール正拳突きの方かもしれない。

一ヶ月に1秒のペースで早くなっているのが気になるが、……

まあ、いい。わかりやすい。

とりあえず、このまま精進しよう。

そして、ここまで経過してわかったことがある。

戦い方は性格に起因すると。

原作ラディッツは臆病者、弱虫とかと呼ばれていたが、これはいいように解釈すれば慎重ということ。

その性格は戦い方に現れた。

ラオとの鍛錬の中で相手の癖や動きを読み、一瞬の虚をつくカウンターに長けていることがわかった。

それがわかれば後はさらに戦い方に合わせた技も考える。

残り半年、頭の中で戦うシミュレーションをしておこう。

イメージトレーニングだ。

修行開始から9ヶ月が経過した。

……いよいよもうすぐ。

確か原作ではベジータは月が出てるタイミングに合わせてくるから一ヶ月予想より早かったんだよな。

まあ、その月はピッコロに壊されたからもうないわけだ。

俺は今追い込みをしている。

修行の成果は上々。

気のコントロール正拳突きは1秒を切り、後は少しでも時間を縮めるのみ。

身体能力も技も技術も一年前とは比べものにならないくらい上がった。

気は方角が分かるようになった。

少しずつ気を感じるための感度は上がってきているし完璧に感じられるのは時間の問題だ。

それから何日か経つと、いきなり空が暗くなった。

おそらくドラゴンボールで悟空は復活したらしい。明日だな。

だが、原作通りなら界王様が悟空が界王星から地球に戻るまでの時間を考えていなかったせいで戦闘に遅れる。

今の俺の戦闘力がどれほどかはわからないが、ベストを尽くそうと

思う。

初めから参戦して、Z戦士の死亡を防ごう。

神龍出現後、俺は最後の確認で基礎をもう一度確認した。

9ヶ月目に入ってから修行の追い込みの為、ラオたちと食事を取ることはしなかった。

用意だけはしてくれていたようで、家に帰るとそこには大量の飯が用意されていた。

修行も大詰めの時期に一つ気になることがあるとしたらライムの様子がおかしくなった。

目にはクマがあり、少し青ざめていた。

何があつたのだろう。

気になるが、俺は気にせずにはいた。どうせ明日にはこの家を出るのだから。

こういうのは家族が対処するだろうと。俺は最後の追い込みだから自分のことで精一杯だ。

明日に備えなければいけない。俺はラオたちに悪いと思いつつも明日に家を出て行くと伝えた。

少し寂しがつっていたが、気をつけるようにと言われた。

だが、その行動は全て間違っていて、俺の考えていたことは全て崩れ去る。

それは神龍の次の日、ベジータ到着に備えて、家を出ようとした時のこと。

「何で……何で熱が下がらないのよ！」

「までキウリ！まずは落ち着くんだ！」

「レンモ、一度お医者様には見てもらったわ！それで出された薬をラ

イムに飲ませているのに！どうして」

「落ち着け二人とも」

何故か焦ったような……慌てているのか、大声での会話が聞こえたので、声が聞こえた部屋に向かう。

「何事だ騒がしい」

入ると皆顔を慌てていて全員の視線が刺さる。

なんだよ。

「ラディッツさん……ライムが！」

キウリはライムの名を呼ぶ。

俺はライムを見ると。

そこには顔を真っ赤にして苦しそうにしている姿が。

「何があった？」

「ライムが昨日から高熱が出て……医者にもらった薬を飲ませても下がるどころか上がる一方で。……あ！今度は40よ！」

「何故こんなになるまで……」

何故だろう？この疑問に答えたのはこの中で冷静なラオだった。

「数日前からライムはお前さんが何も言わずに出ていくことを恐れていた。だから帰ってくるまで起きていて、十分な休息をとっていなかった。それから食事を取る量も減ってしまって……」

俺のせいか？……でも、それならなんで。

「何故俺に言わない？そうすればこんなことにはならなかったはずでは」

「いえなかったんです」

俺の言葉を遮るようにキウリが答え、続ける。

「ここ数日、ラディッツさんは必死に修業していた。……その邪魔をしたくなかったのです。……それがまさか」

こんなことになるとは思わなかった。キウリは最後まで言わなかったが、なんとなく察した。

仙豆が有れば。

だが、仙豆は貴重だ。

そうか……なら、簡単だ。

都に連れて行けばいい。

「……医者は他に何を言っていた？」

「都の設備のある病院で見て貰えばもしかしたらと言っていた。だが、残念ながらワシらは誰も飛行機や自動車は運転できん」

連れていけば治るんだな。

「俺が連れて行く。毛布を持ってこい。包んで運ぶ」

「でも「早くしろー」……わかった」

何故俺まで焦ったかはわからない。

でも、ライムに死なれるのは目覚めが悪い。

「ラディッツさん、これを」

「ああ」

俺はラオから毛布と財布を受け取り、苦しんでいるライムを包み、空へと飛ぶ。

「ラディッツさん、よろしいので？」

「俺が原因でもある、責任は持つ！都はどの方向だ！

「ああ、ここからだ」と北東の方向にまっすぐ。この方向だ！」

空を飛び出せる限りの、ライムに負荷がかからない速さで飛んだのだった。

「頼んだ」

最後に何か聞こえたような気がしたが、気のせいだろう。

俺は気にせず止まることなく飛び続けた。

飛ばしすぎるとひ弱な地球人のライムでは負荷に耐えられない。

気を上げすぎると乙戦士たちに邪魔されるかもしれない。

1秒でも早く着くために早く飛ぶ。

だが、その出来事が起きたタイミングは最悪であった。

「?!これはー」

空を飛んでいる最中に大きな気が2つ現れる。

「くそー………なんでこのタイミングに」

これは神の悪戯か、それとも物語の強制力か、俺の運が悪いのが原因か。

「今……向かえば戦闘に間に合う………だが」

俺は苦しむライムをみる。

呼吸は先ほどよりも荒くなっている。

……俺に医学の知識はない。

もしかしてこのまま放っておいたら死んでしまうかも。

「俺は……どうすれば」

俺の出した結論は、

ライムを優先させることにした。

もしもこの子が死んだら悲しむ。

復活できるかもしれないが、人が死ぬというのは悲しい。

まだ幼い子供が病気で苦しみ死ぬ。俺には我慢ならなかった。

乙戦士たちはナメック星のドラゴンボールもあるから死んだら復活はできる。

それから飛び続けること一時間。

ラオから言われた方角に行くと、そこには大きな高層ビルが多くある町を見つける。

俺は急ぎで数多くあるビルの中から、大きな十字架のマークがある建物を見つけて、病院に入る。

「どうかされましたか？」

病院に入ると当直の職員なのか、女の人が俺の慌てた様子を見て聞いてきたので率直に伝える。

「急患だ。……頼む、この子を助けてほしい」

俺がそう言うと言職員は急いで人を集めてくれ、急ぎライムは病室へと運ばれたのだった。

ラディッツ、見参する

……結果だけいえばライムは症状がひどい風邪であった。
検査し、点滴をすれば治るらしい。

点滴は三時間ほどで終了するそうで、点滴の時間中、時間が進むにつれてライムの症状は改善していくのか、顔色が良くなってきた。

本当に安心した。

だが、状況は最悪だ。

ベジータとナツパは宇宙船で到着後街を破壊し、その衝撃で地震が起きた。それはテレビで放送されていた。

地球側の戦士たちが集まりサイヤ人たちと戦っている。

この内容は病院のテレビで映っていた。だが、おかしいことにテレビではサイヤ人という単語が出ていない。

宇宙人の侵略の疑いがある、とだけ放送されていた。

だが、俺が病院に着いてからその放送を見た時には手遅れであった。

状況は一時休戦しているらしく、テレビにはベジータとナツパ、ピッコロ、クリリン、悟飯は距離をあけて立ち止まっているだけ。

……つまり、ヤムチャ、天津飯、チャオズは死んでしまったということか。

「くそー」

俺は何をしているんだ。なんのために修業したんだ。

俺は何もできない。

「おじさん」

ふと、目の前に寝ているライムから声がする。

「ライム……よかった」

俺は心から安堵した。

ライムは俺の反応に少し微笑む。

「おじさん、やっと笑った。えへへ」

「ふ……」

今思えば俺笑った顔したことなかったか？記憶があやふやだが、多分そうなのだろう。

「おじさん」

「なんだ？」

ライムは俺の顔を見て、話しかけてきた。

何を言うのだろうか？

気になり耳をすませると

「行ってきたいいよ。おじさん、すぐく行きたそうな顔してるもん」

……この言葉にドキツときた。

子供は見えていないようで実はよく見ていると聞いたことがある。純粋な子供に見透かされているような鋭い指摘に驚く。

「ただ、一つ約束して」

驚くあまり何も反応できなかったが、ライムは言葉が続けた。

「急にいなくならないでね」

心が苦しい。

この子供は俺がした一年前の行動をここまで気にしていたのか。

俺が修行に精一杯で家に遅く帰っていた時は急にいなくなると思わずと起きていたのか。

……俺はどこまでダメなんだ。

「ああ、約束しよう」

俺はライムを安心させるため、返答した。

「やくそくー……気をつけてね」

「ああ」

最後に安心したのか、ライムは満足したような表情で寝た。

俺はライムが寝たのを病院の看護師に持ち合わせが少ないから金を取りに行くと話し、このまま入院させてもらうように頼み病室を出る。

ライムとまた会うと約束した。

その約束を守るため、必ず地球を守る。

俺は戦場へと向かった。

少し時間が遡る。

それはベジータとナツパが地球に到着した時。

「これはどうなってんだ？」

「ラディッツのやつ……ここまで無能だとは思わなかったな」

二人が地球に着いた時、一番に思ったことは何故地球に人がいるという疑問だった。

「まさかあの野郎……一人でやることに怖気付いて俺たちがつくのを待っていたな？」

「……サイヤ人の恥晒しが！」

ナツパの言葉にベジータは怒る。サイヤ人の誇りを大切にしている二人だからこそその反応。

「どうする？」

「殺すに決まっているだろ！」

ナツパとベジータはスカウターを操作する。

「?!……これは」

「ほう……ラディッツのやろうは殺されたかもしれないな」

スカウターを操作した二人は映しだされた数値に少しだけ驚いた。ラディッツを一先ず殺すため起動したが、この地球には戦闘力1000以上の反応が複数ある。

「一つや二つじゃない」

「狼狽えるな、この中で一番高い戦闘力のやつを探せ」

ベジータとナツパを二つの反応に狙いを定めて、出発した。
その反応は悟飯とピッコロの二人。
地球にいるZ戦士たちは気を感じて一つのところに集まった。

サイヤ人対地球陣営の戦いは進んだ。

サイヤ人の二人に損害はなく、逆に地球人側は既に犠牲者が出た。

サイバイマンとの戦闘でヤムチャは自爆で殺され、チャオズは自爆でナツパを殺そうとするが無駄に終わり、天津飯は最後の決死の覚悟で全力の技を放つがナツパには通用しなかった。

このまま、ナツパは残りを片付けようとした時、ベジータは止めるように言う。

理由は悟空を待つためだ。

悟飯たちは強くなり戻ってくると言った。

サイヤ人の裏切り者。だからなるべく苦しませて、悶え苦しませ殺すために。

三時間。

それが猶予の時間。

そして、三時間まであと20分というとき、苛立ちを隠せないナツパは近づいてきたテレビ局の人間たちを発見した。

ナツパは暇潰しのために、破壊行動に行こうとした。

その瞬間であった。

突然、ベジータの持つスカウターが反応した。

「おいナツパ。少し待て」

「どうしたベジータ」

「今反応があった。誰かこっちに向かっている。後2分ほどで到着す

る」

「待たせやがって、カカロットのやろう」

それはクリリン、悟飯、ピッコロも感じていた。

「この気はまさか!」

「お父さん!」

「孫悟空……やっとか」

3人とも遅れた援軍に歓喜する。

しかし。

「ふ!はははははは!」

突然笑ったベジータに全員の視線が無く。

「これがお前たちの期待したカカロットか?……待つて損したぜ」

「おい、教えろよ。カカロットがどうしたんだ?」

サイヤ人の反応に3人は戸惑う。

「たった戦闘力3000程度のやつだ。……可哀想になってきたぜ」

「戦闘力3000か……ラディッツよりかは強いな!ふはははは」

「お父さんを笑うな!」

悟飯は二人の反応に怒った。

そして、ベジータはある提案をする。

「ベジータどうする?カカロットがくる前にやっちまうか?」

「まあ、後2分程度で到着する。……せつかくのお待ちかねの援軍だ。

待つてやろうじゃないか」

「そうだな」

クリリン、悟飯、ピッコロはサイヤ人二人の対応に安堵した。

このまま、戦っても勝率は少ない。

悟空がいればなんとかなる。

待つていた援軍に歓喜するのだった。

だが、その期待は裏切られることになる。

それから2分後、向かってくる戦闘力の持ち主の正体が見え始める。

「あれ?……お父さんじゃない?」

悟飯のその言葉はクリリンとピッコロも思ったことだった。
そして、3人は焦りだす。

「よお……待たせたか？」

その発言した男は悟空ではなかった。

長い黒髪にギザギザした。サイヤ人特有の髪型。

ナツパが着ていた同じ戦闘鎧を来ている人物。

それは一年前、悟空とピッコロが二人で戦っても全く歯が立たな
かった人物。

「チツ……期待して損したぜ。……今さら何しに来やがったー」
ベジータは苛立ちを増した。

その恥晒しのサイヤ人に。

「ーラディッツ」

それはどちらの陣営にも歓迎されないラディッツだった。

ラデイツツ、戦闘開始する。

「よお……待たせたなあ」

戦場に着いてからなんとなく格好つけたものの、皆の様子を見てや
らなきやよかったと思った。

だって。

「チクシヨウ！」

「そ……そんな」

「なんでこんな時に！」

ピッコロとクリリンは悔しがり、悟飯は怯える。

……いや、ね。俺も一応仲間な訳で。

ま、言っても信じないと思うが。

一方、サイヤ人側はと言うと。

「のたれ死んでればよかったものを」

「へ！殺されに来たか？」

さて……俺、これからどうしよう。

とりあえず、ベジータたちに謝罪するか？と色々考えていると、ベ
ジータが俺に話しかけてくる。

「まあ、いい。……何故星の掃除をしなかったかは後で聞くとして
……多少は強くなったらしいな」

「おい、どうしたんだベジータ早くこの野郎を」

「待てと言っている」

「だが」

未だ、ナツパはベジータに反論する。ベジータはチツと舌打ちをす
ると話し始める。

「戦闘力が僅か一年で倍近くに上がった。……まあ、スカウターの故障
かもしれないが……」

何故ベジータは俺を庇うようなことを。

俺を殺すとばかり思っていたが。

だめだ。話の展開が読めない。

殺すのか？生かすのか？

「僅か一年で今まで上がることのなかった戦闘力が倍になった……。それが本当ならこいつの利用価値がまだある。なんだ？俺に反論する気か？」

「いや……すまなかった」

ナツパ。

お前どれだけベジータ怖いんだよ。

「このゴミどもを一人で片付けろ」
なるほど。

そう来たか。ここで領けば俺はベジータの許しを得られる。
だが……。

「ベジータ」

「……なんだ？」

俺は悟飯たちのいる方向に歩く。気を上げる。

「ここ、地球の人間は自在に戦闘力を操れる。このようにな」

「……ほう。…戦闘力が……3200……3500……4000
……4100……なるほどなあ」

「な！……4100だと！あの弱虫ラディッツが！やっぱり壊れてんだ」

確かナツパの戦闘力4000だったっけな。

一応4000程度まで気を上げてみたが、残念ながらこれで八割……ナツパを超えたってことか。

本気の戦闘力は5000ちよつとつてところか。まあ、これで相手の気を感じること、比べることの感度は間違っていないことがわかった。

「……どうするピッコロ」

「……覚悟を決めるしかないだろ」

「……お……お、父さん」

あーあ。どうやら悟飯たちは怯えてしまっているらしい。
ここで気にしたら負けだな。

「そしてもう一つ。10ヶ月程度、この星で過ごしてわかったんだが

な。俺はどうやら……」

俺はその場で立ち止まり、片手に気を溜める。
そして。

「この星がどうも居心地がいらいらしい」

俺は振り返り雷の形状のエネルギー弾、サタデークラッシュを放ち、ベジータとナツパがいた場所は爆発した。

この一撃は区切り。

ベジータたちとの対立を意味する。

そんなに威力は込めていない。

「……な………一体どうなって!」

「え?!」

「……」

クリリン、悟飯は驚き、ピッコロは黙って俺の様子を窺っている。
目の前で起こっていることに整理がついていってないんだ。

爆風はすぐに収まった。

「殺す……殺してやる!ベジータ、俺にやらせてくれ!」

「チツ!………ここまで愚かだとはな………好きにしろ」

ナツパとベジータは苛立っていた。

さて、敵対の意志は示した。

「お前たちは下がってろ」

俺が味方だと理解させるにはまずは一人サイヤ人を倒すのが手っ取り早い。

ベジータは静観するらしく、相手はナツパただ一人。

初陣だ。

さあ、ここからが正念場だ。

「お前たちは下がってろ」

クリリン、ピッコロ、悟飯の3人は目の前で起こっていることが理解できていなかった。

それは突然すぎた。

去年敵であったラディッツが何故か仲間であるはずのサイヤ人たちと対立し、戦闘を開始した。

そして、目の前で起きている戦闘を茫然と見ていた。

「も……もしかしてあの人……僕達の味方なのかな？」

「そんなはずあるか。あいつは非道なやつだ。……だが、分からん。何故」

それは疑問。

去年ラディッツが行ったことと今なぜ地球のために戦っているのかがわからない。

「まあ、なんにせよ、同族で潰しあってくれるとは好都合だ」

ピッコロは片方が勝手に死んでくれるのなら願ってもないのだ。

願わくば相打ちをしてくれれば。

そう願うのであった。

「おおおお！」

ナツパとの戦い。

それはお互いの雄叫びからは始まった。

ナツパは右からの拳打。

俺はそれにたいし左腕に気を溜め、正面から受け、右の拳打をナツ

パの顎めがけて攻撃。

「うらあー！」

「くー！」

俺の拳打を当てることが出来たが、受けた衝撃を受けきることが出来ず後ろへ退く。

「はあー！」

体勢が崩れていたこともあり、俺は迎撃のためエネルギー弾を二発放つ。

ドカン！

エネルギー弾は直撃したが、効き目はなく。

「おらおらおらー！どうした！その程度か？」

ナツパはすぐに距離を詰め、拳と蹴りの高速の連撃がくる。俺はナツパの攻撃を直接受け止めることはせず、避けるか捌くを繰り返す。

荒削りなナツパの攻撃の動きは読みやすい。

攻撃をするタイミングで隙ができる。

多分あまり考えて戦闘をしてない。向かってくる敵を正面から叩き伏せる。受け止める。

自分の本能やセンスに任せている。

だが、だからこそ脅威だ。その単調な攻めはまさに剛。一発の攻撃が重く、戦闘力が同じだが、気を左腕に溜めたのに受け切ることができなかった。

一発もらったら終わる。

細心の注意を払う。

だが、防戦一方では勝つことはできない。今の少しのやりとりで狙うところはわかった。

「おらおらおらおらおらー！」

狙いは攻撃と攻撃の一瞬の隙。

俺は隙を突いて後ろにバク転して手を地面につけ、ナツパの顎に蹴りをかます。

「おりゃー！」

「ぐわああー！」

ナツパは後ろに退き、倒れる。

その隙に距離を空けて間合いをとり、エネルギー弾を再び放ち迎撃する。

ドカーン！

こいつもまともに当たった。

「ふう……ふう……ふう……」

俺は呼吸を整え様子を窺う。

今ので動けなくなれば良いのだが……。

「ふはははは。今のは効いたぜ？……少し痒いなあ？」

「……………チツ！」

こいつ、化け物かよ。顎にクリーンヒットしたのになんで平気でいられるんたよ。

脳を揺らすことが目的だったのだが……少し厄介だな。

ケロツとしてるとはアイツはタフすぎる。

少し戦闘力が上回っていたから、行けると思ったが……。

こいつは戦闘力以上の攻撃力に持ち前の耐久力。

しょうがない。

出し惜しみはしてられない。この期間で身につけた技のお披露目と行こう。

修行の成果を見せてやるよ。

ラドイツツ、翻弄する

「ふう……………」

俺は深呼吸し、昂る気持ちを落ち着ける。常に冷静であれ。それが今の俺に大切なことだ。

今から使う技は俺の戦闘スタイルに合わせている。しかし、実戦で使うのは初めて。

形にはできている。タイミングも何回もシミュレーションした。

緊張するのは仕方ない。だが、雰囲気は飲まれるな。俺はナツパに善戦している。このまま何も秘策なしで戦ったら埒があかなくなるし、下手したら俺が負けることも。

だからこそ望みは短期決戦。

何かさせる前に、ナツパの普段通りの戦いをさせることなく……………終わらせる。

「どうしたナツパ？……………手こずってるようだが……………手を貸してやろうか？」

突然のヤジが飛んでくる。

冗談でもやめろよベジータ。

こっちはナツパ一人で手一杯だったの。頼むから静観しているよ。

「大丈夫だ。少し準備体操をしただけだ」

「そうか……………ならさっさと片付けろ」

よかった。

流石に静観してるよな。信じてたぜベジータ。だって原作でもナツパやられるまで何もしてなかったしな。

ナツパはベジータと会話を終えると俺を見る。

「どうした？さっきから逃げてばっかじゃないか？戦闘力が上がっても所詮は弱虫ラドイツツだな」

「言ってる……………はげー！」

「……………なにっ？」

ブチツと血管が浮き上がる。いや、見たまんま言っただけじゃん何キレてんだよ。

罵倒されたから仕返したただけなのに。

その後は沈黙が続いたが、長くは続かない。とりあえず仕切り直し
か。

「いくぞおおお！」

「こいー！」

ナツパはまたも攻めてくる。

だが、俺も正面から戦い続けるほど人は良くない。……仕掛ける。

「はあああ」

俺は両手から複数の赤色のエネルギー弾を出し、ナツパの目の前に
2つ。俺の周囲に8つほど放つ。

「こんなもの……ふううごお！」

ナツパがエネルギー弾に当たった瞬間爆発した。これは触れたら
爆発する効果をもつ。

威力もそれなりにあるので、多少警戒が必要だろう。だが、この技
はただ爆発するだけの技ではない。

実はもう一つ効果がある。

だが、今の二発だけで少しだけ怯んだ。攻撃を緩めない。

俺は接近し、殴りかかる。

「どりやりやりやりや！」

ナツパの巨大な体に拳と蹴りの連打を喰らわす。上半身の腕の付
け根、そして顎。

ただ、複数の場所に攻撃しても意味がない。

攻撃の仕方を変え、急所を狙う。

だが、ナツパもすぐに立て直す。

だから俺は誘いをするためあえてナツパの攻撃を受け後ろに後退
する。この時、ダメージを最小限にするため、殴られると同時に後ろ
に飛ぶ。

「調子にのるな！」

「ぐあー！」

「後方に飛ぶ俺を追撃するナツパを俺は攻撃する。だが、ナツパはそのまま追撃してくる。」

「……流石に思い通りに動きすぎだろ。
まあいい。」

俺は空中にセットしてある爆発するエネルギー弾をー。

「くらえー！」

ナツパが赤い気弾の前を通りすぎるタイミングで一定方向に操作してぶつけ、起爆させる。

「ぐわあー……くそー！」

これが二つ目の効果。設置してある気弾を一定方向に飛ばす。

この触れれば爆発し、一定方向にだけだが操作できる赤い気弾。名をサースデイレイ。

原作のキャラたちの技を参考にした。「スーパーゴーストカミカゼアタック」「繰気弾」の二つ。

当たったら爆発する。気弾を操るこの二つの要素を組み合わせる。残念ながら気に意志を植え付けることやヤムチャのように気弾を完全に操ることはできなかった。

だから、単純な動作に爆発。

威力もあるし、動きが単純な分、気弾そのもののスピードがある。使い勝手は少し悪いかもしれない。

一回一回気弾の場所の把握と気弾を操作しなきゃいけない手間がある。

だが、使い方によっては戦闘の幅は広がる。相手に警戒させ、時には目眩しにもなる。

「はあああー！」

俺はサースデイレイがナツパに着弾すると接近し、蹴りで右腕の付け根に攻撃をする。

「おりゃー！」

「ぐわああー！」

ナツパは後方に飛ばされて背後の岩山に激突。

「サタデークラッシュユー！」

ラディッツがよく使う技だ。

雷の形状の気を放ち、着弾、爆発した。

「……マジかよ」

爆風から少し時間がたつ。

見えたのは爆風の影響でた土埃、そこから現れる大きな人影。

ナツパよ……お前という奴はどこまでタフなんだ。その耐久性は

……反則だろ？

「ゆるさねえ……」

ブチギレてやがる。

キレたいのはこっちだよ。

俺の蹴り本気だったぞ。

気にしても仕方がない。切り替える。

ダメージを蓄積させれば必ず勝機はあるはずだ。

「ふうふううう」

俺は一度考えを切り替えるため、深呼吸をする。

苛立つと人は集中力が下がる。考えが単調になる。判断力が鈍る。

俺が付け入るのはその隙、意表をつく。ただの攻撃ではダメなら別の手法を。

俺は次の技を使う準備のため、右拳に気を集める。

「いくぞナツパ！」

声を上げ、今度は俺から攻める。

俺の最高速度で向かうのに対してナツパは。

「死ねラディッツー！」

ナツパは俺を受けることなく、攻撃をするようだ。俺からの攻撃ではダメージが少ないなら今度はナツパの力を利用する。

俺は接近し、右手に溜めた気を手から肩の方向に気の流れを作る。

ナツパの左からの拳打をずらしながらワザと腕に当てる。

「なに?！」

ナツパの拳打は俺に当たることはなく、流れるように俺の背後に飛ばされる。

気の流れを利用し、自分の体に気の激流を発生させる技「ウエンズ
デシエド」

ナツパは気の激流に触れた瞬間、俺の後方に体勢が崩れ地面に顔を
ぶつける。

「ぐえええー！」

ナツパは完全に倒れ隙だらけに。

俺は倒れるナツパに迎撃をする。

倒れるナツパを踏みつけるように上から頭を両足で踏みつける。

「どりゃ!!」

「ぐはー！」

ナツパの顔は地面に埋まる。

今度は表と裏の二重構造での攻撃。

俺はそのまま空を飛び、もう一度攻撃。

「サタデークラッシュュー！」

放たれたエネルギー弾は着弾し爆発する。

殺すことを覚悟で放った。

どうなるのだろう。

俺は少し離れた位置に移動し、着地する。

「す……すげえ……倒しちゃった」

ふと、右後ろの方から感心の声が。

だがなあ、クリリン。それは何かのフラグを立てるのはやめろよ
な。

……どうだ？ナツパは次はどう反応する？

「くそおおおおお!!」

その雄叫びが聞こえると、強い風圧があたり一面に起こる。

それは台風並みに強かった。

「くそー！くそー！くそー！」

地団駄をしイラつきマックスのナツパ。

……俺はサイヤ人を……いや、ナツパを見誤っていた。

これがサイヤ人ナツパ。

アニメでは悟空に圧倒されていて、ベジータに花火の如く打ち上げられたナツパ。

ナツパは当て馬ポジションにいたが、やはり強い。正直にいえばこれで勝負を決めたかった。

「おのれえ……よくも俺様の歯を！」

よく見れば歯が抜けてるけど……気にするところおかしくないか？……まあ、いい。

それにしても少しやばいな。

もしかして俺の攻撃通じてないのか？

……落ち着け。冷静になれ冷静に。

次の技に備えろ。

どうくる？どう動く？……あれ？

「……今度こそ……あ、れ？」

ナツパの行動に警戒するもナツパは突然動きが止まり、ふらふらし始めた。

「何でだ……体が」

ナツパは自分の体の異変に気づき始めた。

ああ……やっとか。

これだけ攻撃をして……ようやく効果が出たか。

致命傷になり得る、本気の攻撃を何回も受け、脳を何回も揺らし、何度も急所に攻撃を打ちこみようやくダメージが蓄積されて、効果が出た。

「どうしたナツパ？」

「はあ……はあ……チクショー……俺は名門出のエリート戦士だ！それを貴様のような臆病者に舐められてたまるか！」

俺は少し煽り、ナツパはさらにイラつきが増す。

よし……怒れ……冷静さを失え。単調になればなるほどお前の動きは読みやすい。

だが、世の中そんなに都合は良くない。

「愚か者め！頭を冷やせ！異様な技に翻弄されおつて！落ち着けば対処出来るはずだ！」

「はあ…はあ…ありがとうよ、ベジータ」

ナツパは静観しているベジータの一言で冷静になる。

余計なことを…このまま俺有利に戦いを進めたかったが。

「俺様としたことが、臆病者相手に冷静さを失うとはなあ…一族の恥だぜ…はあああ」

落ち着いたナツパは気を高める。体に異変があるはずなのに、まだ動けるのかよ。

ナツパは気を高め、身体中が黄色に光る。

そして、ナツパは右手を少し上げる。

「はあああ」

ふと、ナツパは俺の背後に視線を向け、右手に気を高めてあげようとして…こいつ！まさかクリリンたちも巻き込む気が！

「全員消えちまえ！」

「くそ！」

俺は急ぎクリリンたちの前へと急いで移動。

あいつ、全力で放ちやがった。

ピッコロならともかく悟飯とクリリンは確実に死ぬ！

「何が！」

「あわわわ」

「空へ飛べ！」

クリリン、悟飯は何か分からず戸惑い、ピッコロは今起きようとしていることが何となくわかったようので避けようとする。

くそ…ナツパが巻き込むとか考えていなかった。

「貴様！何を！」

俺の行動にピッコロは反応する。

よくこんな状況で反応できるものだ。

「はあああ！」

ピッコロたちに近づいたあと、俺の足元に…気を放ち足元の爆発の威力を抑える。

ドカーン!!

爆発と同時に俺を含めた3人がいる場所以外が足元から爆発した。

その爆発での被害は抑えられ、3人を守ることができた。だが、その一瞬の気の緩みから命取りになった。

「うおおおおー！」

爆発の煙の中から大木のようなナツパの拳が迫っていた。

ラゲイツツ、一瞬の覚醒

突然だが、スポーツを行なっている人、武術をしている人ならば心当たりがある人は多いのではないだろうか？

極限に集中力が増したとき、頭が真っ白になりプレーに集中していた時にはなおさら起きるだろう。

突拍子もないタイミング。普段練習をしていないのに突然体が反応し自分でも驚くようなパフォーマンスをすることがある。

だが、そのパフォーマンスをした張本人ですら何故そのような動きができたか疑問を持つ。

インタビュ어나家族、友人などが聞かれると誰もが皆こう答えるだろう。

「体が勝手に反応した」……と。

俺は悟飯たちを守った。だが、ナツパの攻撃はそれだけでは終わらなかつた。

ナツパは爆風から奇襲。完全に不意をつかれた。ナツパの拳は俺に迫っていてどうやったってかわせない。

防御も取れない。これは致命的な一撃になるだろう。

……本来ならば。

目の前に迫る拳。

しかし、このような局面にも関わらず俺は冷静であった。

俺は気がついたら合掌していた。

無意識であった。体が勝手に動き、気が付いたらいつもやっていた流れの通り、気を一点に集中させ、両拳を腰につけていた。この一連

の流れで放たれる一閃の拳は俺の最大火力。

そこまでの動作が終了した時、俺の視界はクリアになっていて、ナツパの動きはスローモーションに見える。

ナツパの拳が俺に迫る。

……どこに攻撃すれば良いのだろう。

こいつの耐久性はすごい。このままやり合ったら……この機会を逃したら次のチャンスはない。

ここは確実に倒すには……。

「ふうー」

狙いを定めると脱力し、迫るナツパの拳をぎりぎりまで引きつける。

そしてー

「ふん！」

ーナツパの鳩尾に拳を打ち込んだ。

「グツ……ケホ、ケホ」

「ふう……」

俺は目の前にいるナツパから拳を戻す。

ナツパは呼吸がうまく出来ないのか、苦しそうにしている。

……勝負あったな。

まさか、こういう結末になるとは予想外だった。

ただの気のコントロール訓練でやっていたことでナツパとの勝敗が決まるとは。

「ち……ちく……しょう」

ナツパはそのまま倒れた。

俺はそのままナツパを蹴飛ばし、ベジータのいる方向に飛ばす。

ベジータは俺を見て驚いていた。

「もうナツパは動けないだろう。介抱してやれ」

ナツパの生死はベジータ次第。

まあ、おそらくは殺されるかもだが……今心配すべきは。

「お前たち……無事か？」

俺は後ろにいる3人に声をかける。

ここまで体を張ったが、あれだけの衝撃があったんだ。怪我している可能性がある。

「……俺は何ともないが」

「僕も……その……ありがとう。助けてくれて」

よし、クリリンと悟飯は無事か。

「……貴様……何のつもりだ？」

いや、そう言われても何とも言えば？

原作キャラだから。助けたかったから。

ここは。

「罪滅ぼしのつもりだ……。この一年……ある地球人に世話になり考えを改める機会があったんだ」

「それを信用しろと？」

「おいおい待てよピッコロ！」

俺とピッコロの会話中、クリリンが割って入ってくる。

「疑う気持ちはよくわかるが、今はそんな時じゃない。少なくともラディッツは俺たちを助け、一人サイヤ人を倒した。今はそれでいいじゃないか！」

クリリンは俺とピッコロの中に割って入ってくれた。

本当にありがたい。だが、まだ完全には警戒心は取れていない。

「それにしてもすげえよ！俺たちでも勝てなかったサイヤ人に一人で勝っちゃうなんて！そんなやつが味方してくれるなんて心強いぜ！」
「そうだよピッコロさん！たしかにラディッツさんはひどいことしたけど、心入れ替えたって言ったし、それに僕たちのこと守ってくれたよ！」

……この二人どれだけ純粹なんだ？人の良し悪しがわかるのか？いや、今はこの考えはよそう。ベジータに集中しないと。

「信用できないのはわかるが今は我慢してくれ」

「……チッ！……いいだろう。だが、少しでも妙な真似してみろ？そのときは」

何をやられるのだから、いろんな意味がありそうだが、おそらく殺されるかもな。

とりあえずこれで協力関係を築けた。
ピッコロは妥協しているが。

「肝に銘じよう」

返す言葉としてはこれが妥当だろう。

話が一段落つき、俺はベジータに視線を戻す。

ベジータは倒れて助けを求めるナツパを見ていた。

ナツパが手を伸ばし、ベジータはその手を取ったその瞬間、空へと投げ飛ばした。

「なにを！」

「そーれ！」

「何を！ベジータ！ベジータ！」

「動けないサイヤ人など必要ない！……はあ！」

お、これは伝説のセリフか。

いや！そんなことを気にしてる場合じゃない！てか、なんつう気だ。

ベジータはエネルギー砲を放ちナツパを消し去った。

「ベジータ……何故ナツパを」

「足手纏いはいらなからな」

目の前にいる強者のベジータ。

ナツパの時とは違い、こいつには……絶対には勝てない。

今の戦闘力が18000で俺が5000くらい。

勝つのは難しい。

どうするか。

とりあえず、3人は遠くに行かそう。

悟空がくるまでは時間を稼がなきゃいけないし、このまま3人は戦ったら殺される。

この場で時間を稼げるのは俺だけだ。

「お前たちは遠くに行っている」

「逃すと思うか？……サイヤ人の裏切り者、歯向かう奴は生きていることを後悔させんなあ？特にそこにいるガキ……そいつはただでは殺さん。カカロットが来るまで徹底的に苦しみ、目の前で殺してや

る」

「……ベジータ」

……マジかよ。

物語登場当初はここまで非道だったのかよ。悟飯怯えちゃってるじゃん。

まだ普通なら幼稚園に通っているような子供なのに。

「だが、まずは貴様だラディッツ……戦闘力1000程度のゴミに手こずり、誇りである尻尾を失い、のうのうと生きていたお前はサイヤ人の恥だ。……楽に死ぬると思うな？」

なるほど。俺のことをそのように思っていたのか。もともと評価が低かったが、それがもう最底辺になり、無関心だったと。

それで今の地球の現状を見て聞くまでもない……と。

正直勝ち目はない。界王拳のような戦闘力を倍にする技はない。

最後ナツパにとどめを刺した技……それなら唯一勝機を見出せるかもだが、不安要素が多すぎる。

何故技として出せたのか、何故視界が一瞬スローモーションになったのかもわからない。

そんなものに縋るのは良くない。

「クリリン……だったか？」

「え？……ああ」

「カカロットは……ここに来るんだな？」

「ああ。……だけど、いつ来るかまでは」

クリリンの声は震えていた。

本来の物語では三時間の待ち時間が終わった後、クリリン、悟飯、ピッコロの3人で戦う。

悟空が来るまでにピッコロは殺され、悟飯とクリリンはボロボロに。

その中で悟空が登場する。

だが、その本来の物語からはほど遠く、俺がナツパを倒した。

3人は無事だ。

「俺がベジータの相手をし、カカロットが来るまでの時間を稼ごう」

「?!……ここはみんなと一緒に戦うべきだ。そうすれば一矢報いることが出来るかもしれない」

「そうだよ……ここ、怖いけど……僕だって」

だが、悟空が来るまでに時間を稼げたのは相手がナツパだったから。

ベジータは別格だ。

少なくとも俺の実力の三倍以上。

下手したら殺される。

「やめておけ……無駄死にする気か?」

「理解が早くて助かる」

「……チツ」

ピッコロは冷静に判断する。

ベジータの気を感じただけで底知れぬ気を察するのはさすがだ。

殺されるのは俺だけでいい。

「何をしている!早く降りてこい!……まさか逃げる相談でもしているのか?」

ベジータは声をかけてきた。

もう、これ以上は待つてくれないかもな。

「少し離れている。……心配することはないさ。1秒でも長く稼ぐ。

……死んだとしてもな」

死ぬ気で時間を稼ぐ。

どうせ殺されるのなら地球のために。

恩を返す。

だが、簡単にはやられない

「場所を変えておくか」

「……ああ、そうしてもらえるとありがたい」

せめてこれ以上被害を出さないためにと物語でもクリリンは悟空に頼んでいた。

ヤムチャと天津飯の遺体があるからと。

俺の意図を察したのか、クリリンは礼をいう。

俺は地上に急降下する。

「逃げてても無駄なことは良く理解しているな」

「何年の付き合いだと思っっているんだ?……ベジータ」

「ふん」

とりあえず提案するか。

「場所を変えたい」

「……好きにしろ。同じことだ」

これで心置きなく戦える。

圧倒されボコボコにされるだろう。

だが、ただではやられない。

せめて一撃だけでも。

俺はベジータと共に移動した。

「……どうする?」

それはラディッツとベジータが戦う場所を移動した後クリリンが悟飯とピッコロに問いかける。

「俺は残る。……どうせ孫悟空が来るまでにあいつがやられたら死ぬのだからな」

「なら俺も残る。……足手纏いかも知れないけど」

「僕も!」

ピッコロの言葉に悟飯とクリリンは同意するようにお互いに頷く。できることは少ない。だが、地球の運命はラディッツにかかっている。

ベジータはもう悟空以外には対抗できない。

もしかしたらラディッツならもしくはは……そう思うも本人が勝ち目はないと、時間を稼ぐので精一杯だと断言した。

それほどまでの強者なのだ。

3人はラディッツとベジータがいる場所に向かうのだった。

ラドイツツ、圧倒される。

「ははははーどうしたその程度か？」

「おりやりやりやりや！」

「ふん！」

「うあー！」

ベジータと戦闘が始まり数分が経過した。

だが、完全に遊ばれている。

出来るだけ得意の地上での戦いをする様にしているが、それでも全く歯が立たない。

攻撃は全て捌かれ、容易に攻撃を食らわせられる。

くそ！ベジータとんだだけ強いんだよ。

ベジータとの力の差は開きすぎている。それを認識させるかの如く、天と地程の実力がある。

攻撃を食らった瞬間エネルギー弾を飛ばし、背後にある岩山にぶつかる。

「ぐふー……くらえええー！」

ドカン！

俺のエネルギー弾はベジータに直撃した。

だが、全く効いていない。

「さっきナツパにした技はどうした？使わんのか？」

ベジータは歩いて近づいてくる。

「さっきの技……正拳突きか。いや、あれなんで使えたのか分からないんです。」

だが、そう素直に言っても信じてくれなさそうだ。

「…ケホ…ケホ……使い勝手の悪い技でね」

「ほう……そんな技にナツパはやられたのか……間抜けとしか言えないな」

絶望感を与えさせ、ゆっくり苦しめ殺す。

……それがこれか。

完全に心を折りにきてやがる。

……どうするか。

「はあ……サタデークラッシュ！」

「効かん！」

会話の最中エネルギー砲を放つ。

しかし、それは簡単に別方向へ飛ばされる。もう気がどんどん少なくなっているせいか、それほど威力は出せない。

それに気を溜めて撃てば強い攻撃を繰り出せるが、それをするとベジータに物理的に潰される。

……どうすれば。

「……どうした？ ナツパに使っていた技は他にもあっただろう？……ほら、やってみろ。もしかしたら俺に一撃くらい与えられるかも知れないぞ？」

「……くそー！」

何か……何かないか。

やつに隙を与える方法は……あれ？

2つ……どんどん気が上がっている？ ピッコロたちが少し離れた位置にいるのは知っていたが。

……まさか援護をしようとしているのか？

それと……大きな気がこつちに向かってきている。

……ああ。あと少し。

あと少しで悟空がくる。

もしかしてピッコロたちは悟空が来ることを察してこのような行動に出ているのか。

あと少しで悟空が来るから時間を稼ぐために。

そうだ。この時のベジータは気を探れない。

スカウターも戦闘の邪魔になると思い外している。

ベジータはピッコロたちが何をしているかはわからない。

だから、隠れた位置で気をためる大技を繰り出そうと準備し、隙を窺っているのかも知れない。

だが、なかなか隙ができないのか。

……なら。俺がすることは。

「ほう。……次は何をするんだ？」

「サーズデイレイ！」

俺は周囲にサーズデイレイを作れるだけ……俺がベジータに最後の一撃だけ技を放てるだけの気を残して俺の周囲にエネルギー弾を放つ。

「それは爆発するやつ……だったな。……舐めてるのか？……これだから弱虫ラディッツと言われるんだ。焦って戦い方が単純になるぞ？……はああ！」

ベジータは周囲に気を放ちエネルギー弾を破壊、周囲は爆散し煙で視界が塞がる。

それと同時に俺は次の技の準備にかかる。

「ほう、今度はなんだ？初めてみるやつだな？……まあ、なにもさせる気は……?!」

話している途中で何かの異変に気がつく。

気を探れない奴ならば視界が塞がれば打つのに抵抗感があるだろう。

だが、乙戦士たちは違う。

気を読み……目だけではなく体の感覚で感じ取る。それを当たり前でやっているがサイヤ人にはできない。

ベジータが気を探れていれば多少違ったが、今だからこそ出来る奇襲攻撃。

「気円斬！」

「魔貫光殺砲！」

「なに！」

クリリン、ピッコロは自分の技で最も強力な技を放つ。突然の攻撃にベジータは焦る。

貯めるのに時間がかかる、相手を切断する気円斬に、気を一点集中させ貫通力にすぐれている魔貫光殺砲。

これが当たれば良いのだが……。

「小癩な！」

ベジータは上空に跳躍して避けた。

……マジかよ。完全に死角からだろ。

だが、これでいい。その一瞬の先は致命的だ。

よくやったよピッコロ、クリリン。

これで技の準備は整った。

「くらえー……チューズデサルトー！」

俺は全身にエネルギー弾の気を纏い、右肩部分に気をため、全力でベジータに特攻する。

チューズデサルトは全身特攻技。全ての防御を捨て本気で捨て身タックルをする。

特攻することに全てをかけるので、今ある技の中では最速で最強。

また、他の技のようにためる時間があまりかからない。

技の効果は絶大だ。

「くたばれー！」

「なにーぐあー！」

全力のスピードに技の威力が上乘せされる。流石のベジータも避けられないようだ。

だが、この技はこれだけでは終わらない。

エネルギー弾を体に纏っている。

特攻でぶつかり、俺が纏っていたエネルギー弾はそのままベジータにまわりつき。

そして。

「はあー！」

俺はそのエネルギー弾を爆発させる。

二重に仕掛けられた二段攻撃。これは流石のベジータにも効果があるだろう。

ベジータは背後に飛ばされ、岩山にぶつかる。

ただぶつかるだけではなく、複数の岩山を貫通していた。

「へっ、ざまあみろ」

つい、その言葉が出てしまう。

今の一撃が初めて与えた攻撃。

次は右足か。

だめだ。痛覚が麻痺して痛み感じねえわ。

でも、ここで気を失うわけには。

俺死ぬかもな。

……あ、そうだ。そういえば一つベジータは勘違いしていたんだっ
た。

俺の尻尾についてを。死ぬ前にこれだけは訂正しておこう。

「……一つ……誤解していることがある。少しくらい話……聞いてく
れねえか？」

「なんだ？藪から棒に……な！」

「ぐああああ！」

次は左腕を踏み潰されたか。

「それでなんだ？」

つまり、話すには四肢一本ってか。笑えない冗談だ。

「……俺の尻尾な……地球人に斬られたんじゃない。……自分で抜い
たんだ」

「……なんだと？」

あれ、次は左足かと思っただが。

視界がぼやけてうまく見えないが、興味を示してくれたらしい。

だが、どこか聞き返してきた時怒っていたな。

「大猿化すると……俺は理性がなくなる。……はあ……はあ。……だ
が、それで力は手に入っても大切なものを奪うだけだ。……そんな力
じゃ何も守れない……何も得られない」

まさか全て話させてくれるとは思わなかった。

「だから尻尾を抜いた……と？」

「ああ」

なんだ？

「貴様は……どれだけ……どれだけサイヤ人の誇りを貶しやがるん
だ」

ベジータの声は震えていた。

ああ、ここまで怒っているのは記憶ではないな。

「もういいー……消えろおおお！」

………終わったな俺の人生。

ベジータはその場で気を溜め、そして俺に放とうとする。
俺の人生………いっぺんの悔いなし。

「やめろおおお！」

「よせ悟飯！」

「ぐわ！」

それは突然だった。

俺への攻撃は放たれることはなかった。

ベジータは何者かに攻撃された。

その正体は怒り狂う悟飯の一撃だった。

ラディッツ、絶望する

「なー……なんであいつがいるのよ!」

ここはカメハウス。

この場にはブルマ、亀仙人。

変身ができる子豚人間のウーロン、青猫のプーアル。

人間で悟空の妻チチ、その父である髭を生やした大男の牛魔王。戦いに行かず、避難をしたヤジロベエの7人がテレビ中継にてサイヤ人たちの戦闘を見ていた。

戦闘は進み、ヤムチャ、チャオズ、天津飯は死亡、その後は何故かサイヤ人と悟飯達が戦闘をやめた。

カメラ中継は遠すぎたため、会話内容が聞こえず何が起きているのかわからない。

だが、そんな状況でそいつは突然現れた。

この場にいる者たちからは敵と認識しているラディッツだ。

「ブルマさん……この人知ってるだか?」

チチがブルマと亀仙人の反応から不思議に思い質問する。

「ええ……こいつは孫君の兄貴よ……孫君が死んでしまった元凶……悪者よ」

「なんだって!」

悔しがるブルマの返答に一同騒然した。

「もう……終わりよ」

「で、でもよ。ピッコロたちは以前に比べて強くなったんだろ?……一人増えたところで」

「そうとは限らんよ」

「……え?」

亀仙人はウーロンの前向きな考えを否定した。

「皆が強くなったということとは、こやつも強くなったということじゃ……。この戦い……困難を極める……ワシも戦いに行きたいが……足手纏いにしかならん……どうすればいいんじゃない?」

「心配することねえ!」、悟空さがあるだ。もうすぐ来るんけ?」

亀仙人、チチと話す。

すでにサイヤ人一人に3人も殺されている。一年間神様のもとで修行を積んだ戦士が。

状況は悪化する一方の中でこの場を打破できるのは悟空だけ……だが、ブルマはチチの言葉に首を横に振り返答した。

「まだ……孫君は今こっちに向かっている、いつ来るのかわからないの」

「そ……そんな……ごはん……ちや」

「チチー」

チチはブルマの言葉に青ざめ気絶してしまった。牛魔王は慌てて介抱した。

会話中でも戦況は進む。

だが、突然にテレビ越しに映った光景に目を疑う。

「え……どうなってるの？……なんで？」

悟飯達と向き合っていたラディッツが急に味方であるはずのサイヤ人達に攻撃をしたのだ。

「何が起こってるの？なんで……え、え？」

混乱する一同。

ラディッツはそのままナツパと戦い始める。

だが、この困惑は一人の人物によつて解決することに。

「あ、忘れとったがねー。そーいやあ神様がこのサイヤ人、悪さしたらんちゆうてたねー」

「「……はっ……」」

その後、ヤジロベーは皆に問い詰められラディッツが人間と暮らしていたことを語った。

「あんた……そんな重要なこと知ってるなら早く言いなさいよ！」

ヤジロベーはブルマに怒られるのであった。

しかし、戦闘は進み、ラディッツの放ったエネルギー砲の衝撃でテレビは映らなくなってしまったのであった。

その後、占いババの水晶で戦闘を見ることになり、映し出された光景に歓喜した。

ラディッツはナツパを倒した。

「まさかとは思ったが……思わぬところから助っ人がきたな」

「いけえ！このまま残りの一人も倒してしまえ！」

「孫君が着く前に勝負つくかもしれないわね！」

「こら！水晶に乱暴なことをするでない！」

カメハウスはお祭り騒ぎだった。

だが、その光景も長くは続かない。

「頼む……持ち堪えてくれえ！」

悟空は蛇の道走り抜け地球に到着、筋斗雲に乗り戦場に向かって
いる。

（デカかった気が小さくなっていく？………いってえどうなってるんだ）

「筋斗雲！急げ！」

気を探るだけでは戦況はわからない。

悟空は急ぐのであった。

「く……くく」

「よせー……怒りを鎮めろ」

悟飯は目の前で起こっている光景に怒っていた。
ベジータ対ラディッツ。

その戦いはラディッツの防戦一方であった。

だが、そんな戦況に於いても一つの希望が現れた。

悟空がこちらに向かっていたからだ。

この場にいるものは歓喜した。

だが、それでも悟空が来るまでは時間がかかる。

少しでも時間を稼ぐため、クリリンとピッコロはラディッツの援護をしようとした。

悟飯も出ようと思ったが、戦況の判断ができない実戦経験のない悟飯は足手纏いだといひ、結果、悟飯以外で技を放つ準備をした。

そして、その意図を察したのか、ラディッツはクリリンとピッコロが技を放つ隙を作り、ラディッツはベジータに一撃を加えることに成功した。

これは効いた……そう思うも、すぐに起き上がったベジータは何もなかったかのようにしていた。

その後ベジータはラディッツに反撃し、苦しめるように四肢を押し折り始める。

その光景に悟飯は我慢できず、怒り出す。

「大丈夫だ。もうすぐ悟空がくるんだ」

「でもー」

クリリンは先ほどの一撃に大部分の気を消費してしまったため、何もできないでいた。

それはピッコロも。

怒る寸前の悟飯は今にもラディッツを助けようとしている。

しかし、その我慢も限界を迎えた。

それはベジータがラディッツにエネルギー砲を放とうとした瞬間であった。

「やめろおおおー」

「よせー！」

悟飯はクリリンの制止を聞かず、怒りに任せてベジータに殴りかかった。

「グッー！」

悟飯はベジータの顔に一撃を与えたあと、攻撃のため全力でエネルギー砲を放つ。

「くらえー！はあああああー！」

ドカーン！

放たれたエネルギー砲はベジータに直撃した。

「はあ…はあ…はあ。ラディッツさん！」

悟飯はそのままラディッツのところへ向かう。

「馬鹿野郎…何をしてやがる」

「だって！ラディッツさん殺されちゃうと思って」

悟飯の言葉にラディッツは呆れる。

悟飯にとって人の死はトラウマだ。目の前でヤムチャ、天津飯、チャオズが殺された。

「……そうか……なら助かった……ありがとうな」

「えへへ」

「なら、早く離れる……今のでベジータも遠くに飛ばされただろう」

ラディッツは悟飯にその場から離れるように伝えるも。

「……僕、今ので力全部使っちゃった」

「……馬鹿野郎」

ラディッツは悟飯の言葉に呆れる。

「くそおおお！」

ベジータは叫びながら周囲の土埃を吹き飛ばし、ラディッツと悟飯の元へ向かう。

「貴様ら……よく……よくもこの俺の気高い血を……許さん……殺してやる……殺してやる！」

「悟飯！逃げろ！」

「よせピッコロ！」

プライドを傷つけられたベジータはそのままエネルギー弾を悟飯

とラディッツに放とうとするが、ピッコロは止めるために飛び掛かる。

しかしピッコロの拳は空を切ってしまう。

「ぐはー!」

ベジータは即座にピッコロに拳打し、足元に落とした。

「目障りだ!……もうドラゴンボールのことなどどうでもいい!失せろ!」

「ピッコロー!」

ベジータはピッコロをエネルギー砲で消滅させた。

「そ……そんな」

「ピツ……コロ……さん」

クリリン、悟飯は絶望する。ピッコロは地球でも最強格の戦士。

それなのにあっけなく殺された

何よりドラゴンボールが使えなくなってしまった。

「ゴミが出しやばるからこうなる」

「ち……ちくしょう……悟空!早く来てくれ!」

「ふん!……まだそんな戯言を……なんだ?」

クリリンはこの絶望の状況を一変させられる悟空を呼ぶ。

ベジータはそんな言動に呆れるも、ふと自分のスカウターが反応していることに気付き、置いてあったスカウターを手に持つ。

そして、表示された数値を見る。

「なに!?……戦闘力5000だど!……くそ、もうすぐ来やがる!

……もうお遊びは終わりだ」

ベジータは表示された数値を見て警戒心を高める。

ラディッツが到着した時、戦闘力が上がった。地球にいる奴らは戦闘力を変化させることができる……このまま今残っている者たちと手を組まれるのは厄介か……そう判断し、ベジータはクリリンに視線を向ける。

「まずは貴様から殺してやる」

「……ちくしょう!」

クリリンは無謀とわかっていながらも特攻を仕掛ける。

悟空が近くまで来ていると分かっているけど今すぐではない。

このまま待っていても殺されるだけ。だが、分かっているけど実力が乖離しすぎていた。

「ふんー！」

「ぐ……かはー！」

「クリリンさんー！」

ベジータの拳はクリリンの腹部を貫通した。

悟飯は叫ぶことしかできず、見ていることしかできない。

ベジータはクリリンをそのまま悟飯がいる近くへと投げ飛ばす。

「かは……ぐ……はん……！」

「ちくしょう……何故俺は」

クリリンは血を吐き悟飯の名前を叫び心配する。

ラディッツは己の無力に悔しがる。

「せめてもの情けだ。まとめて消してやる」

ベジータは最後に言葉をかけエネルギー砲の準備をする。

「消えろおお!!」

「うわああおー！」

「ちくしょう……！」

ドカーン！

ベジータから放たれたエネルギー砲は一直線に悟飯たちに向かい爆発した。

「なにー！」

だが、その爆発は全く別の場所からした。

「お……お父さん」

「……チツ！来やがったのか……カカロット」

そこに現れたのは山吹色の胴着をきた悟飯たちが最も待ち望んだ人物。

孫悟空であった。

ラデイツツ、思考する

悟空の登場により流れが変わった。

地球サイドは待人来たりと喜び、ベジータは腕を組み俺らの様子を伺っている。

「クリリン！仙豆だ。早く食べるんだ！」

「う……………」

悟空は着くと同時にエネルギー砲を弾き、倒れているクリリンへ仙豆を食べさせた。

「……………」

「気になるな！オラ来る前に食べてきたからな！」

「……………すまないな」

「謝ることねえって…………クリリンも悟飯も…………よくオラが来るまで持ち堪えてくれた」

「うん……………」

…………クリリンは大丈夫のようだ。

悟飯も元気はないが無事…………よかった。

…………本当に俺は何がしたかったのだろうか？

結局物語と同じ流れになってしまった。もう少し俺が強ければ。もつと鍛錬をしていれば…………。

多少は変わっていたのかもしれないのに。

「ああ……………だが……………みんな死なせてしまった……………ピッコロもあつけなく……………少し強くなったと思っただが……………全く歯が立たなかった」

「ピッコロさんは……………僕を守るために」

「なに……………それじゃあ、ヤムチャたちは……………もう」

クリリンと悟飯は己が無力だったことに悔しがる。悟空もピッコロの死を聞き一気に気が膨れ上がる。

俺の存在に誰も触れないのか？

……………どうするか。ドラゴンボールが他にも存在すること伝えておくか？

「その結論に至るのは早すぎるぞカカロット」

「ラディッツ……何故おめえがここに……こんなになるまで」

悟空は容体を見て質問してきた。……ここにいる理由……それは。

「何……俺にも守りたいものができた。……それだけだ」

「ラディッツは俺たちと一緒に戦ってくれたんだ！すごいんだぞお前の兄貴！サイヤ人の一人を倒しちゃったんだからな！」

「そうか……悟飯たちが世話になったな」

「気にするな……助けたと言ってもこのザマだがな」

「ラディッツ」

悟空は俺の容体を見て感謝を言う。クリリンの説明で俺への警戒心はなくなっていた。

本当の悟空は一度心を許してしまうと警戒心がなくなる。

それが美点ではあるが、戦いにおいては隙になる。まあ、今は何も言うまい。

「話を戻すが……願ひ玉……お前たちはドラゴンボールと呼んでいるのだったな。それと同じものが別の星にもあるらしい」

「それは本当か！」

悟空は目を見開き驚く。

今その話をしたいが目の前にはベジータがいる。

「だが、それはベジータを倒さないと達成は難しそうだ……詳しい話は全てが片付いてからだな」

「……わかった」

悟空はベジータを真剣な表情で見つめる。それには怒りが混ざっているものの、目の前の強者に挑戦したいというサイヤ人反応が出ているようにワクワクしているように見える。

悟空はベジータから視線を外さずに話し始める。

「悟飯……動けそうか？」

「……ううん……力入らないや」

「そうか。……クリリン、わりいがラディッツを連れてカメハウスに先に帰ってくれ。悟飯は筋斗雲にのってな」

「……わかった」

「うん」

クリリンは自分は足手纏いだと自覚した。

目の前にいるサイヤ人には自分は力不足だと。

クリリンは俺を支えるため近づいてくる。

「痛むと思うが少しだけ我慢してくれ」

「……世話になる」

クリリンは俺を横抱きにしてくれた。

「悟空よ……絶対に死ぬなよ」

「うん……ああ！」

「何をしている？」

ふと、ベジータが話しかけてくる。早くしろと言わんばかりに苛立ち話しかけにきた。

もう悟空と話す時間はない。

せめて最後に一言。

「カカロット、後は任せたぞ」

俺は最後に悟空に言葉をかけ、この場を後にしようとする。

「ああ。任せてくれ……にいちゃん」

去り際にそう言われた。

俺は黙って頷く。

悟飯は筋斗雲に乗り、俺はクリリンに横抱きにされその場を去った。

ただ、血が繋がっているだけ。心は別。一度命を奪い合った仲なのに。

そんな俺に対して兄と言ってくれた。

何故か心から温もりがこみ上げてきた。

「理解できんな」

「何がだ？」

ラディッツたちが立ち去り悟空とベジータの2人になる。

悟空は戦闘が始まる前にベジータから突然話しかけられた。

「何故ラディッツを庇う？……何故殺さなかった？」

「にいちゃんは悟飯やクリリンを守り、地球のために戦ってくれたんだ。……何故殺さなきゃいけないんだ？」

「あのクズを生かすとは……随分と甘い考えをしている。……つくづくサイヤ人の恥晒しだな」

「オラはにいちゃんを誇らしいと思うが？」

悟空は迷いなく答える。

「ふん……やはり理解できんな。所詮は落ちこぼれの考えか……お似合いじゃないか……兄弟揃って」

「にいちゃんと一緒か……嬉しいねえ」

「戯言を」

悟空はラディッツを認めている。

一度敵対したがラディッツは悟空にとって大切なものを守るため、命を張ってくれた。

悟空はそんな兄を誇らしく思っている。

「喜べ、超エリートである俺様が直々に貴様のような落ちこぼれの相手をしてやるんだからな。精々兄のように生き恥を晒さんようにな」

「あまり甘く見てつと……足掬われるかもよ？」

「ふ……面白い冗談だ……なら努力だけでは越えられない壁を……教えてやろう」

ベジータの言葉を最後に……戦闘は始まったのだった。

「大丈夫か？」

「……一度手足を固定してほしい。……近くに降ろしてくれ」

「ああ。わかった」

飛び始めて数分が経った。

悟空とベジータの戦いに火蓋が切られた。

二人の気は常軌を逸していた。

悟空の界王拳にベジータの全力。

遠くからでも身体が勝手に震えてしまうほどだ。

俺がどれだけベジータに手を抜かれていたのかわかる。

本当によく生きていたものだ。運がいい。

そう思えてならなかった。

考えてもいまさらだ。

悟空がベジータを倒せなかったら終わる。

「一度地面に寝かせるぞ」

「……ああ」

クリリンはゆっくりと地面に寝かせてくれる。

折られていない左足以外に力は入らないしジンジンと痛む。

「悟飯は先に行っててくれ。すぐに追いかける」

「いえ、僕も一緒にいます。少し休んだら動けるようになりましたし」

「……わかった」

悟飯も一緒にいるのか……。ならクリリンから気を分けてあげたほうがいいかも。

「クリリン……悟飯に少し気を分けてあげてくれ」

「……ああ、そうだな。俺一人元気で意味ないしな。悪いな。仙豆を俺一人だけ使っちゃったのに」

いや、命には代えられないだろ。クリリン多分本気で言ってるわ。俺がそう言おうとする間も無くクリリンは悟飯に気を分けた。

「ありがとうございます。少し元気が出ました」

「ラディッツにも少し分けておきな……はあ」

「え？」

いや、俺に気を分けても意味ないだろ……。

「俺に気を分ける必要は」

「みんな公平に分けるべきだろ？」

「そうですよ！ここはみんな平等に、ですよ！」

「お前ら」

一度心を許すと甘くなる。

ドラゴンボールの地球人はみんなそうなのだろうか？それとも地球人は人をたぶらかす何か不思議な力があるのだろうか？

まあ、くれると言うなら貰っておくが。

「……ならありがたく。……とりあえず、この付近にある木とツルを使つて固定してほしい」

「わかった」

その後、クリリンと悟飯は使えそうな木とツルを集め固定をしてくれた。

両腕は木を使つて囲うように固定して胴体に縛り、右足は木で固定後無事な左足と一緒に縛ってもらった。

「これでどうだ？」

「……大分楽になった」

「ならよかった！」

これで大丈夫だろう。このままベジータと悟空の戦いはどうなるかわからない。だが、正直悟空が勝てるとは思えない。幾ら戦闘力が倍になる界王拳があつたとしても……。

「?!……なんつう気だ！」

……はじまったか。この気はおそらくベジータだろう。

急激に上がった気。……地面が揺れ、大地震だ。……あれ？もう一つ気が上昇した？

上から感じるのはおそらくベジータの気で……それを上回っているのは……悟空の気か？

だめだ。ここからだとわからない。

「クリリン、悟飯。……申し訳ないがここから様子を伺おう。この戦い……どういう結末になるかわからない。……できることをするため待機しておきたい」

「そうだな……そうした方がいいかもしれない」

「そうですね」

戦えるのは二人だけ。

俺にできることはないだろう。動くのは左足だけ。それでも何かできるはず。

可能な限りのことはする。だが、今できることは悟空の勝利を祈るだけだ。

ラデイツツ、再び戦場へ

悟空対ベジータ。

地球の命運をかけた戦闘は一進一退。

素の力で圧倒しているベジータに対し体の負荷がかかり少しでも調整を誤れば壊れる諸刃の剣、界王拳を使う悟空。

始めベジータが圧倒したものの、悟空が決死の覚悟で三倍界王拳で短期決戦に持ち込む。

だが、それでもベジータを倒し切ることは出来なかった。

戦闘は進みベジータは怒り地球を粉々にしようとした。

ベジータのギャリック砲。これが地球に直撃すれば地球は終わる。

悟空はそれを防ぐため、四倍界王拳の全力かめはめ波で迎え撃つ。

ベジータは上空で威力を殺し、かめはめ波から抜け出した後、月を

探し始めた。地球に来た時期……それは満月がある日に合わせた。

もしもの時を考えてだ。

「妙だな……もう月が見えてもおかしくない時間なのに」

ベジータは周囲を見るもあるはずの満月を探すも存在しない。

「ない……ない……ない！畜生、どこにも月がないぞ………どういうことだ

！」

地球の月はピッコロが破壊した。それは悟飯が月を見て大猿化したから。

それが功を成した……だが。

「……そうか……畜生……いちいち頭にくるやろうだぜ……カカロットのやろう事前に月を消しやがったな……やむをえん」

ベジータは月がないことを策だと勘違いする。

月があればサイヤ人は大猿化し元ある戦闘力が十倍になる。

本来大猿化したら力を得る代わりに理性がなくなる。

だがベジータは理性を保つことができる。

「戦闘力は多少劣るが、これ以外に方法はなさそうだ」

ベジータは思考が終わると悟空の元へと戻った。

月がなくても大猿になることができる。サイヤ人の中でもごく僅

かの人作り出すことの出来るパワーボール。1700万ゼノを超える小さな満月を。

使えば気を半分以上消費するが、戦闘力は約十倍、大猿になることができる。

「カカロットよ……月を消しておいてしてやったりといったところだろうがそうはいかんぞ！」

「なんのことだ？」

空中を彷徨っていたベジータは戻るとパワーボールについての説明をし気を消費させ小さな球体を作り出し空へ打ち上げた。

「待たせたな。このパワーボールと地球の酸素を合わせることで完成する。エリートに挑むことが間違っていたんだ。やっと貴様の死に様が見られるぜ」

「なに？」

空に打ち上げられたパワーボールが爆発する。

「後悔するがいいカカロット」

「あ……あ……」

ベジータはパワーボールを見て姿を変えていった。

「ぐああああー！」

大猿化したベジータは悟空に襲い掛かる。

絶体絶命のピンチ。

悟空は目の前の強敵を倒すため、界王から教わったもう一つの秘策。元氣玉を使う決意をするのだった。

「……何つう…気だ」

「ふむ」

二つの大きな気がぶつかり合った後、数分の時間が経つと片方の気が急激に増幅した。

ついに来たか。

ベジータは大猿になったのか。

なら……。

「ベジータは大猿化した……か」

「なんだって！……どうやって！月はもうないはずだ！」

クリリンは大猿の単語を聞くと驚く。そりやそうか。大猿化は恐怖の対象でしかないからな。

一応解説しておくか。

「エリートサイヤ人は人工的に月を作り出すことができるんだ。この気の上昇は……おそらくそれだ」

「そ……そんな」

顔を青ざめるクリリン。悟飯は何故か疑問符をあげていた。

「その表情……カカロットが大猿化したことがあるのを知っているようだな」

「ああ」

クリリンは黙って頷く。

確か物語でも2回……いや3回地球で大猿化しているはず。

「なら対処法は知っているな」

「尻尾を切るか……月を破壊すればいいんだろ？」

「そのとおりだ」

知識を共有させる。

「……悟飯お前は どうする？」

悟飯はどうするか。

正直体力は多少戻ってきているが全快には程遠い。

「僕も行きますー……役に立って見せますー！」

そうか。

……みんな行く覚悟を決めた。俺は何もできないかもしれないが、

頼むだけ頼んでみよう。

「クリリン。すまないが俺も抱えて連れて行ってくれ。足手纏いでしかないことはわかるが……頼む」

「……わかったよ……だが、遠くにいてもらうからな」

「それで構わない」

クリリン、悟飯、俺の3人は再び戦場に向かった。

……左足以外動かせない俺に何ができるのか。

ベジータが大猿化した後、悟空は元気玉の準備を始めた。

太陽拳でベジータの視界を奪い、気づかれても大丈夫なくらい距離をあげ準備を始めた。

だが、元気玉が完成したのにもかかわらず悟空が想定したよりもベジータは速かった。

そのせいで元気玉を放つ前に距離を詰められ、ベジータに捕まってしまうた。

悟空はベジータに足で踏まれ下半身の骨を砕かれた。

「ぐあああ！」

「ふ……最後に一矢報いてやったぞ」

とどめを刺される寸前、悟空はベジータの左目を潰した。

「許さんぞ！」

「やめろ！」

「なんだ？」

悟飯はベジータの注意を引きつけるため大声で言う。

注意は悟飯だけに向いている。

「気円斬」

クリリンは悟飯に注意を向いているのを確認し背後から技を放つ……だが。

「バカめ！俺が背後に注意を向けてないと思うか？」

「くそー！」

戦闘で培った経験か、ベジータは容易に気円斬を躲してしまう。

これでベジータに悟飯とクリリンの場所がバレた。

警戒をされてしまったら好機は二度と来ない。

「畜生！」

「そ…そんな……」

クリリンと悟飯は絶望する。

頼みの悟空は満身創痍。尻尾も切ることが出来ず、ベジータは大猿状態のまま。

もうなすすべはない。

地球は終わった。

誰もがそう思っていただろう。

「ぐあああああー！」

「何ー！」

それは突然であった。

この戦場にもう一体の大猿が現れ、ベジータに特攻したのだった。

ラゲイツツ、決死の覚悟を決める

俺は無力だ。

クリリンに連れてきてもらったが、遠くにいるだけ。クリリンと悟飯は尻尾を斬るために行動を開始したが……もしも失敗をしてしまったら……。

戦闘力が十倍になったベジータに3人では無理だろう。

「……あれ？」

あれは……ベジータが作ったパワーボールか？

……あれを破壊できれば。

残り少ない気だが……できることをしよう。

「く……」

俺は痛む体を無理に動かしパワーボールの方へと向く。

気を溜め、エネルギー砲を放つ準備をする。

手は使えないから……口から放つ。

……初めての試みだが……やるしかない。要領は同じ。

俺は口を開き……溜めた気を放とうとする……が。

ドクン……。

「な……んだ」

突然心臓の鼓動が大きくなる。

ドクン……ドクン……ドクン。

あ……あれ？

体が……変化していく……何で。

「はっ」

俺の尻の辺りから変な違和感が……。

「な……ん……で」

尻尾は一年ほど前に抜いたはず。

何でこのタイミングで再生するんだよ。

「……クソツタレ……ぐ……う……う……うお」

どんどん体が大きくなっていく。固定していたツルは千切れ、巨大化する。……どうする？どうにか尻尾を切りたいが切れない。

不幸にも左足以外は動かない。

もう……だめだ。体の巨大化が終わる。

理性が……なくなつて………あれ？

何でだ？体が大きくなつたはずなのに理性が残つてる？

……だがこれは好都合かもしれない。

身体中痛い、気は上がった。

俺は唯一無事の左足と再生したばかりの尻尾を使い、立ち上がる。

気を溜めてチューズデサルトの準備をし、大猿化したベジータに特

攻する。

高速で移動するにはこの技が優れている。

狙うは尻尾。

俺に何かを斬る手段は持っていない。

だが、大きくなったことで噛みちぎることはできる。

「ぐああああー！」

俺は雄叫びをあげベジータに接近。ぶつかる寸前にチューズデサルトを解除する。

「なにー！」

ベジータは驚きの声をあげるが構わず接近する。

ドスン！

「ぐはー！」

ベジータに技がぶつかり密着し抱きつき、尻尾に噛み付く。

「よ……よせー！」

「あああああー！」

俺は暴れるベジータから離れないようにしっかりと抱きつくとそのまま尻尾を噛みちぎった。

「ち……畜生」

「よしー！」

ベジータは悔しがり、体がどんどん小さくなり俺は地面に転がる。近くにいたクリリンは喜びの声をあげた。

よし……このままベジータにダメージを与えて瀕死に……地球から追い出せれば。

「な……なんだ」

だが、残念ながらそれは長くは続かない。理由はわからない。地面に転がった時、頭を強打したがそれが原因か？それとも理性を保つのに限界があるのか？

「ぐ……」

だめだ。

気を抜けば理性が吹っ飛ぶ。

このままじゃまずいな……ならせめて。

「はあああああ」

俺は上空に浮かぶパワーボールに向けてエネルギー砲を放つ。

ドカーン！

パワーボールは爆発した。

……これで大猿化は解除される。

体が徐々に小さくなって行くのを確認し、安心する。

「貴様！まさか理性が残って……くそ！余計なことを」

「いいぞラディッツ！」

「やったあ！」

ベジータは苛立ち俺を睨んできて、クリリンと悟飯は歓喜した。

俺は尻尾を使い左足で立ち上がる。

まあ、何もできないが。

「悟飯！クリリン！ベジータは力が落ちている！」

「おう（はい）！」

クリリンと悟飯は俺の指示を聞くなり戦闘体勢に入る。

「舐めるな！」

「ぐはー！」

ベジータは怒りをあらわにすると俺を殴り後方へ飛ばされ大岩に激突する。

……痛い。

痛みで気を失いそうになるもなんとか堪え、再び立ち上がる。

尻尾は邪魔だと考えていたが、思いの外便利だ。今度から大切にしよう。

そう心に誓う。

「あとは……頼むぞ」

俺の役目はこれまでだ。

だが……まだ気を失えない。

この戦いが終結するまでは。

俺は空を飛びゆつくりと戦場へと戻る。

俺が戻ると悟飯がベジータと戦い、クリリンが二人の戦いを窺いながら右手から小さな球体を浮かべていた。

「あ……あれは……元気玉か？」

あれが直撃すればベジータに勝てる。

「だれだ！」

ふと、クリリンは一人ごとを言う。おそらく今界王がクリリンの心に話しかけている。

元気玉について教えているのだろう。

……元気玉は悪の気を感じて放つ。そのことを教えている。

チャンスは一度。

外せば希望はなくなる。

「はあ……はあ……ふうう」

俺は戦況を整理する。

今、クリリンは元気玉を放つ機会を探っている。

悟飯はベジータと戦っている。だが、追い詰められ、やられる寸前。

……俺ができることはベジータの注意を引きつけ元気玉を確実に当てること。

「最後だ……全てを絞り出せ」

少しでも注意を引きつけることができる技はこれしかない。

「はああああ」

俺は気を絞り出す。ベジータが知っていて、少しでも注意をひける技。

チューズデサルト。ベジータに二度も直撃させた技。

これなら少しは意識するだろう。

「く……く……あと少し……これで技が放てる」

後はクリリンが放つ寸前に大声を上げるなりして注意を引きつけるだけ。

「ははははー！どうした！」

「わわわ！」

だが、それまで悟飯が持つか？

今、ベジータはエネルギー弾を悟飯に放ち遊んでいる。

……このままクリリンが間に合わなかったら？

今ベジータは完全に俺のことを意識していない。

そういうえば物語ならベジータは元気玉が直撃してもやられてなかった。

俺は……俺はどこまで甘いんだ。

まだできることがある。少しでもダメージを与えて隙をつくる。

体が壊れるかもと……これ以上は無理はするべきじゃないと思っていたのかもしれない。

「行くぞ」

俺はそのままエネルギー弾を放ち続けるベジータに向かい正真正

銘、最後の特攻を繰り出す。

「くらええええ！」

「なに?！」

思わぬところからの一撃。威力は弱い。だがこの攻撃に確かな手応えを覚える。

ドカーン！

ベジータは俺の特攻で飛ばされ、チューズデサルトの付属効果のエネルギーで爆発した。

あ……もうだめだ。

意識が保てない。

「とらえたー！くらええええ！」

最後にクリリンが元気玉を放つのを確認し意識を失った。

ラディッツ、決意する

『おい！起きんか！』

「……………」

誰かに怒鳴られ目を覚ます。

あたりを見渡すと真つ白い空間。

「誰だよ……………いった……………い！」

『……………やつと気がついたかのろま』

おかしい……………なんでラディッツが目の前にいるんだよ。

俺がラディッツのはずだが。

『……………貴様……………随分と人の体を好き勝手してくれたようだな』

「あはは……………なんかすまん」

ラディッツは腕を組みフンツと鼻息した。俺に対し呆れているようだった。

いや、俺とラディッツって心がすでに一つになったはずだが……………。

『まだ俺の精神は残っている。貴様……………自分の性格、口調が変わっていることに気が付かなかったのか？』

「それは……………」

今思い返してみれば思い当たる節がある。

前世の俺なら年上や初対面なら敬語を使っていた。名前もさん呼びが普通だった。

意識しても改善はできなかった。

今はそれがない。

少し好戦的になったり、戦いを楽しんでたり。

『俺と貴様の魂は中途半端な状態であつたらしい。互いに影響し合いゆつくりとだが交わっていった。……………俺も少なからずお前の影響を受けている』

「ああ……………たしかに少し穏やかに」

たしかに元のラディッツに比べて少し穏やかになっている。

元のラディッツなら冷静にこんな話しなさそう。すぐに攻撃して身体の主導権を奪いにくてもおかしくない。

いや、それよりも疑問が。

「なんで今出てきた？」

そうだ。

なんで今更。体が一つになってから一年は経った。

こうやって会えるならもっと早く会えるはず。

『フン……そんなの決まっている。最後だからだ』

「……最後？」

『ああ。もうすぐ貴様と俺の心は完全に一つになる。……最後に挨拶しようと思つてな』

「すでに一つになったと思つてたが」

『まだ完全ではなかった。……ベジータとの最後の戦闘がきっかけで一つになりつつある』

「……きつかけて……あ！」

もしかして大猿になった時か！

そういえば大猿になっている時、始めは完全に理性をコントロールできた。だが、最後の方は気を抜いたら……理性吹っ飛ぶかと思つた。

『貴様の想像通りだ。……大猿になった時、精神に多大な負荷がかかった。本来、俺は理性がなくなるが、そうはならなかった。まだ中途半端だったからこそ大猿になっても理性が保てた。……だが、大猿化で俺とお前の心の融合は急激に進んだのだ』

「そうか。……今後はどうなるんだ？俺とお前は」

一つになって片方が消える。

今までは俺の自我が強く主導権を持っていた。

だが、もしかしてここにラディッツが現れたということは主導権が変わる？

『消えるのは俺だ』

「……は？いや普通消えるべきなのは俺だろ？もともとお前の体だし」

『俺は本来、ナメック星人の技で死に地獄に落ちるはずだった。だが、そんな時貴様に体を乗っ取られ、本来の結末とは別の方向へ進んだ』

「おい、ラディッツ体が」

ラディッツはどこか満足しているような表情だった。少しずつ体が白くなりつつ消えそうになる。

『お前から見た世界は愉快だった！俺も努力次第で強くなれることがわかった。弱虫ラディッツとバカにしやがったナツパを超え、ベジータに一矢報いた。……本来できなかったカカロットと和解も』
「……」

ラディッツの清々しい表情をしている。

少しずつ消えていく。

『貴様が関わったことにより、あつたかもしれない未来……いい夢が見れた……感謝している』

「ラディッツ……」

最後に満面な笑顔で俺に微笑む。

『別に消えるわけではない。俺と貴様の心が完全に一つになるだけだ。……不甲斐ない姿をしたら活を入れてやる。……みつともない姿を晒すな、誇り高きサイヤ人なのだから』

「……ああ」

俺はラディッツの言葉に頷く

もうラディッツの身体は完全に薄くなっていた。

もう時間か。

「ラディッツ……ありがとう」

俺はラディッツに礼をいう。本来の物語でもラディッツにももつと違った出会いがあれば変わっていたのかもしれない。

……もう遅いが。

『親父たちとお前たちの行く末を見守っている。……カカロットを頼んだ』

「ああ」

その言葉を最後にラディッツは光となり消えた。

その光は俺の中に入り込んでいった。

ラディッツが物語で悟空と和解し、地球で過ごしたらああなっていたのか。

今更だが。

誇り高きサイヤ人。

俺は今回のベジータとの戦いでこのように解釈した。

大切なものを守るため命をかけて戦う、それが戦闘民族サイヤ人の誇りだと。

これから戦闘は過激になっていくだろう。

ラディッツに胸を張れるようしっかりと生きていこう。

「……………」

目覚めると知らない天井であった。

「知らない天井だ」

やはりこのお決まりのセリフを言ってみたが。ま、いい。……今さつき見ていたのは夢……なのか？

いや、あれは本当にあったことだと思う。こうして全て覚えていく。見る。見えてくれラディッツ。誇り高きサイヤ人として恥じないよう生きる。

俺は決意を改め、現状整理のため辺りを見渡す。

ここは病院か？俺は今寝ている体勢……痛む手足は簡易のものでなくしっかりと固定されていた。

「おー……起きたんか！」

ふと、隣から声がかかる。

俺は声のした方へ首を傾けるとそこには首以外シルバー色の機械で固定されているカカロットがいた。

「カカロット？」

そこにいたのは笑顔で見ているカカロット。その奥にはクリリン、悟飯が寝ていた。

「……全ておわたのか？」

その問いは今現状を見れば大体予想がつく。だが、どうしても聞きたい事実。

「ああ」

悟空の返答を聞き、安心し。

「……そうか」

一言そう返した。

悟空からことの顛末を聞いた。

ベジータはクリリンの元気玉で力尽きる寸前になったそうだ。

ベジータはそれでも僅かだが動けたらしい。だが、物語と同じではなく戦う気力が残っておらずすぐに逃げるために宇宙ポッドを呼び出した。

この時まだ悟飯はまともに動け、クリリンも片腕を怪我しているものの、弱っているベジータを仕留めるには十分な余力があった。

だが、そこで悟空が待ったをかけた。

まあ、そこからの流れはほとんど物語と同じだ。

ベジータは生かされて帰還したのだ。

俺も同じ流れになって安心したのだが……。

「人がいいにも程があるぞ……俺も元は地球を滅ぼそうとしたから言える立場ではないが」

「あはは。ごめんなにいちゃん。オラどうしてもまた戦いたいと思っただんだ」

「……それがサイヤ人の本能というやつか……はあ」

「ため息つくくなって！」

前向きなのは結構。

だがまあいい。物語の進行を考えればよしとしよう。

俺も今後はなるべく物語に沿って進めるつもりだからな。

「……で、今後はどういう流れになってんだ？……ドラゴンボールのこともある。ナメック星には行くのか？」

「ああ。クリリンと悟飯の怪我が治ったらブルマの3人で行くんだって」

「……宇宙船はどうするんだ？」

「ブルマが今探してるって言ってたぞ！」

全て問題なく、進んでいる……と。

あとは。

「カカロット……お前の怪我は？」

「うーん……わかんね」

「おい」

まあ、全身粉碎骨折だから多分結構な時間が……。

確か仙豆で治すんだっけか？

でも1ヶ月は期間があるはず。

「俺の怪我は……いや、お前に聞いても無駄か」

「ひでえよにいちゃん」

「いや、自分の容体も把握していないやつに聞いても無駄だろ？」

「……たしかに」

「納得するなよ」

この弟は戦い以外何も出来ないのか？……いや、そんなことはないか。確か物語後半では野菜作ってたような気がする。

「確かそうだった筈だ……うん。流石に無職はないよな。今悟空の生い立ち考えてたけど戦いだけで働かないのは抵抗がある。」

「将来のベジータは完全にヒモだし、悟空もチチに言われてやっと農業を始めた感じ。」

「うん、戦いが落ち着いたら仕事を探そう。」

「稼ぎなしで暮らすのはダメだ。」

「だが、今はナメック星のことだけ考え、その後でいいか。」

「どうせ動けるようになるまでに時間がかかるし、時間作れたら街を散策して仕事探してみるのもいいかもしれない。」

「あら、やっと起きたの」

「ん？」

「お！ブルマ」

「病室の入り口から俺たちに声をかけた人物……ブルマが入ってきた。」

「……………」

「……………気まずい。」

「クリリンと悟飯とはなんとなく共闘したから和解できたが、ブルマとはどう接すれば良いのだろう。」

「印象は最悪だろう。」

「まだヤムチャが生きていれば話が別だがサイバイマンに殺された。」

「俺が早く参戦していれば助かったかもしれない。」

「なんにせよどうにか和解せねば。」

「なんでもいいから話を。」

「……………」

「だめだ。」

「……………何か話を。」

「ブルマ、一回話したじゃねえか！もうにいちちゃんは心入れ替えたって！」

「……………ああもう！分かってるわよ！……………どうしても割り切れないの！」

悟空が気まずい空気を絶ってくれた。

これで話せる雰囲気になった。とにかく一番初めにすることは。

「まずは謝罪させてほしい……すまなかった」

「……なんか拍子抜けしちやっただわ」

ブルマはため息をしながら話を続ける。

「もつとこう……傲慢でいけ好かないやつだと思ってたのに……態度
変わりすぎね」

「……自覚している」

まあ、人格はそのものが変わっているからね。……なんて言えない
けど。

「ねえ……一つ聞かせて」

「……なんだ？」

ブルマは真剣な表情して俺に問いかけてきた。

「アンタは地球のために戦ってくれた……悟飯さんとクリリンを守っ
てくれたわ」

「……」

「なんでもつと早く来なかったの？」

俺は一瞬息を呑んだ。

ブルマはどこか悲しい表情をしていた。

「……ここは正直に答えるか。」

「サイヤ人が来た当日に……世話になった地球人の子供が病気になっ
てしまった。……俺は……地球の運命よりも……その子供を優先させ
た……だから到着が遅れた……申し訳ないと思っている。……だが
……それでもー」

「ライムちゃんを優先させたのね」

「ああ。……そう……だ？」

あれ……今なんて言った？ライムのことはまだ誰にも……。

「なんで知ってるんだと思ってるでしょ？」

「ああ」

「ミスターポポからあなたの話を聞いたの。その情報からあなたがこ
の一年間どこで何をしていたのか調べた……それであなたが住んで

いた家族の人たちに詳細を聞いたの」

「そう……か」

「だから、ある程度アンタが何をしていたかは知っているつもりよ」
……ブルマって怖い。

話していてこの人に逆らうと社会的に終わるのではないか……そう思えてならない。

ブルマは少し泣きそうな表情をして話を続ける

「その優しさがあるなら……どうして地球に来た時孫くんと敵対したの？アンタが来なければそもそもサイヤ人が地球に来ることはなかった。……孫くんを死なせなければ誰も死んでなかったかもしれないのに！」

「……」

俺は何も言えない。だってこのことを言われても俺の意志が現れたのは死ぬ寸前。

全てが手遅れの状態。

「すまな——」

「別に謝らなくてもいいわ。アタシまだ許すつもりないから」
「……」

俺は黙り込んでしまう。

……何をすれば良いのだろうか？

「これから私たちはナメック星に向かうわ。アンタの怪我が治り次第すぐに来なさい。サイヤ人つてのは怪我の治りは早いんでしょ？謝罪はそれからよ！」

「ああ……すぐに治して……向かう」
もちろんそのつもりだ。

俺にも責任があり、それを解消するには全てを解決する必要がある。

「はい！この話は終わり！」

「あ……ああ」

切り替えの速さに一瞬戸惑うも、その方が気が楽だと考える。

「もう話はおわったわ！アンタたちも早く入ったらどう？」

ブルマが声をかけるとその後ろには大勢が待機していた。
メンツは亀仙人、牛魔王、チチ、プーアル、ウーロンの5人。

その後、何人かは俺に怯えていたり、チチからはお義兄さんと呼ばれ挨拶をされた。

ちなみに俺の怪我は普通なら最低2ヶ月かかるようだ。

まあ、1月もすれば治りそうだが。

治るまではイメージトレーニングやシミュレーションをして安静に過ごそうと思う。

ラディッツ、いざ宇宙へ

ブルマとの会話から一週間後、怪我の治療が終わったクリリンと悟飯の二人にブルマを合わせた3人はナメック星に向けて出発した。

どうやら大昔、神様が地球に来た時に使った宇宙船を改造して向かったそう。これはブルマから聞いた話だが、今ブルマの父……ブリーフ博士が遅れていく俺と悟空の乗る宇宙船を作っているそう。

この地球に残っていた宇宙船は2つ。

1つは俺の乗ってきたやつ、もう一つは幼少期悟空が乗ってきたもの。

俺のやつは壊れてしまったが、悟空のは無事。それを改造してきているそう。もちろん修行のための重力装置も設置して。

俺はフリーザの存在を伏せた。

微妙に流れが変わっている可能性があるからだ。クリリンたちがナメック星についた後報告を受け、物語と同じ流れになっているかを確かめるためだ。

全て順調に進んでいるので一先ず俺は療養に専念した。だが、悟空は少し動けるようになった後、病室で腹筋をしたり、病院を抜け出し修行に向かってしまった。初めの頃はイメージトレーニングをお互いに行っていたが、悟空はこのトレーニングに向いていなかったよう。数日で終わってしまったので俺一人で戦闘のシミュレーションをしていた。

本当にあのバカは。

安静にしていたこともあり、入院後二週間で完治し、退院することになった。医者たちは驚いていたが、俺が一番驚いていただろう。

本当にサイヤ人の体はすごいと再認識した。

したのだが……。

「悟空さ！少しはお義兄さを見習うだ！」

「にいちゃんずりいぞ！」

「安静にしてお前が悪いだろ……チチ……弟がすまない」

「お義兄さが謝ることないべ！全て悟空さの自業自得だ！」

こんなやりとりを続ける孫夫妻。

俺は何を見せつけられているのやら。

そんな二人を見て羨ましいと思うも、まだまだ悟空とチチのやりとりは続くと思いきその場を後にした。

仙豆ができるまで後一週間ほど。

カリン様も一月で新しい仙豆ができると言っていた。ブルマたち3人のナメック星到着もそのくらい。

後は連絡が来るのを待つだけだ。

方針を改め、用意してもらった服に着替え病院を出た。

着ている服は黒いパンツに白色の無地の半袖シャツ。これは俺がお願いしたものだ。他人にお任せで頼むのが怖かった。

ベジータもフリーザ編終了後地球にいた時ダサイ服を着ていたからだ。

話は逸れたが、この服を着たのはこれから向かうところがあるからだ。向かう先はオレンジシティの病院。

ブルマの配慮により、ライムの入院費は全てカプセルコーポレーションが持ってくれた。

今チャズケ村のラオたち3人はオレンジシティのホテルにいるらしく、ライムが完治するまでいるらしい。

ライムは完治しているが、元気が戻っておらず、大事をとって入院しているとか。

大丈夫だろうか？

俺は心配になるも、空を飛び移動した。

移動には一時間もかからずに着いた。

俺は病院に着くと手続きし病室へ向かう。

……元気にやっているだろうか？元気がないと言っていたが。

「失礼する」

俺はライムの名前が書かれている病室へ着くとノックし入室。

この病室はVIPの患者専用の個室らしい。一泊いくらするのやら。カプセルコーポレーションの財力は無尽蔵なのかよ。

「ラディッツさん」

俺を出迎えてくれたのはラオたち。

俺を見るなり微笑んでくれた。

「……久しぶりだ」

こう返すのが妥当だろう。

俺は病室に入っただけだった。

「ワシらはテレビでお前さんの活躍を見ていた……まあ途中から映らなくなっちゃったがな」

「あの宇宙人たちに有名な武術家の方がやられてしまった時……不安でした」

「そのピンチをラディッツさんが一変させた時は鳥肌が立ちましたよ！」

ラオ、キウリ、レンモの順に言われた。

病室に入りラオたちに最初に言われた言葉は賞賛だった。ライムはまだ寝ており、ラオたちには事前に俺が行くと伝えていた。

そして話しているとラオたちはテレビ中継を見ていたらしい。それどころか録画もしていた。

どこまで映っていたのかを聞くと俺がナツパを倒したところまで映っていたそうだ。

録画をコピーしてあげると言われたが流石に断った。

何がよくて自分の戦いを見なければならぬのやら……。

その後軽く今まで何をしていた、などの話をした。

「……ん？」

会話をしているのが原因か、寝ていたライムは起きた。まだウトウトしているものの意識がはっきりしてきたのか周囲を見渡す。

「?!……おじ……さん?」

俺と目が合うなり目を見開き驚く。……何に驚いているのやら。

「ああ。……久しぶりだな……ライム」

「おじさんー！」

二週間ぶりの再会。ライムはベッドから立ち上がると俺に抱きついてくる。

俺にとってはたかが二週間、だが4歳に満たない子供にとってはその時間は長く感じていたんだろう。

「うえええんー！」

抱きつくときライムは号泣した。

俺は足に抱きつくライムをそっと抱き上げ背中をゆつくりとさすり、その光景をラオたちは温かい目で見守っていた。

それから30分ほどでライムは泣き止んだ。

「おじさん……おけが……だいじょうぶ？」

泣き止んだライムは俺から離れようとせず、抱っこされた状態のまま話しかけてくる。

降ろそうとしても「いや！」と我儘を言われたためそのまま。……

一体なぜこんなにも懐かれたのやら。

「もう完治……いや怪我は治った」

「そうなんだー……よかったー……おじさんのおい……おちつく」

えへへつとライムは笑いながら返事し、顔は俺の胸あたりにつけて匂いを嗅ぐ。

「……ライム」

「ん？」

俺はこれからライムに伝えなければいけない。

また一月は会えなくなるかもしれないことを……いや、今後はたまたにしか会えなくなることも。

「約束を覚えているか？」

「やくそくっっ！」

「ああ。……俺はお前の家に帰ることはない」
俺は自立する。

このままチャズケ村にいるのもいいかも……そう思うもやはり一人で生きていきたい。これから続く戦闘で俺は死ぬかもしれない。そうしたらこの人たちを悲しませることになる。

修行に関してももつと適した場所に行きたいしな。

ライムは泣くかもしれない。それでもこれだけは譲れない。

ライムは我儘を言うかもしれないが。

「うん！だいじょうぶだよ！」

「申し訳ないがそれは……」

はえ？

いま何て言った？

だいじょうぶ？

「……すまない今大丈夫と言ったか？」

「うん！だっておじいちゃんが7にちに1かいはくるって行ってたし！」

俺はラオを見るも……おい、なんで視線を逸らす！

俺一言も言っていないぞ！

「ラオ……」

「どうしても嫌だと言われてな……ラディッツさんなら可能ではないのか？空飛べることだし」

「いや……しかし」

「それを守らなきゃ娘は一生離れようとしないかもですね」

ラオとキウリは申し訳なさそうに返答する。

今言われたことが想像できてしまうから何も言い返せない。

……一週間に一回か。

「ライムが満足するまでだ。……そうしたら頻度は減らす」

「そ！そうか。すまんの」

「断られたらどうしようかと思ってました！」

「いやあ、ダメもとだったけどよかったよかった」

ラオ、キウリ、レンモは安心したように言う。

しようがない。

「ライム。7日に1回……家に行こう」

「わかった！やくそく！」

だが、ここでこれからナメック星に行くと言うと解放されなさそうだから言わない。

確か宇宙船で6日。フリーザとの戦いで1日。

ギリギリ間に合いそうだ。

死ぬかもしれないが、今の段階では生き残る前提で話を進めよう。

人間の活力は意志の強さ。

果たさなければいけない約束があればそれだけ生存本能が強くなる。

「あのね……おじさん」

「なんだ？」

すると、ライムは真剣な表情で話しかけてきた。

「おじさんってまた、けがするの？」

「ん？……まあ、するかもな」

急にどうしたんだ？たしかにこれから戦いは過激になるし、怪我はするだろう。

「わたしね。しょうらい、おいしやさんになる！……それでおじさんのけが、なおしてあげる！」

今回のことがきっかけて医者を目指すようになったのかな？

達成できるか微妙だが、幼いながらも目標ができた。今はそれを喜ぶべきだろう。

「そうか、医者か。……なら勉強を頑張らないとな」

「うん！」

「だがその前に」

その前にしなければいけないことがある。

ライムは疑問符をあげた。

「まずは元気にならんな」

「わかった！わたし、もうげんきだよ！」

なんともまあ単純な奴だ。

子供はこれくらい元気な方が似合っている。

その後ライムは元気に退院した。俺はラオたちが泊まっているホテルで共に食事し、別れた。ラオたちはまだ宿泊期間があるらしくゆっくりと過ごした後帰るそうだ。

「あ、そうだラディッツさん。これはワシらからの気持ちだ。受け取ってほしい」

「ありがたくもらおう」

別れる時、ラオから服が入った包み紙をもらった。中を見るとそこには道着が入っていた。

俺はそれを受け取るとお礼をいい、空へと飛び立った。空から見るとライムが大きく手を振っていた。

あの時、ライムを優先した俺の行動は正しかった。

それを再認識し、俺はブリーフ博士のいるカプセルコーポレーションへ向かった。

カプセルコーポレーションに着くと上空から巨大な宇宙船が見えた。
俺は近づき声をかける。

「ブリーフ博士はいるか！」

声をかけると宇宙船のドアが開き青髪口髭の老人が出てきた。

「おお！来たか……君がラディッツくんか！」

「ああ。……宇宙船はできたのか？」

「心配いらんよ。だがメンテナンス中だな。まだ出発はできんのじやよ」

「いや、まだ弟が来ていない。後一週間後に出発予定だ」

「そのくらいなら間に合うじやろう」

西の都のカプセルコーポレーション。ブルマとその両親の住む場所だ。

ブリーフ博士は警戒することなく快く歓迎してくれた。

「人工重力装置はもう使えるか？」

「ん？それなら問題なく使えるぞ」

「……なら今すぐ使いたい」

「うーん……じゃがな。まだ細かいメンテナンスが終わっておらんのだよ」

「……ちなみにどんな内容だ？」

「そういえば物語だとしてもない内容だったような。」

「実はな、音楽を聴くためのデータインプットとスピーカー設置が終わっとらんのだよ」

「……は？」

物語だと悟空が来た時、スピーカーの設置場所で考えていたっけ。

そんなものがない。

「そんなものはない」

「え？いやいや、気分をリラックスするのに音楽は必要じゃよ！」

「音楽は俺も弟も聴かない。心遣い感謝するが、一刻も早く修行を開始したい。操作方法を教えてください」

「……せっかちな奴だな。……わかった。入りなさい」

その後俺はブリーフ博士から操作方法を教わり修行を開始した。

またもう一つ重要な問題に気がついたので指摘した。それは食糧。

巨大な冷蔵庫にはパンパンになるまで食糧があったが、それでも足りない。だから三倍の量を頼んだ。

俺は全てチェックが終わると修行を開始した。

目標は悟空復活までに100Gの重力を克服すること。

俺はその日以降、ブリーフ博士の家にお世話になりながら修行した。

その日からちょうど一週間後、ブルマたちから救援要請がきた。

やはりフリーザはナメック星に来ていたらしい。

俺はラオからもらった上が白、下が黒のカンフーのような道着を着て悟空を待つ。

「にいちゃんー!」

筋斗雲にのる悟空が到着し、ナメック星に出発した。

「にいちゃん……腕上げたな」

「ああ。一週間修行をしたからな。お前も早く100Gでも動けるようになるんだな」

「ああ。すぐ克服して見せるさ」

「期待しているぞ」

向かうはナメック星。そこには宇宙の帝王フリーザがいる。

だが、どこかワクワクしていた。それがサイヤ人の本能なのか、心強い仲間がいるからなのかはわからない。

「待ってるよみんな!」

悟空は常に前向きだ。

その背中を俺は見ながらも改めて誓った。

どんな強敵が現れようが大切なものを守るため立ち向かうと。

一つになったラディッツに恥じない戦いをすると。

俺は誇り高きサイヤ人なのだから。

ナメツク星編 ラデイツツ、宇宙船にて。

俺と悟空はナメツク星に向けて出発した。

6日で到着するので、その期間修行しフリーザとの戦闘に備える。俺は一週間早く修行した結果、100Gを克服した。だからナメツク星到着までは悟空が100倍に慣れる補助をする。

サイヤ人の成長速度は異常だ。その生まれ持った性質を利用すれば100G克服は簡単だ。

ちようど仙豆も六つ残っている。

ナメツク星に着いた時に最低三つ残っていれば大丈夫だろう。仙豆を有効活用すれば悟空の戦闘力は物語に比べて強化される。

正直俺が関わっているので多少の変化は出ているだろう。

悟空が頼りだ。

俺は幾ら強くなるうがフリーザには勝てない。界王拳が使えないからだ。

界王拳は作中では悟空しか使っていないなかった。何故教えないのか賛否両論あったが、悟空にやり方を聞いて少し教わったが習得はできなかった。

界王拳は天性の才能を持つ悟空だからこそ習得できたのだと実感した。

俺も気のコントロールには自信があったがそれは0%から100%に切り替えが出来るだけ（合掌すれば瞬時に切り替え可能）だ。

界王拳は制御に失敗すると体が壊れる。界王拳を使って失敗し、貴重な仙豆を一つ消費してしまった。

勿体ないが、この教訓から学べたこともある。あと、戦闘力も少しだけ上がった。

「…な…なあ、にい……ちゃん」

「ん？なんだカカロット。話せるということは少し余裕があるのか？」

「ち……ちげえ」

今、悟空と俺は修行をしている。開始して2日が経過した。

悟空は今100Gで修行をさせてる。

いきなりかもしれないが、俺も必死なのだ。悟空が強くなってもらわないといけないのだから。

「もう……だめ……だ」

「しようがないか」

ため息をしつつ、重力を0Gにする。

何故いきなり100Gでトレーニングをさせているのか、そう聞かれると悟空の意志だからだ。

始め少しずつ重力を上げていこうとしたら、悟空に最短でどうすれば強くなれるかと聞かれた。

俺に聞かれてもしようがないのだが「俺の指示通りにすればすぐに100Gの重力を克服できる」と言ったのだ。

嘘はついていない。やり方次第で2日もあれば克服出来ると断言できた。

悟空に最短で頼むと言われたので、このように修行をしている。

まず、100Gの重力で基本的な筋トレから開始させた。

俺が補助についてひたすら100Gで体が動けなくなるまで酷使を続ける。

動けなくなったら重力を下げていき、動ける重力になったらそのまま筋トレ。

これをひたすら繰り返す。

100Gに慣れてからは食事と睡眠だけで回復させている。

訓練を始めた当初は体の負担が大きすぎて骨が折れてしまったので、その時には仙豆を半分食べさせて回復させた。

結果、今では100Gで筋トレをこなせるようになった。

仙豆は残り三個。

「あと少しだなカカロット」

「はあ…はあ…はあ…ああ」

肩で息しつつ返事をする悟空。

本当に辛そうだな。だが、手応えを覚えているのかどこか嬉しそうだ。

「さて、飯にするか」

「飯！…やったあ！にいちやんの作る飯うめえかなあ！」

「そうか……。なら用意しておいてやる。さっさと風呂入って着替えてろ」

「わかった！」

悟空は飯と聞くとすぐにその場から立ち上がり風呂場へ移動した。

前世の経験からある程度の料理はできる。まあ、料理と言っても手間がかかるものは作れない。

味を変えたり、油で揚げたり、炒めたりなどなど。

驚いたのだが、ブリーフ博士はすごい。宇宙船の中には厨房もある。

レシピ表示機能がプログラムされていて、作りたい料理をいえば勝手にレシピが表示されるのだ。

またサポート機能もついていた。

サポート機能は例えば揚げ物だったら出来上がれば自動で引き上げてくれる。焼き料理なら食材セットするだけで自動で作ってくれる。

もちろん俺も料理しているが、一人でも5人で作業しているのと同じくらいの速さでできる。

調味料も多く、香辛料もある程度用意してあった。

用意周到すぎるといえるか、ここまでこだわるか普通。

規格外の研究者に何を言っても無駄だ。

こういうものだと言いついて聞かせてありがたくその機能を使わせてもらっている。

「こんなものか」

料理すること一時間、テーブルには約20人分くらいの料理が出来上がった。

前世の俺なら食べきれず残すのだが、これでちょうどいいくらいだ。

「お！飯できたんか！うまそうだなあ！」
できたタイミングを見計らっているかのように悟空がキッチンに現れた。

「カカロット、体は大丈夫か？」

「ああ。でーじようぶだ」

「そうか、なら早く飯食って寝るんだな」

「わかってるって。いったただっきまーす！」

とりあえず、二人で飯を食べ始めた。

本当にサイヤ人の胃袋は異常だ。まだ慣れない自分がいる中で2
0人分の料理は数分で胃袋の中に。

「かあー！うまかったあー！」

「ならよかった」

「いやあ、にいちゃんが居てよかった。オラ料理出来ねえからなあ」

「……お前家で家事くらいしてるのか？」

「いや、全部チチに任してる」

「カカロット……お前」

典型的なダメな父親だろ、それ……家事も手伝わない、仕事もして
ないから一銭も家に入れてない。

まあ、チチもそれで許しちやってる……いや、諦められるのか。

それで生活が成り立ってるんだもんな孫一家は。

「なんだよ、急に黙って。あ！もしかして食いたりねえんか？」

「違うー……少し考え事をしてただけだ。気にすることはない。……

ほら、さっさと寝ろ」

「ほーい」

悟空はそのまま寝室へと向かった。

本当にサイヤ人って戦うことしか能がないのか。

よく家庭崩壊しないものだ。

「俺も行くか」

俺は再び重力室に向かい修行を開始した。

悟空の睡眠時間が俺の修行時間。

悟空につきつきりで修業しているので、最低限の仮眠で過ごしてい

る。

無理は良くないと思うが、悟空には界王拳があるように俺も切り札になる技を習得しなければいけない。

「後少し……」

形にはなっている。後は技の精度を上げるため訓練を重ねるのみ。

「始めるか」

重力を100Gに、修行を開始した。

「やったあ！これで克服したぞー！」

五時間後、悟空は睡眠から目が覚めすぐに訓練を開始した。

「待たせたな、にいちちゃん」

「ふ、上出来だ。3日で克服するとはな」

「にいちちゃんがいたからさ。そうじゃなきやもつと時間がかかった」

「どうだかな」

本来なら5日くらいかかってたっけな？今はそんなことどうでもいいが。

「これからは100倍の重力で組み手でもするか」

「ああ」

「……何笑っている？」

悟空はにやにやしている。何があった？

「オラ嬉しいんだ。こうやってにいちちゃんと一緒に修行できんの」

「……馬鹿なこと言っていないで早くやるぞー！」

「危な！いきなり何すんだよ」

俺は照れ隠しで悟空に殴りかかっていた。それから二人で組み手を始めたのだった。

残りの時間は二人で組み手、個人での修行を繰り返して過ごした。途中、界王から連絡が入ったり、宇宙船の外装が隕石に当たり壊れてしまったりとトラブルがあったが、無事にナメック星へ到着した。

俺と悟空は到着後、気を探り状況整理をした。

まず初めに感じ取ったのはでかい気が二つ。ギニューとフリーザだ。

だが、今はそんなことどうでもいい。

「……悟飯の気が小さくなっている。……カカロット！全力で向かえ！俺もすぐに追いつく！」

「ああ！界王拳！」

とりあえず、悟空をみんなの元へ向かわせる。

もう目視できないわ。

「よし……向かうか」

俺は今持てる全力で悟空を追う。毎回思う。界王拳は反則だな。

ラデイツツ、新章初陣

ドラゴンボールを求めナメック星に到着したクリリン、ブルマ、悟飯の3人の希望は絶望へと変わる。

地球から約一月かけてブルマ、クリリン、悟飯の3人は向かった。だが、到着後宇宙船は壊され、しかもベジータを超える存在を認知する。

それは宇宙の帝王フリーザの存在。

その時ドラゴンボールはすでに四つがフリーザたちに奪われていた。

クリリンたちは考え、願いを叶えさせないためナメック星最長老から一つのドラゴンボールを預かる。

ベジータの登場もあり、ドラゴンボール争奪戦や戦況は進む。

その中でフリーザは宇宙中から集めた5人の精鋭部隊、ギニュー特戦隊を召集した。

5人の巨大な気を感じ取ったベジータは焦る。

ベジータはナメック星に到着後も進化を続けた。

地球に侵略した頃の戦闘力では敵わなかった、ドドリアを倒した。

一度は敗北したものの、死の淵から舞い戻り倒したザーボン。

だが、そんなベジータでもその5人には勝てない、そう判断した。

打開策として消去法でベジータはクリリン、悟飯と手を組んだ。

利用できるものは利用する。

未だに到着する様子がない、悟空とラデイツツは当てにならない。

なら、ここは勝つためにベジータは打開策として不老不死になることを提案する。

そこで悩むクリリンと悟飯であったが、最長老からナメック星のドラゴンボールは三つまで願いを叶えられると伝えられ妥協。

ドラゴンボールをそろえて願いを叶えようとする。

だが七つ揃え終わり、願いを叶えようとした時、クリリンと悟飯は願いを叶えようとするのを躊躇した。

それが命取りとなった。

ギニュー特戦隊の5人はすぐにベジータたちに追いつき、全てのドラゴンボールを奪われてしまう。

その後ギニューは七つのドラゴンボールを持ちフリーザの元へと向かい、残された者たちにより戦闘は始まる。

ベジータたちは共闘、不意打ちにより四つ目の低身長、緑色の体をしているグルドを時間停止や金縛りなど特殊な能力に苦戦するものの倒した。

だが、パイナップル頭に地球人のような特徴を持つ巨体……リクームによって絶望を見せられる。

手も足も出なかった。

頼みの綱であるベジータはボロ雑巾にされ、悟飯は首の骨が折られ、クリリンは行動不能にされてしまう。

だが、そんな絶望の中にも光が見えた。

「カカロットの野郎……やっと来やがったか」

ベジータは赤い気を纏い高速で現れた人物、悟空の登場にどこか安堵の表情を見せたのだった。

悟空を追い、みんながいる場所に到着した。

「……大事にはならなかったか」

ついた光景は悟空と悟飯が倒れているクリリンの元へ一緒に歩いている。

近くにはリクーム、少し奥にベジータが倒れていた。

「間に合ったようだなカカロット」

「にいちゃん、思ったより早かったぞ」
「おじさん！」

声をかけると悟空、悟飯が反応する。待ち人きたりと嬉しがっていた。

俺はそんな二人に近づく。

「カカロット、お前のその言葉は嫌味にしか聞こえん」

「そうなんか?……よくわかんね」

「……もういい」

素直に褒め言葉として受け取っておこう。

「悟飯も無事でよかった」

「はい!お父さんに仙豆を食べさせてもらったんです」

「そうか」

クリリンは仰向けで倒れているものの命には別状なし、と。

「カカロット、残りの仙豆を食べさせてやってくれ。俺は少しそいつらで肩慣らししてくる」

「待てよにいちゃん、まさか一人でやるつもりなんか?」

「当たり前だろ?」

「ずりぞ」

いや、ずるいつて言われても。

正直俺は悟空との6日の修行で強くなった。実力だけなら今の界王拳なしの悟空より上だ。

だが、少し実力の確認をしておきたい。相手の気を探る戦闘、対複数人での対決。

少し実践でそれを試したい。

ここにいる連中はちょうどいい。

「お前は観戦してろ。この6日間掃除に炊事……誰がやったと思ってる?」

「そ……それは……でもよお」

「修行に付き合ってたろう?……確か飯食ってる時、一つ願いを聞いてもらおうと約束したな。その権利を今使おう」

「……わかった」

「なら残りのやつに仙豆を食わせてやれ」

悟空は了承した。まさか、こんな時に宇宙船での雑用が役に立つなんてな。

まあいい。

「誰だオメエ」

「ラディッツだ」

「ラディッツ？……どつかで聞いたこと……あ！お前確か……えーと、なんだっけか？」

リクームに名乗るもまた何かを考え始めやがった。

……あまり接点はないが、そんな認識をされていたのか。

「あーそうだそうだ。……ベジータちゃんの腰ギンチャクじゃねーか」

「……まさか認識されていたとはな。……お前はリクームで間違いないよな？」

「おうよー」

リクームはポーズングをしながら答えた。

なんで戦闘中にこんなことやっているんだと思うも気にしない。

「ふ、お前は俺に勝てんよ」

「ぶ……ふははは！ゴミカスがなんか言ってるよ！……おい！お前ら！こいつの戦闘力は幾つだ！」

リクームは後方に控えている青い肌色をしているバータと赤い肌に白髪のロン毛……ジースに声をかける。

二人はスカウターで戦闘力を測り始める。

それにしても戦闘中に相手から視線を離すとは……リクームはアホなのか？

俺は接近し隙がありすぎるリクームの胴体を左脚で蹴る。

飛ばした方向は戦闘力を測る二人の方向。

「油断しすぎだバカめ」

「ぐべー！」

ドカン！

蹴り飛ばしたりクリームはバータとジースの足元に。

二人は体勢が崩れ倒れた。

さて、巧く立ち回れるか不安はあるが、腕試しと行こうか。

ラドイツツ、圧倒す。

「いててて」

「おいリクーム……何をしている」

「油断しすぎだろ」

リクームは蹴られた部位を押さえ、ジース、バータが小言を言う。

目の前に遭遇して改めて思ったけど、ギニュー特戦隊って本当に宇宙の精鋭なのか？

油断多すぎだし、戦闘の素人にしか見えん。

俺はそんな連中の背後に移動する。

「もーゆるさねえぞー……謝ったって許さねー……あれ？いない……どこに逃げやがった！」

「さて、なんだあいつ逃げやがったのか？」「まあ待て二人とも。無理はない。我々相手に怖気付いたのだろう。……今スカウターで探す」
リクーム、バータ、ジースと話す。

ジースは少し冷静だな。……そういえばこいつら気を探れないんだったな。

それにしても戦闘の勘とかでわからないものなのか？すぐ後ろにいるのに。

逆に気がつかないのはすごいな。

「……えーと……後ろから小さい反応が」

ジースの言葉にゆっくりと俺のいる方向へ向く3人。
やっとか。

「お前ら弱すぎないか？……戦闘のときいつもこんな感じなのか？」

「ふははは！何言ってるやがるゴミカスの分際で」

「サイヤ人というのは力の差もわからないバカなのか？おいジースこいつの戦闘力幾つなんだ？」

「戦闘力……たったの2300……ぶー！」

「ふはははー！」

……突然だが、戦闘において俺が一番大切にしていることは如何に

相手の意表を突くかである。

真正面から戦うことを好んでいるのは確かだが、相手を先読み、力を利用する……静の戦い方が得意だ。

今、目の前で俺をバカにしている3人を見て……思う。

こいつらバカなんじゃないかと。

「はははは……ぐべー！」

俺は馬鹿笑いする3人の顔面に拳打する。

そこまで力は込めていないので3人は後方2、3メートルくらい飛んだ。

俺が望むは3対1の戦闘。

このままだと罅が開かない。

だから少し焚き付けるようにする。

「お前ら大したことないな。……これで精鋭部隊？笑わせるなよ。隙だらけで相手との実力差もわからない雑魚の集まりじゃないか……ギニュー特戦隊がいるからと楽しみにしていたのに……残念だ。お前ら……もう帰っていいよ」

「「なー！」」

こんな煽りが通用するかと内心心配していたが……よかった。

3人は少し怒ったようだ。

「……雑魚の分際で……少し遊んでやってただけなのに思い上がりやがって」

「調子に乗るなよ」

「我々ギニュー特戦隊をコケにするとは……許せん」

リクーム、バータ、ジースとそれぞれ話す。

さして、みんなやる気になって何よりだ。

仕上げだ。

俺は後ろを振り向き手招きをした。

「?!……とうー！」

だが、3人はかかってくることなく飛び上がり空中で回転しながら俺を囲うように移動した。

……え？何がしたいんだこいつら。

「特戦隊……リクーム！」

「同じく！はああああ赤いマグマ……ジース！」

「同じく！きええええ青いハリケーン……バータ！」

確かファイティングポーズだったっけ？よくもまあこんなカッコ悪いポーズをするものだ。

……でも、悟飯もいずれ変なポーズやり出すし、多分こいつらの影響が大きいかもしれない。

「楽に死ぬると思うなよ？ゴミクズちゃん！リクーム……キック！」

「行くぞ！」

「おう！」

ダサいポージングからリクームが先手の蹴りをする。

俺はそれを最小限の動きで躲す。

その後攻撃を外したリクームは直進方向に進み岩山にぶつかる。

「はああ！」

「きえええ！」

バータ、ジースが同時に攻めてくる。二方向からの拳と蹴りの攻撃。

だが……。

「遅い」

目だけでなく、体の全ての感覚を研ぎ澄まし動きを先読みする。

気の流れから別方向からの攻撃にも警戒を続ける。

「おりゃああ！」

リクームも攻撃に加わる。……二人から三人に。

「こいつ躲すので精一杯だ！」

「口先だけかよ！」

ジース、バータが俺の動きをそう判断したらしい。

……そろそろいいか。

試したいことは試せた。気的感受性は以前に比べて冴えている。

「はあー！」

俺は気迫で三人を周囲に飛ばす。まだ、実力差がわかっていないよ
うなので、見せしめに一人戦闘不能にする。

とどめは刺さない。しかし、これからの戦闘を考えるとギニューは
仕留めておいた方がよい。

だから、本来の物語と同じ流れにする。

ジースを残すとして飛ばしたやつで一番近いやつは……バータだ
な。

俺はバータに接近、鳩尾に拳打をする。

「ふん」

「かはー！」

バータはそのまま倒れ気絶した。

「バータのやろう油断しやがったな」

「しようがないやつだ」

リクーム、ジースの二人は離れた位置から話した。

「一人目だ。……倒されたい奴からかかってこい」

「調子に乗るのもいい加減にしろよ……よーし。とっておきを披露し
てやろう。逃げてても無駄だぞ。リクーム様の周りはかなり広範囲
に渡ってぶっ飛んでしまっただからな！」

……広範囲に攻撃か。

それを事前に告知するのは警戒させるための何かの作戦か？

なんにせよ、撃たせるのはやめておいた方がいい。

「全員まとめて吹っ飛ばしてやる……リクーム……ウルトラ……」

リクームは両手を空へ上げ、気を高め始める。

……なんだこの隙だらけの技は？

攻撃してくれと言わんばかりだ。

「ファイティング……ミラクルアタック……ぐ!!……きさ……ま」

俺はそんなリクームに腹パンし、気絶させた。

これで二人。

「さて……最後はお前だ。……どうする？」

「不意打ちで勝っただけで調子に乗りやがって！」

ジースは少し疑問が生まれたか？

三人がかりで相手にならず、バータとリクームを一撃で倒された。流石にここまですれば実力差は分かると思うが。

「次で終わりにしてやるー！」

「……………」

ジースは何か自信のある技を出すらしい。

空中に飛び上がり赤い気弾を出し始めた。

「クラッシュボール！」

ジースは真上から技を繰り出す。そのまま避けるのは簡単だが……弾くか。

「はー！」

俺は右手に気を集め右上後方に弾く。

「弾き飛ばしただとー！」

ジースは驚いていた。よほど自信があつた技らしい。

「俺たちは……ギニュー特戦隊だぞ……それが何故……くそ！」

「あ……にげた！」

「仲間置いて逃げるかよ普通」

ジースはその場から逃走した。……ギニューのところに行ったのか？

悟飯は突然の行動にコメントを残す。

だが、まあいい。無駄に追うことはない。

これでひと段落がついたのだから。

ラディッツ、驚かれる。

「お父さん！おじさん死んじゃうよ！」

「そうだ！幾らラディッツが強いからって敵いつこない！」

ラディッツが特戦隊のメンバーと戦い始めた頃、悟空が仙豆をクリリンに食べさせた後の会話。

悟飯とクリリンは直接対決した経験から一緒に戦うべきだと悟空に話していた。

だが、目の前の光景を見ながら悟空は冷静に話し始める。

「でえじようぶだ。心配することねえ。見てれば分かる」

悟空の言葉に困惑をするがクリリン、悟飯は心配しながらもラディッツの戦闘を見始める。

「……え？なんで」

「どうなってるんだ？」

「な！心配ねえだろ？」

ラディッツは戦闘を始め、リクーム、バータ、ジースの三人相手に圧倒する。

驚くクリリンと悟飯。

何が起こっているのか、未だに理解できないでいた。

「にいちちゃんオラより強いかな」

「え？お父さんよりも」

「そうだ」

悟飯は悟空の言葉にさらに驚く。

「で…でもよ。悟空には界王拳があるだろ？悟空より上つての言い過ぎじゃないのか？」

「たしかに界王拳使えばパワーやスピードでは勝る。……けど、界王拳があつたとしても簡単ににいちちゃん相手に攻め込めねえんだ」

「ま……マジかよ」

悟空の言葉に驚くクリリン。だが、驚くあまり、悟空の意味深な発言に気がつかない。

界王拳を使っても勝てると断言できない。その発言が何を意味し

ているのか、それを分かるのはラディッツ本人と悟空だけ。

6日間共に修行したが、全力では戦っていない。それをしたら宇宙船が壊れるから。

だが、悟空の発言には確信があった。共に修行し、ラディッツが一人で行っていた修行を見学していたから。

戦闘は進みバータ、リクームを一撃で倒した。

ジースの一撃を容易く弾き飛ばした。

「あー逃げた」

だが、最後に残っていた逃げたジースをラディッツは追うことはなかった。

「一体どうなってる……明らかにサイヤ人の戦闘レベルを超えてやがる」

仙豆により全回復したベジータは目の前で起こった戦闘に驚いていた。

だが、それよりも怒りや疑問が今のベジータの心境だろう。

「……何故ラディッツがこの俺を」

超えているのか？

ベジータはプライドを大きく傷つけられた。今まで格下だと思っていた相手が……地球の戦闘では圧倒していたはずの雑魚。

クリリンたちから悟空とラディッツがナメック星に向かっている……そう聞いても正直、ラディッツには期待していなかった。

ナツパに手こずるようなやつだ。来ても望みが薄い……そんな認識をしていた。

悟空と修行をしながらナメック星に向かっている。

そう聞いても期待できなかったのに。

「ちくしょう……まさかカカロットの野郎も」

格下と思っていた奴らがサイヤ人の王子である自分を超えた。

認めたくない。そう思うも、目の前で見せつけられた実力差に悔しがる。

そんな中でも戦闘は進む。だが、ラディッツの戦闘に怒りが湧く。

ラディッツはバータとリクームにとどめを刺さなかった。それどころか一人を逃した。

「あの野郎……」

ベジータはジースが退散した後、動けなくなったバータとリクームにとどめを刺した。

「ベジータ……何故とどめをさした？」

「うるさい……ラディッツ貴様、強くなったからって調子に乗ってるな？ 貴様といいカカロットといい。気に入らん」

ベジータは変わってしまった元仲間に対し呆れていた。

今のラディッツに比べれば性格は前の方がマシであった。

格下相手の戦闘を好み、同等以上の相手と戦うのを嫌っていた。

それでも必ず相手にとどめを刺していた。

だが、ラディッツは地球で過ごし、人が変わってしまった。

実際に別人が憑依しているので人間性が変わるの当たり前だが

……ベジータは知る由もないだろう。

だからこそ、いくら強くなるうが甘さが生まれたから、なりきれなかったのだと思いきや結論づけた。

残酷な一面がなくなっただけからこそラディッツはスーパーサイヤ人にはなりきれなかったのだと。

ラディッツ、勘違いする

リクーム達との戦闘が一段落した。とりあえず死人はいないようで安心した。

だが、とどめを刺さなかつたこと、ジースを逃したことをベジータに怒られてしまった。

まあ、ジースを逃したのはギニューを呼びに行ってもらっただけだし。

ギニューの能力は厄介。自分と相手の体を取り替える能力だ。

だから、早めに倒しておいた方が良いと判断した。

それにしても別に怒ることねえと思つたが、以前に比べてラディッツは人格そのものが変わったしな。

少し怪しまれてる感じがする。少し言動には気をつけよう。もし仮にアニメ知識から本来のラディッツが知らないはずの知識を発言したらどう思われるかわからないしな。

「まさかフリーザの恐ろしさが分からんはずなからう?」

話は進み、俺と悟空はスーパーサイヤ人になりきれないと発言された。

まだ、この時の俺はスーパーサイヤ人の存在は知らない。ラディッツから受け継いだ記憶からそうだ。

おそらくスーパーサイヤ人の存在は高位サイヤ人しか知らないのだろう。

だから、下手なことを言わないため知らないふりをした。

「まあ、まてベジータ。オラはそのフリーザってやつがどんだけ強いかしらねえ。だが、オラとにいちやんは強くなった。それでも勝てねえんか?」

「そうだぜベジータ。さつきの戦い見てただらう?俺たちが敵わなかつた奴らを圧倒したんだ。ラディッツに勝てるやつはいねえだろ」

悟空、クリリンと話をするが、多分勝てないだろう。

第一形態でも53万だったか?

今どのくらいかわからない。

可能性があるとしたら俺の潜在能力を引き出してもらおうことだな。最長老にどうにか事情を話して底上げしてもらおうように頼んでみようかな。

「やってみなきゃわからん。……必ず勝てるとは約束はできんよ」

「貴様には勝てん。絶対にな」

「何故断言できる？」

「簡単なことだ。フリーザは今頃ドラゴンボールの力で不老不死を手に入れてしまっているはずだ。これでどう考えても勝ち目はあるまい」

「そんな……」

一応驚くフリをする。

この時点ではまだのはずだ。その答えはクリリンが出してくれた。

「いや…あいつはまだ願いを叶えて無いと思うな」

「なんだと！何故分かる？」

「もしこのドラゴンボールが地球のと一緒なら神龍が出るときに暗くなるはずだろ？それなのにさつきから明るいままだ」

ベジータの疑問にクリリンが答える。一応、俺は知っている。

だが、実際に神龍を見たことがない。悟空が復活する前一度空が暗くなったが念のため確認するか。

「……そういえばベジータとナツパが地球に来る数日前、真つ昼間に空が暗くなったが、それか？」

「そうだ。だから願いは多分まだじゃ無いかと」

「神龍で…なんだそいつは！ドラゴンボールが揃うと何かが出てくるのか？」

これでいいだろう。

悟空たちは会話からまだ仲間が生き返られると希望が見えたと喜んでい

フリーザと戦うのも興味があるが、それよりもブルマとの約束を守らなければいけない。

まずは優先すべきはドラゴンボールで叶えること。

「さて……何かくるぞー」

ふと、俺たちに近づいてくる二つの気に気がつく。
ギニューとジースだろう。どうやらちゃんと連れてきてくれたらしい。

「……お前が逃したからジースがギニュー隊長を連れてきた。今度は一筋縄ではいく相手じゃないぞ」

「わかってるさ。……それにしても」

ベジータに責められるが初めから狙っていたことなので放っておく。

一番気になるのは……この巨大な気。多分フリーザの気だが、念のため。

俺は指を差しながら話す。

「あつちからとてつもない気がするが……もしかしてフリーザの奴か？」

ベジータは示した方向の気を探る。

悟空たちも同じようにして驚いていた。

「大変だ！最長老さんのとこだぞ！……そうか！フリーザの奴、願いが叶わないから合言葉を直接ナメック星人に聞きに行つたんだ。ま
ずいぞ」

「あいつ、願いの叶え方を聞いたら最長老さん殺しちゃうかも！最長老さん死んだらドラゴンボールも消えちゃうよ！」

「なんだとー！」

クリリン、悟飯が発言する。

フリーザは最長老を殺すことはないだろう。物語だと事前に付き人のナメック星人のネイルがフリーザに伝えていたはず。

だが、急いだ方がいい。ドラゴンボールの場所はフリーザの宇宙船がある場所にある。

物語と流れは変わっていないが、俺がいることで違いが出てくるかも。

なら、最優先事項はドラゴンボールを使うこと。

だが、その前にこの場に向かっているギニューをどうにかせねば。

「きたー！」

「悟飯の発言で皆警戒する。」

そこには先程逃げたジースと、紫色の肌に短いツノが2本生えた人物……ギニューがきた。

「クリリン、悟飯お前たちは先行け！」

「わかった」

「はい」

俺の指示にクリリンと悟飯はその場から空へ。

「

ギニューは一撃で終わらせよう。まだ使う気はなかった。だが、こいつの気の高さは俺と同等くらい。不意打ちだが、初見ならこの技は躲せない。

俺はギニューに攻撃を仕掛けようとしてー。

「待てよにいちちゃん。そいつの相手はオラがする」

前に出た瞬間悟空に止められる。いや、さっき俺が全て相手するつて言ったんだけどなあ。

「まて……いや、なんでもない。勝手にしろ」

「わりーな」

悟空の嬉しそうな表情を見たら手を出すな……なんていえないじゃないか。

ふと、ベジータを見るとギニューから視線を離していない。

物語なら悟空にジースの相手をするように頼まれていたけど離脱されていたっけな。

そうされると流れが狂う。せめてジースは確実に仕留めておきたい。

「ベジータ……すまないがお前もドラゴンボールの元へ」

「黙れ！俺に指図をするな……舐めやがって」

「……すまん」

またも怒られてしまった。

「おいベジータ……そんな怒るなよ……そんなむしやくしやしてんならあのジースっちゅうやつに相手頼めねえか？」

「おい、カカロット何を言ってる」

「にいちやん二人も相手をしたんだ。一人くれえいいじゃねえか」
「そういう問題じゃない！」

悟空が突然ベジータに余計な提案をしてきた。

このままだと物語と同じ流れになる可能性がある。どうにか俺が相手をする流れに戻さなければ。

「でえじようぶだ。ベジータは死にかけてんのが治ったから力がグンと上がったはずだ。……おめえもやられっぱなしは嫌だろ？」

「……知っていたのか……いいだろう」

「そういうことだ！にいちやんは先に行っててくれ」

なんか勝手にベジータと悟空のタッグ誕生してんだけど。本当にこれ信用していいものか？

……しようがない。近くに待機していてベジータが離脱したら援護に行けばいいか。

「カカロット、……油断するなよ。ギニューはおかしな能力を持つと噂で聞いたことがある。速攻仕留めてお前も来い」

「ああ」

俺は悟空に言えるだけの忠告をして空に飛び立つ。できる限り遅く飛び気を探りいつでも戻れるように準備をする。

……だが。

背後で悟空とベジータの気が上昇した。

4つあった気は二つずつに分かれた。

戦闘は開始し、ベジータはジースと戦っているようだ。

……疑ってごめんベジータ。

ラディッツ、時間浪費する

「まさかおめえと一緒に戦うことになるなんてな」

「勘違いするな。……俺はあの野郎に舐められたのが気に入らんだだけだ」

悟空、ベジータはラディッツが去った後、会話をした。

会話する二人の視線はギニューとジースに向いており一分も隙がない。

ベジータはラディッツに舐められていると思ったことに相当イラつきを覚えた。不老不死の願いを叶える目的があるものの、このままだと自分のプライドがそれを許さないため、ジースの相手をする事にした。

今のベジータの力はジースを大きく上回る。死にかけから回復したことで力が跳ね上がった。

クリリンと悟飯はドラゴンボールの合言葉を知っている。始めは聞き出してから殺そうと思ったが、ポルンガの叶えられる願いは三つ。

願いを叶えている最中にクリリンと悟飯を片づけて願いを叶えればいい。どうせ悟空はギニューとの戦闘で時間がかかる。

だから多少出遅れたとしても問題ない。

ジースを殺す時間は誤差にしかならないと結論付けた。

「行くぞベジータ！」

「俺様に指図をするな！」

二人は同時にそれぞれの相手にかかる。悟空はギニューに。ベジータはジースに。それぞれ一対一の戦闘が始まる。

悟空とギニューの実力は拮抗していた。お互いに譲らない攻防が繰り返される。

だが、もう一つの組みは完全に実力差があった。

「な……なぜこの俺がベジータ如きに」

「ふ……サイヤ人は死の淵に立つと限界を更に超え強くなるんだ。もう貴様如きじゃ相手にならん」

「ふ……ふざけるな。ギニュー特戦隊は宇宙中から集められたエリート
の集まりだ！……貴様のような猿野郎に負けるはずないんだ！」

「ほう……なら試してみるか？」

「舐めるなあー！」

ベジータの煽りにジースは連続でエネルギー弾を放つ。

だが、その攻撃は通用することなく、ベジータはジースの後ろに一瞬で回り込む。

「どこを狙っている？」

「い……いつのまに」

「ふふふふ」

ベジータは笑いながら右手の掌をジースに向ける。

「た……助け」

「消えろおお！」

ベジータはエネルギー砲を放ち命乞いをするジースにとどめを刺した。

「ジース！」

「ベジータ……そこまですることねえだろ！」

ジースが死んだことに気がついたギニューと悟空。

二人は戦闘を中断していた。

「いつまでも甘い戯言をほざいている。そうしているうちは貴様は超サイヤ人にはなれん」

笑いながらも発言する。ベジータは今の戦闘で自分の力の上がり具合に驚いていた。いくら死にかければ戦闘力が上がるからといっても、この上がり具合は異常だ。これをベジータはサイヤ人のエリートだからと結論づける。

やはり超サイヤ人になる資格があるのはサイヤ人の王子である自分だと。非道になれない悟空やラディッツでは不可能だと。

だが、その前にするべきことがあると考えを切り替える。

不老不死になることだ。

まだ、空は暗くなっていない。そのためドラゴンボールは使われていない。急げば間に合うとわかる。

「カカロット！精々頑張るんだな！」

ベジータはそのままドラゴンボールの元へ向かった。

フリーザの宇宙船に着くと未だにフリーザ軍の兵士が待機していた。

だから、邪魔な兵士を一掃した。

周囲を見るも先にいる可能性があつたクリリンや悟飯がいないのを確認する。

「……奴らより先についたか？……いや、待てよ。確か戦闘力を0にして待機している可能性も」

ベジータは周囲を探るも姿が見えない。だが、あることに気がつく。

「……ここに向かっていている気が二つ……。フリーザはここにはいないようだ。好都合だ。どうせなら戦闘服を新調したかつたが……ドラゴンボールがどこにあるか分からん。ここに待機しているか……気づかれないよう巧く戦闘力をなくさんとな」

ベジータは宇宙船近くの岩山に気を無くして潜伏する。

その後、ブルマからドラゴンレーダーを受け取り、到着したクリリンと悟飯によつてドラゴンボールを掘り起こされ、神龍を呼び出すための合言葉を言うものの、変化は起こらなかった。

クリリンたちの気を探り追いかける。

気を探るも動きは一直線ではなく途中止まったり移動したりと繰り返していた。二人は何をやっているんだか。

一方で悟空たちは変化が現れた。感じていた気が一つ減った。

ジースが殺されたか。

そこから一つ大きな気が速いスピードで移動しているからおそろくベジータ。

ちやんと倒してくれるのはありがたいが、もう少し時間がかかると思っていた。ベジータが来る前にクリリン達と合流したいと思っていたが、計算が少し狂った。

しょうがない。今からベジータを追うか。

俺は考えを切り替え急いで向かおうとする……が。

「おーい！」

「うん？」

急に地上から声が聞こえる。

ふと下を見ると……恐竜の死体があつてその近くに……ワンピース型の黄色い服を着ている青髪の女が両手を大きく振っていた。

「ブルマか？」

でもなんでここにいるのだろうか？

急ぎたいが放っておけないので事情を聞くことも兼ねて地上へ向かう。

「ナイスタイミングよ、ラディッツ！」

「はあ」

俺を来るなりブルマは喜んでいた。一体何があつたんだよ。

「ブルマ、何故ここにいるんだ？」

「そんなことはどうだっていいのよ！アンタこれからドラゴンボールのところへ向かうんでしょ？私も連れて行きなさい！」

ええ。

なんでこんなに自分勝手なんだよ。

「すまないが、無理だ。これから戦いは危険になる。フリーザとも戦うかもしれないんだ。だから」

「か弱いレディを置いていくつもり？……最低ね」

ええ……。どうしろと？

邪魔なだけだ。

「何よ？何か文句があるの？……確かお父さんに恩があるんじゃない

？」

「だからなんだ？」

「まさか恩を仇で返す気？」

「たしかにブリーフ博士には恩がある。だが、それとこれとは関係ない」

「大有りよ！」

……いや、関係ないだろ。なんで今そんなこと言うんだろう？

「ここで私を置いていたら多分死ぬわよ？」

「……そんなことはないだろう」

「さっきここにいる恐竜に食べられそうになったわ。……あーあ。お父さんどう思うかしらね？大切な愛娘が死んだら？……そしたらアンタのせいよ！」

……どこまで気が強いんだこの女は。

「……いいだろう。だが、危険なことに変わりはない。……覚悟はしておけ」

「そんなときはアンタが守ってくれるんでしょ？」

「……保証はできん」

「断らない時点で守ってくれるってことでしょ！期待してるわよ！」

この気の強さ……少し苦手だ。さつさと向かおう。俺はブルマの両脇を抱えて飛ばうとする

「ならさつさといくぞ」

「ちよつと待ちなさい」

「……まだ何かあるのか？」

今度はなんだよ。

「どうやって連れて行こうとしたの？」

「いやどうと言われてもな……普通に両脇を抱えようと」

「……エッチ」

「はっ」

体を両手で押さえてブルマに言われる。

いや、なんだよそれ。どうしろってんだよ。

「では、どうするんだ？背中にでも乗るか？」

「アンタ少しはレディの扱いを覚えたほうが良いわよ」

「どうするんだと聞いている。こっちは急いでいるんだ！」

時間がない。いつフリーザが来るかわからない。

そんな状況でこんなことをしている場合じゃ良い。

「怒鳴らなくてもいいじゃない！まあいいわ。そうね……ならお姫様抱っこしなさい。それなら安定感ありそうだし」

「はあ、わかった。なら早くするぞ」

「え？……ちよ！」

俺は左手で足の太腿あたりを支え、右手で背中を支える。

そして、空へと飛ぶ。

「ちよつとどこ触ってんのよ！」

「文句があるなら地上に落とすぞ！時間がないと言っているだろう！……急ぐぞ！」

「へ？……ちよつと！」

もう俺は気にせずに向かう。今の会話でだいぶ時間をロスした。ブルマを抱えているから全力では飛ばない。

「ちよつといいかも……これ」

「何か言ったか？」

「なんでもない！」

「なら黙ってる！舌を噛むぞ！」

なんか呟いていたが、聞こえなかった。何でもないので忠告をした。

何故かブルマの顔が赤くなっていたが多分怒っているのだろう。少し我慢してほしい。こっちは可能な限り急がなければいけない。ベジータはどう行動するかわからない。だが、少なくともクリリン達が神龍を呼ばない限りは殺すことはないだろう。

それにナメック星のドラゴンボールはナメック語で話さないと意味がないのだから。

「それで?……おめえもまだ隠している力があるらしいじゃねえか?」

「ほう……」

ギニュー対悟空の戦闘は終わりを迎えていた。

互角の戦いをした両者。ベジータによりジースが瞬殺される展開があつたものの、最終的には悟空が界王拳で力を見せつけた。

勝負はついた。悟空はそう判断するも、兄ラディッツからの言葉を思い出した。

「にいちちゃんが言つてたんだ。オメエには隠している能力があるかもつてよ」

「どこでその噂があつたかは……後で貴様の兄に問い詰めるとして……いいだろう。見せてやろう」

ラディッツの忠告は最悪な方向に進むことになる。

悟空は興味を持ってしまった。ギニューの能力について。

「はあああ。ふん!」

「何?」

ギニューは右手に気を溜め、自身の右胸に突き刺した。

何をするのか警戒をしていた悟空は戸惑う。

「貴様の体!交換させてもらう!チェンジー!」

悟空とギニューの体は交換されてしまった。

その後ギニューはフリーザの宇宙船に向かい、その後を悟空は追いかけたのだった。

ラディッツ、尻拭いをする

「こんなところだ」

「へえ……そんなことがあったの」

ブルマを連れて移動中、今何が起こっているのか話した。いや、説明するように強要されたのであったことを全て説明した。

「それにしてもアンタや孫くんが勝てるかわからない相手がいるなんて……想像もできないわ」

「だろうな……お、見えたな」

飛んでいると大きなフリーザの宇宙船が見える。

フリーザの宇宙船に到着し、ブルマを地上に下ろすと周囲を見渡す。……だが、誰もおらず何故かドラゴンボールが掘り起こされていた。

「あー七つ揃ってんじゃない！ラッキー！」

「そうだな」

ブルマは喜ぶ。だが、おかしい。確か物語だとドラゴンボールは埋められていて、それをクリリン達が掘り起こした。

掘り起こした跡があるから誰かが取り出したと思うのだが。出っぱにしても見張りがついてないのはおかしい。

ん？岩陰から物音！

「ちよっ！どうしたのよー！」

ブルマをそばに寄せ警戒する。

俺はエネルギー弾を放つ準備をし、掌を物音がした岩山に向ける。

「ラディッツ……ちよ！俺だよ俺！」

「おじさん……とブルマさん！」

「お前達か」

クリリンと悟飯が出てくる。俺の気を感じて隠れていたようだ。

「クリリンと悟飯君じゃない」

「ラディッツ、なんでブルマさん連れて来ちゃったんだよ！」

「……私がいちや悪いわけ？」

「そ、そう言うわけじゃ……」

ブルマはクリリンを睨む。それにビビっているのか、クリリンは萎縮してしまう。

一応クリリンのフォローしておくか。

「ブルマは危険を承知で連れてきた。恐竜がいるナメック星で一人にいる方が危ない。ならいつその事連れてきて宇宙船の中にも隠れてもらっていた方が安全だと思ってな」

「そりやそうだけだよ。これからフリーザと戦うかもしれないんだぞ？……そっちの方が危ないんじゃないか？……だから連れてこない」

「つべこべうるさいわね」

クリリンが文句を言い、ブルマは両手を腰につけクリリンに視線を合わせて詰め寄る。

言いたいことはわかる。俺も脅迫されて連れてきたようなものだし。

「そう揉めるな。フリーザの宇宙船の中に居れば多少は安全だ。何かあったらその時対処すればいい。今はドラゴンボールだ。確認だが、これを掘り起こしたのはお前達だな？なら早く願いを叶えたらどうだ？」

切るように話を進める。

今は確認最優先。

俺の問いはクリリンが答えた。

「いや……残念ながら願いは叶えられなかったんだ。合言葉が違うらしくて」

「……そうか」

物語と同じだな。ナメック語で喋らないといけないんだっけな。

「詳細を最長老の元へ聞きに……」

俺は途中で発言をやめた。こちらに向かっている気が一つ感じたためだ。

かなり早い。

「お父さんだ！」

「敵かもしれないぞ？」

向かっている気が一つということからその可能性がある。

だが、悟空ならもつと早く飛べるはずだ。スピードを抑えているだけか？

それから少し時間が経ち、こちらに向かってきた正体がわかる。

「悟空だ！もう、ラディッツが変なこと言うから警戒しちまったじゃねえか」

「え、孫君がきたの！」

クリリン、ブルマが発言する。それから数秒後、悟空は着陸する。

「悟空、良かった！あいつらは倒せたんだな！」

何も違和感なく近づくクリリン。

やはり違和感はない。姿は悟空そのものだ。だが、確認するところどころに違和感が。

何故スカウターをしている？何故俺らに声をかけない？何故警戒している？

結論はすぐにわかる。

悟空のやろう……あれだけ忠告しておいたのに。ギニューにしてやられたな。

俺はクリリンの肩に手を置き制止する。

「なんだよラディッツ」

「クリリン……こいつはカカロットじゃない」

「何言ってるんだ？目の前にいるのは悟空じゃなかったら誰なんだよ」

「違和感を覚えないか？何故スカウターをつけている？何故俺らに話しかけてこない？よく見れば警戒もしている。……おかしいとは思わないのか？」

「そう言われてみれば」

クリリンは俺に指摘され違和感を覚える。すると、今度はギニューが話しかけてくる。

「貴様何者だ？……この体の持ち主が妙なことを言っていたが……何を知っている？」

「やはりお前はギニューか」

口調や発言内容から確信を持つ。……厄介だな。殺すなら簡単だ

が、そうなると困るのは俺たちだ。

仮にボコボコにして体を取り替えられたら詰む。

「ちよつとちよつと!? 目の前にいるの孫くんよね? さつきから何言ってるのよ!」

ブルマは何が起こっているのか分からず混乱している。だが、どうするか。

悟空が来るまで時間を稼ぎたい。ギニューは俺に興味を持っている。ならば少し話で時間を稼げるか?

「何か妙だと思っていたが、やはり特殊な能力を持っていたようだな。

……体を入れ替える能力か」

「何故知っていたと聞いている」

「ふ……簡単なことだ。俺は臆病者だからな。常に情報を仕入れるようにしていたんだ。敵となり得る存在のな。その中で妙な噂を聞いただけだ」

「……特戦隊内だけにとどめていたと思っていたがな。……少々サイヤ人を見くびっていた。相当な切れ者らしいな。部下に欲しいくらいだ」

「大袈裟だ。ただビビりなだけさ」

「ふ……どうだ? 貴様俺の元に来ないか? ちよつと特戦隊メンバー募集中だったんだ。今なら俺直々にフリーザ様に掛け合つてやるぞ?」

勧誘か。話で時間を稼ぐだけのつもりが誘われるとはな。

「ふ、誘いは嬉しい……だが、俺より弱い奴の下につく気はないんだ」
「貴様はもつと賢いと思っていたんだがな……この戦闘力18万以上の俺様より強いと言うのか?」

こいつやっぱ気がついていない。

精神と体が一致していないと力は100%引き出せないのだと言うことを。

……ふ、小さな気が一つ近づいてきた。やつと来たか悟空。

「うん?……思ったよりも早かったな」

「にいちゃん気をつけてくれ! そいつはギニューだ! 体を取っ替えられちゃった! すまねえ!」

ギニューとなつた悟空は右胸を押さえながら俺に話しかけてきた。悟空が来た。後は俺がギニューに体を交換する能力を使わせるだけ。「え?.....うそ.....あれがお父さんの?」

「大丈夫だ。俺がなんとかする。カカロットに伝えろ。俺がギニューと戦いで体を交換した能力を使わせるからそれに飛び込めと」

「.....わかった」

悟飯は泣きながら悟空を見ていた。俺は端的に指示する。

「ラディッツ.....気をつけなさいよ」

「大丈夫だ。お前たちは邪魔だ。さつさとカカロットのそばに移動しろ」

なんとなく雰囲気を感じたブルマは俺を心配していたが、大丈夫だと返事した。

三人が悟空のそばに行つたのを確認した後ギニューに視線を向ける。

「.....何度も言うが俺はお前の下につく気はない。その前にお前を殺すからな」

「ほう?.....この俺様に勝てると思つているのか?」

「ああ。お前気がついてないのか?.....弱体化してるぞ?」

「何を言っている?ハツタリは通用せんぞ?」

「ハツタリかどうか試してみるか?まあ、どのみちお前は勝てんよ。」

俺はカカロットよりも気が.....いや、戦闘力が上だからな」

「.....ほう。戦闘力18万よりも上か」

よし.....少し興味を持つてくれたか。とりあえずあとはボコして技を発動させよう。

「いくぞー!」

「はい.....ぐほー!」

俺は一瞬で接近して腹に肘打ちをかます。もちろん手加減をしている。死なれたら意味がないからだ。

「.....たしかに早いな。だが、これからだ.....はあ!」

ギニューは俺に突撃をしてくる。

だが、その動きは単調でいかにも攻撃してくださいと言わんばかり

に。

「隙だらけだ！」

「うあー！」

俺は接近するギニューの攻撃を躲し右足で蹴りをくらわす。だが、それだけで攻撃は終わらせない。

空中で先回りし5回攻撃を食らわせる。

そして、6回目の攻撃で悟空の近くに向かい地面に叩きつける。

「くらえー！」

「ぐはー！」

ギニューは地上に背中をぶつける。

俺はそのまま、わざと接近しギニューに技を誘う。

「とどめだ！」

「ふ！引つかかったな！…お前のその体！いただくぞ！チエーンジ
！」

体が動かない。

本当にこの技は厄介だ。

だが、狙いはうまく行った。

「なに!?どけええー！」

悟空は俺とギニューの間に入ってきた。そして。

「よっしゃ……戻ったぞ」

「……ちく……しよう」

悟空の心は元に戻った。本当によかった。これで安心した。

あとは、ギニューにとどめを刺すだけ。

「はああー！」

「なーしまっ……たあー！」

俺は離れた位置のまま地上にいるギニューにエネルギー砲を放つ。

ギニューは消え去った。本来の物語ならカエルになつて生き延びるんだけど、生きていられると厄介だしな。

俺は地上に降りて悟空の元へ向かう。

「にいちゃん……とどめを刺すことなかったんじゃねえか？」

「また体を取り替えられたいのか？あいつは生きていると厄介だ。」

……お前に文句は言う権利はない」

「……そうだな。すまねえ」

「全くだ。……他にも心配をかけた奴はいる。謝罪をしておくんだな」

「みんな、すまなかつたな」

「よかつたよお父さん！」

「はあー」

悟飯は嬉し泣きをして、クリリンは安心して深呼吸をしていた。

「ベジータ！そこにいるのはわかつてる！」

「「え？」」

俺はベジータの名を呼ぶと三人は疑問符をあげた。

「……ち、気づいていやがったか」

岩陰から隠れていたベジータが出てきた。本当にいたんだ。気がつかなかつたわ。

「おそらくフリーザと戦うことになる。……協力してほしい。嫌だろうが、死ぬよりはマシだろう？」

俺の提案にベジータは黙って頷いた。その後、ベジータの案内で宇宙船に入り、悟空をメデイカルマシンに入れ、悟飯とクリリンはフリーザ軍の戦闘服を着た。

「やはりこの戦闘服の方が落ち着くな。ラオたちには悪いが」

やはり初期に着ていた黒とオレンジの戦闘鎧の方が落ち着く。

だが、戦闘鎧の下に着ているのは悟飯やベジータが着ているような手首、足首まで隠れる黒色の全身スパッツ。

「やはりそつちの方が様になっているな」

「そうか？」

背後からベジータにそう言われる。やはりそうかと俺も再び納得した。

俺は出ている尻尾を腰に巻く。

「たしかにこの格好はしっくりくる」

ラディッツ、最長老の元へ

フリーザの宇宙船に移動したメンバーはそれぞれ行動を開始した。悟空はメデイカルマシーンにて治療、ベジータはメデイカルマシンの横で仮眠を。ブルマは地球よりもはるかに進んでいる科学に興味があるのか、機械を見学したり、持ってきたホイホイカプセルを使い、壊れたメデイカルマシンをしまったり、中身の液体を採取。拳の果てに宇宙船内を周り設計図や説明書を片っ端に拝借していた。泥棒かよ……と小言を言ったら「文句ある？」と睨まれ言い返されてしまった。

だから、俺は放っておくことにした。

そして俺はクリリンと最長老の場所へ向かっていた。

仮眠前のベジータには呪文を聞くだけと伝え、別れた後、クリリンからやってもらいたいことがあると聞かされ同伴を求められた。

「悪いな……付き合ってもらって」

「別にいい。……それで、話とはなんだ？」

「ああ。実は最長老さんにラディッツの潜在能力を引き出してもらおうと思っただけ」

「潜在能力を引き出すだど……そんなことできるのか？」

「わからない。それでも俺も……悟飯も引き出してもらって力が増した。……サイヤ人である悟飯は特にすごかった。お前もサイヤ人だから潜在能力引き出してもらったらフリーザに匹敵するんじゃないかと思っただけ」

「なるほどな。たしかに一月前とは比べ物にならない。よほど修行をしていたかと思っただけ、そんな秘密があったとは」

まあ、何も知らないように接する。

俺の潜在能力を引き出してもらおうというのだろう。

やってもらえる保証はない。それでも頼んでみる価値はある。

今の俺とフリーザの実力差は開きすぎているかもしれない。

潜在能力がどこまで上がるか知らないが、悟空はメデイカルマシーンから出たら大幅アップした。俺だけそのままなのは流石にまずい

と思う。

「あはは。強くなったと言つても……足手纏いには変わりないけどな。これから起こる戦闘……俺は生き延びられる自信がないんだ」
クリリンの声は少し震えていた。自分が悟空の足元に及ばないと嫌でもわからせられたのだろう。

昔は二人は拮抗していた。だが、今は天と地の差がある。
弱気になっているクリリン。

ギニュー特戦隊との戦闘で一撃で倒され、その相手を圧倒した俺を見て……悟空も同じくらいの実力。それを見せつけられて心が折れかかっているのだろう。だから弱気になっている。

少しだけフォローを入れておこう。

「サイヤ人を舐めるなよ」

「……へ？」

「サイヤ人は戦いの中で進化する戦闘民族だ。どんな強敵だろうが倒して見せるさ。……完全に勝機がないわけじゃない。俺とカカロットが二人揃えばフリーザを倒すための秘策はある」

「本当か！……そりゃよかった。ベジータの言葉聞いてたら勝てないんじゃないかって思ってたよ。……いやあ、よかった」

俺の言葉は嘘ではない。

俺とカカロットが揃えば……勝てる可能性が見出せる。

それは悟空と事前に話した。だが、これはあくまでフリーザと単体で戦って勝てないと判断したらだ。

作戦立案した俺は最初からやろうと言ったのだが、悟空がどうしても戦ってみたいと我儘を言った。

「とにかくお前は生きのびることに全力になれ。……実力不足なのを自覚しているならば修行すればいい」

「そ……そうだな。まあ、俺はもう伸びしろ限界かもしれないけどね」
だめだ。完全にマイナス思考になってしまっている。

クリリンは武術家としてすごい。ドラゴンボールのインフレに食らいついてきた技巧派。気円斬然り、拡散するエネルギー砲然り太陽拳然り。

場面によって使い分け、今まで戦ってきた。

サイヤ人編では戦闘力1500くらいのサイバイマンを拡散エネルギー砲で一掃した。フリーザ戦では第二形態を気円斬や太陽拳で翻弄した。第一形態のセル相手に2人の人間を守り生き延びた。

クリリンは格上と戦うために試行錯誤を重ねてきた努力家だ。

だから幾ら実力差があっても折れることなく立ち上がり続けた。

今俺が何も言わなくても変わらないだろう。

だが、何かしら手を貸したい。

「地球に帰ったら俺自ら修行をつけてやろうか？」

「へ？」

俺ならもしかしたら物語以上の成長を促せるかもしれない。

今思えば俺とクリリンの戦い方は似てなくもない。

「……いいのか？」

「ダメならこんなことは言わん」

クリリンの成長に1番必要なのは戦闘を直接指導する存在だと思ふ。

実践的な修行ができて、直接指導ができる……悟飯で言うならピッコロや悟空のような存在だ。

「なら……頼もうかな」

クリリンはそう言った。

その後は会話はなかった。理由は俺らが向かう先に一つの小さな気が現れたからだ。

「誰か宇宙船に向かう気が」

「ああ……でもこの気……どこかで」

「なんだ？心当たりあるのか？」

クリリンはその一つの気を知っているようだった。

「多分俺の知ってるやつかも。近づいてみよう」

俺とクリリンは少し移動した。すると。

「デンドェだー……行こう！」

クリリンは喜びながら発言した。

デンドって確か将来の地球の神様だったな。
俺とクリリンはデンドに近づいていった。

ラディッツ、真実を話す

俺とクリリンはデンデに近づき声をかける。

「おーい！」

「え？……ひえ！」

クリリンはデンデに近づき声をかける。するとデンデは俺を見るなり震え出した。

「俺だよ俺！」

「く……クリリンさん！……それと」

「大丈夫だ！怖い顔はしてっけど、仲間だ」

「そ……そうですか」

クリリン……その紹介の仕方はひどくないか？デンデも怖がつてるし。

……少し警戒心を無くさなきゃ。

「俺はラディッツという。……悟飯の伯父にあたる」

「悟飯さんの……」

こういう時、初対面の人間に親しい人間の名前を出して関係性を伝えると人は親しみを覚える（持論）。

結果はうまくいったのか、デンデは俺に興味を持ってくれたようだ。

よかったよかった。

俺とデンデの様子を見て、クリリンが話しかけてくる。

「デンデ、なんでここにいるんだ？」

「最長老様に言われて願いの叶え方を教えにきたんですよ」

「本当か！……七つ揃えて合言葉言ってもシエンロン出てこなくて」

「おそらく、ナメック語で言っていないからだと思います。ナメック語で喋らないと願いは叶えられませんから」

「やっぱりか……それにしても最長老さんなんで教えてくれなかったんだよ」

「まさか……あの時は七つ揃えられるとは思ってませんでしたから……それよりも早く移動を開始しましょう。最長老様の寿命が近い

んです。フリーザも、もうすぐ来るかもしれない」

クリリンとデンデの会話に一区切りがついた。

たしかに話している場合じゃない。

「そうだな。……ラディッツ、お前はそのまま最長老さんのところへ向かってくれ。フリーザが近くに来るなら尚更少しでもパワーアップした方がいい」

「わかった。……だが大丈夫なのか？最長老……様の命は……」

「それは……たしかに。……どう思うデンデ？」

最長老の寿命が近いのにこれ以上負荷をかけても大丈夫か。それがわからない。

「すみません。最長老様に一度事情を説明してみないことには」

デンデは申し訳なさそうにそう言った。

申し訳ないのはこっちだと言うのに。

話してみないことにはわからない。

とりあえず、俺が潜在能力を上げてもらえた時のことを考えて、願いの選択を早めることを促そう。

ここで話していて、時間をロスしてしまっているし。

今後のことを考えたら、まずはピッコロの復活、ピッコロをナメツク星にワープさせることの二つ。

ピッコロはフリーザとの戦いで役に立つと思うし、ネイルとの同化もしてもらいたい。

そのために幾つか確認してから話さないとな。

「デンデ……と言ったな。願いはいくつ叶えられるんだ？」

「三つです」

「……なら、一つ目の願いで地球のピッコロというナメツク星人の復活、二つ目でそいつをナメツク星にワープさせろ」

「待て待て！なんでピッコロだけなんだ？みんなも同時に生き返らせればいいだろ？」

あ、やべ。

ポルンガが一人ずつしか蘇らすことできないのまだみんな知らないんだった。

……誤魔化さないと。あと、ピッコロ復活の意図も言っておくか。
「複数人同時に生き返らせることができるかどうかはしらん。だが、カカロットがピッコロが復活すれば地球のドラゴンボールも復活すると言っていた。ならそいつを優先するのは当たり前だ。ドラゴンボールを使う以上フリーザとの戦いは避けられん！今は少しでも戦力がほしい！」

「そういうことか！考えたな！」

俺の考えではなくピッコロの考えたことだ。

俺じや瞬時にこんなこと思いつかんよ。

こういうのは言ったもん勝ちだ。うん。俺冴えてる。俺天才。後
はもう一つ確認だけしてもらおうか。

「死んだ人間を何回も蘇らさせられるかも聞いておいてくれ……カカロットがチャオズとかいう奴のことを気にしていた。……頼んだぞ。俺はこのまま最長老の元へ向かう」

「ああ。わかった。気をつけてな」

「お前らもな」

話が終わり俺は一人最長老の元へ向かう。

潜在能力を引き出してもらおう……この時、記憶を読まれるだろう。

だが、その時は受け入れよう。力を求める代償として。

全力で移動すること数分、天井の一部が破壊されている白い建物についた。

移動中、空が暗くなったので、ポルンガを呼んだのだろう。

そろそろ戦闘が始まる。急がねば。

この白い建物の中に最長老がいる。

建物の穴から覗くとそこには年老いた大柄なナメック星人がいた。

多分この人が最長老だろうか。

「どなたですか？」

急に声をかけられてドキリとする。それでも時間は限られているので手短かに要件を話す。

だが、これだけでは情報が足りない。最長老に興味を持ってもらうには。

「俺はラディッツという。地球から来た者、この世界の未来を知る転生者だ」

ラディッツ、覚醒する

「ぐー！」

「そろそろ諦めたらどうですか？」

フリーザはドラゴンボールで願いを叶える方法を聞き出すべく、最長老の元へ訪れた後、ネイルと共に移動した。

フリーザ対ネイル。結果は言うまでもないだろう。圧倒的な実力差でネイルはなす術もなくやられる。

だが、仰向けになりながらもネイルは空を見上げて口角を上げた。

「…………ふふふ」

「どうかされたのですか？ついにドラゴンボールについて話す気になつたのですか？…………なんだ？どうなっている？」

ネイルはフリーザの目論見を阻止したことに喜ぶ。空は暗くなり、ポルンガが呼び出された。フリーザも突然の現象に驚く。

「もうお前がそれを知っても無駄だ」

「…………何？」

「空を見る…………暗くなった。すでに地球人たちがドラゴンボールを使用したと言うことだ」

「くそ…………ただの時間稼ぎだったのか！」

フリーザはその場から急ぎ宇宙船に向かう。

「何が起こっている」

向かう途中スカウターで測るもギニュー特戦隊の反応がなくなり、戦闘力の高い反応がある。

「…………反応が一つ。…………いや、今はそれよりも」

ドラゴンボールを優先。

高い戦闘力を持つものは自分の相手にはならないと判断。今は一刻を争う。

不老不死、そのためにナメック星に来たのにそれが全てが無駄に終わってしまうかもしれないと思う。

だが、それはもう一人の人物も同じであった。

「くそ、あいつらー！」

それは同じく不老不死を望んでいたベジータ。両者がポルンガの元に移動を開始したのだった。

「少し…貴方の過去を探らせてください」

最長老と会い、潜在能力を上げてほしいと頼むと俺の頭に手を乗せて何かを探り始めた。

「おお……これは驚いた。貴方は別世界から転生されたんですね」

「……はい」

「苦労されたんですね。いいでしょう。貴方に眠る力を引き出して差し上げましょう……ふう」

「あ……こ……これは」

最長老がうちに眠る力を解放してくれた……体の内側から溢れ出る。

……すごい、俺にこんな力が眠っていたなんて。サイヤ人とは……こんなにも。

……まだ上がり続けるのかよ。

「ごほ……ごほ。貴方に眠る潜在能力は凄まじい。ですが、申し訳ない、全ての力を引き出すことはできませんでした」

「……え？……これで？」

これでもまだ上があるのかよ。十分すぎるのに。

「どういうことだ？」

「私にはわかりません。おそらくですが、貴方の精神と身体が未だ不安定であることが原因かもしれませぬ」

心と身体が不安定……全く違和感がないのに。……意味がわからない。

「そうか。……少し自分なりに考えてみる。……最長老様、感謝する」
俺は姿勢を正しく頭を下げる。

今考えてもしょうがない。クリリンたちとフリーザは戦い始めて
いる。

能力は向上した。これならフリーザと少しはやりあえるだろう。

できたらスーパーサイヤ人になれば良いのだが……無理だ。

スーパーサイヤ人になるには強い怒りが必要。残念ながら俺はそ
こまで怒ることができない。

俺は大切な人……お世話になった人が殺されてしまったら……な
んて考えたことがあるがそれでも覚醒できなかった。

「ナメック星を……よろしくお願いします」

「はい」

俺はみんなの元へと急ぎ向かう。

俺が潜在能力を解放している間二つの変化があった。

一つは巨大な気が現れたこと、二つ目は誰かの気が大幅に向上した
こと。

おそらくピッコロの登場とフリーザの形態変化が起こったのだろ
う。

今なら一分もかからない。

「待っているよみんな」

「なんてお人だ」

最長老は去ったラディッツのことを考えていた。

転生者で未来を知る者それだけでも驚くことなのに。

「まさかあのようなお人がいるとは」

最長老はラディッツの潜在能力を解放させた。だが、全てを引き出

することができなかつた。

潜在能力を引き出す過程で何か違和感を覚えた。不思議なことに心と体の調和が取れていない。

その理由は転生や元あったラディッツの心が一つになったことに原因があると最長老は予測する。

「もう……ここまでのようですね。皆さん……ご武運を」

そしてついに寿命を迎えた。それに伴いドラゴンボールは石に変化したのだった。

ラディッツ、参戦す。

クリリン、デンデの二人はラディッツと別れた後、悟飯と合流。三人はベジータの目を盗み宇宙船から離れポルンガを呼び出した。

始めはサイヤ人に殺された皆を蘇らしてほしい……だが、その願いは叶えてもらえない。ポルンガは死んだ人間を一度に一人までしか蘇らせられないのだから。

そのことを三人の他に聞いている人物がいた。

北の界王だ。

界王は能力でナメック星の様子を覗いており、全て起きたことを知っていた。もちろんポルンガのことも。

同じ界王星にいるメンツにもそれは知らされていた。

だが、その後何故かピッコロの頭の上の輪っかが消え、復活した。突然の展開に困惑するピッコロは界王に説明を求める。

「おい界王！状況を説明しろ！どうなっついていやがる！」

「待たんか！今……話してやる」

ピッコロは界王に声をかけ事情の説明を求める。

「あやつらは……ピッコロ、お前をナメック星に呼ぶらしい」

「……界王！悟飯と話がしたい！早くしろ！」

「こ、こら！焦らせるな少し待て」

ピッコロは自分が蘇ることを望んでいる。そうすれば地球のドラゴンボールは復活するから。

もう一つの願いで自分をナメック星に移動させようと考えた。

だが、なぜ突然復活したのかがわからない。その意図を確認するため悟飯と話をしたと思った。

「わかったから肩を強く握るな！そしてもつとワシを敬「早くしろ！……」わかった」

そして、ピッコロは悟飯と話をしてわかった。どうもラディッツの提案によるものとわかった。

何故ラディッツがと思うもその疑問も解消した。

ラディッツはフリーザを倒すためだと。そのための戦力として自

分を選択したと。

「ふ……あの野郎、随分と気が利くじゃないか」

「あやつ、余計なことをしておって！フリーザの恐ろしさがわからんのか！」

「まあまあ」

「こらー！はなさんか！」

ラディッツに対してピッコロは感謝した。自分は故郷の仲間を殺したフリーザと戦いを望んでいた。まさかこんな形で叶うとは思ってもみなかった。

ピッコロは界王星から転移した。

その後、向かう途中でネイルと同化し、更なるパワーアップしたのだった。

同時刻。

ピッコロが移動を開始したのとほぼ同じタイミングでベジータはポルンガの元へと辿り着いた。

「き……貴様ら……よくもこの俺様を出し抜きやがったな」

ベジータは怒っていた。雑魚如きに出し抜かれた自分の怒り、クリリンたちに向ける怒り。

「ラディッツの野郎はどこに行きやがった！まさか逃げたわけじゃないだろうな！」

「違う！今最長老さんのところに行つて潜在能力を上げてもらつてんだ！」

「バカ！それを言うな！」

ベジータの言葉に悟飯が真実を言つてしまう。

クリリンはそれを咎めるがもう遅い。

「なに?!……そんなことが可能なのか……なるほどな。あの時カカロットのガキの戦闘力が上がったのにそんな秘密が」

ベジータは気になっていたことがわかり納得する。しかし、さらに

怒りが増す。

「なぜ黙っていやがった！……幾らラディッツの野郎が強くなるうが一人じゃフリーザには勝てんと言うのに！……まさか?!」

ここまで話しベジータ一つの結論に至る。

クリリンたちはベジータが不老不死を望んでいることを知っていた。ラディッツの潜在能力を上げにいき、ドラゴンボールで願いを叶えた。

「ドラゴンボールでラディッツを不老不死にしたな！……チツ……まあいい。フリーザになられるよりはマシだ」

ベジータは現状から結論づけた。消去法だが、納得した。

だが、悟飯が結論を答える。

「へ？……ピッコロさんを生き返らせたんだけど」

「何！貴様らどこまで愚かなんだ！少しは利口だと思つたが、よりもよって役に立つか分からんあのナメック星人を蘇らせただと！ふざけやがって！」

「まあ、ベジータ落ち着けよ。ピッコロも強くなったと言つていたし、強くなったラディッツもいるし」

「貴様らはフリーザを舐めすぎだ！……畜生！……さてよ」

クリリンはベジータを宥めようとするもののベジータの怒りはさらに増す中でドラゴンボールの願いの数について思い出す。

「おい、ドラゴンボールでいくつ願いを叶えた」

「二つだけど」

「それを聞いて安心したぜ。なら今すぐラディッツを不死身にしろ！」

「いや、待て！ラディッツの意志は」

「んなもん後で戻せばいいだろう！貴様ら死にたいのか！」

「それは」

ベジータは宇宙を支配したがっている。だが、今は生き延びるのを優先させたほうがいい。

悟空やラディッツが修行で強くなったのならエリートであるベジータは更に上に行ける。

ラディッツはどうせ、不死身になつても元に戻ろうとするだろう。ベジータは今は無理でもいつかは最強に至れる。そう結論づけてそう提案する。

ベジータの提案にクリリンは戸惑う。しかし、ベジータほどの人物が恐れるフリーザ。ベジータならともかく味方であるラディッツなら、不老不死にしても良いかと思う。

「デンデ！最後の願いでラディッツを不死身にしてくれるよう頼んでくれ！」

「ラディッツって……先程の」

「ああ！」

「……わかりました」

デンデはポルンガに願いを叶えてもらおうとした。

「パプリッド ラディッツ タブラスド ペルメツドル……え？」

だが、その願いは叶うことはなかった。……突然ポルンガは消え、ドラゴンボールは石化してしまった。

空は夜から昼へ。

「な！何が起きやがった！願いは！」

ベジータは確認するも、残念ながら願いは叶わなかった。

「……最長老様が……お亡くなりになりました。おそろく……最後の願いは」

「なにぃ！」

デンデの言葉にベジータは驚く。

「貴様らがもたもたしたやがるからだ。……くそ……おい、ラディッツはいつ戻る！」

「……たぶんもうすぐ来ると思うけど」

「よくもやってくれましたね」

「?!」

突然背後から聞こえた声。ベジータ、クリリン、悟飯の三人は驚き、デンデは震える。

「全く、このお馬鹿さんたちは。……覚悟はできているんですよね？」
フリーザが登場。

ベジータ、クリリン、悟飯の三人は戦闘体勢に入り、デンデは近くの岩山に隠れる。

戦闘が始まった。

ベジータ対フリーザ。

始めは拮抗していた2人。だが、フリーザは形態変化をさせ第二段階に。

クリリンはフリーザのツノで刺され瀕死にされる。

怒った悟飯が気が上がるも、フリーザ第二形態と戦うも敵わず倒されてしまう。

「ぐあああー！」

フリーザに頭を踏まれてうめき声を上げる悟飯。

だが。

「悟飯！」

「ぐはー！」

だが、フリーザは何者かによつて蹴り飛ばされた。

「ピッコロ…:さん？」

「大丈夫か、悟飯」

ネイルと同化し、更なるパワーを手に入れたピッコロが登場した。

ピッコロはフリーザの第二形態と互角の戦闘をする。

それでも倒せなかった。…:フリーザは第三形態に変身し、ピッコロを圧倒した。その光景を見てもうダメだと諦める。

だが、絶望の中にも希望はある。

「随分と見た目が変わったな…:フリーザ」

「…:本当にサイヤ人というのは目障りな存在だよ」

潜在能力を引き出してもらい飛躍的に力を増したラディッツが現れ、フリーザの元へ向かう。

その力は第三形態のフリーザを上回っていた。

「わざわざ殺されにきたのか…:無駄なことを」

ラディッツの登場で戦闘はさらに激化する。

ラディッツ、衝動に駆られる

「無駄？なら試してみろよ」

最長老様の場所からフリーザの場所まではそこまで時間は掛からなかった。

誰か死ぬかもしれないと心配になるも無事であった。

「ピッコロ、無事に復活したんだな」

「お陰様でな」

フリーザの近くにいたピッコロに話しかける。

他の人は離れた位置で戦闘を見ていたようだ。

ピッコロは返事をした後「だが」と続け、話す。

「貴様の計らいで生き返らせてもらったが……すまん、役に立てそうにない」

「いや大丈夫だ。……後は俺がやる」

悔しがるピッコロだが、生き返らせたことに文句はない。

気が上がっているから無事にネイルと同化した。今後のことを考えピッコロの力は必要になってくるだろう。

ピッコロはそのままクリリンたちの元へと向かうと俺は腕を組み待っているフリーザに向く。

「話は終わりましたか？」

「わざわざ待ってくれたのか？……すまんフリーザ」

「まさか上官である私にタメ口とは……随分と調子に乗ってますね、ラディッツ」

「名前を認識してもらっていたとは……光栄だ」

フリーザ軍は何人もの戦闘員がいる。

おそらくサイヤ人の生き残りだから名前くらいは覚えていたのだろう。

……たぶん。

フリーザの姿はバケモノそのものだ。頭は巨大で、白と薄紫の肌。頭と肩の部分、腹の部分は紫の真珠のような光沢がある。

後頭部と背中に棘が生えている。

「フリーザ、今のお前は俺に勝てんよ」

「何を言うかと思えば、与太話ですか？」

「今にわかるさ」

「このまま本気でやればフリーザは倒せる。」

「……だが。何故だろう？」

「ふー」

「なに?!」

俺は一瞬でフリーザとの間合いを積み、顔面で寸止めする。

戦ってみた。……その衝動に駆られてしまう。

今のままならすぐに倒せる。だが、それをしてしまうのはもったいない。

「今の……反応できなかつただろ？」

「……今ので私を倒して仕舞えばいいものを……まさか下等なサイヤ人ごときに真の姿を見せることになるとは」

「ほう……まだ上があるのか。待ってやる……早くなれ」

「ち……舐められたものですね。後悔しなさい。……はああああ」

ナメック星は大きく揺れ、フリーザの姿が徐々に変わり始める。

気がどんどん上がり始める……。ああ。素晴らしい。

今の俺の全力を出せる相手を見つけた。

さあ、早く最終形態になれ。早く戦わせろ。

「な！あいつ何してやがる」

ピッコロがクリリンたちの元へついてから少し時間が経ち、フリーザとラディッツの戦いは始まった。

力の差は歴然。今のフリーザではラディッツに勝ち目は無い。

誰もが勝利を確信した。だが、すぐに事態は変化した。ラディッツがフリーザに攻撃をしたが寸止めしたのだ。

「ふん……なるほどな」

「な、何かわかるのかベジータ」

ベジータはラディッツの行動から結論を導き出し、クリリンはすぐに説明を求めた。

「ラディッツは強者との戦いを求めた……それだけだ。あいつは以前と比べものにならないくらい力が増した。……それを試したくなつたんだろうな。はははは。あいつもサイヤ人らしくなつたと言うことか」

ベジータは笑いながら言った。だが、その発言にクリリンは反論する。

「笑い事じゃないだろ！変身中の今は隙だらけだ！なら早く」

「無駄なことはやめておくんだけ。……死にたいのか？」

「それは！」

ベジータはフリーザとの実力差があることを指摘する。

その一言で冷静になる。今、戦えるのはラディッツだけ。

ベジータは最終形態になったフリーザとラディッツの実力は同じくらいだと思っていた。

……だが、その考えは外れた。フリーザが最終形態になった時、潜在的な気を探って絶望する。

フリーザの底知れない力に。

だからそれぞれが最良の行動を始める。

「俺……デンデを連れて悟空を復活させてくる」

「さて。フリーザの注意が俺らから逸れるまで待て」

「あ……そうだな」

クリリンはピッコロの忠告を聞き、ラディッツとフリーザが地上に移動したのを確認した後、デンデを連れ未だにメデイカルマシーンで治療中の悟空の元へ向かうことにした。

ラディッツ、奮闘する

「お待たせ」

「……ああ」

フリーザが最終形態になった。

見た目は先ほどに比べて身長は縮み、全身白い肌、頭、肩、腹、膝部分が紫の光沢をしていた。

……ああ。こいつが。

「ふは……まさかこれほどまでとは」

「どうしたんだい？ さっきまでの余裕がないよ」

余裕もクソもない。こいつの底がわからない。

真正面からやっても勝てないだろう。だが、今は勝てなくてもいい。とりあえず悟空が来るまでは時間を稼ぐ。

後はフリーザの本気を引き出す。攻撃を受け続け、ある程度気を読み動きを予測できるようにしなきゃいけない。

それが悟空が来た時の勝負の行方を左右するのだから。

「さあ、始めようか」

「……いくぞー」

俺はフリーザに先制した。

いや、先手を譲られたというべきだろう。

……舐められたものだ。

「はあー」

フリーザは俺の顔面への右拳打をそのまま避けようとする。だが、俺を舐めて自分の力に自信を持ちすぎている相手ほど、つけ込む隙が多い。

だから、初めから避けられることを想定して攻撃した。

拳打はフェイク。

「あめえー」

「うー」

俺は最小限の動きで避けられた後すぐに左足で蹴り上げ、フリーザはそのままさらに上空へ。

「はあああ……サタデークラッシュユ！」

追撃のためエネルギー砲を放ち、そのままフリーザに直撃した。

ドカン！

爆発するも、この攻撃はそこまで堪えていない。

「今のはほんの少し効いたよ」

「嘘つけ」

上空から見下ろすフリーザは攻撃の当たった部位を撫でながら話す。そのまま俺と同じ高さまで降下してくる。

「その身のこなし、速さ、力……サイヤ人とは思えないよ」

「お褒めに与り光栄だな」

「ラディッツ……もう一度僕の下で働かないかい？今なら許してあげるよ。ギニュー特戦隊がいなくなり人手不足だね。有能な人材は手元に置いておきたいからね」

勧誘か。確かにこのままやつても負ける。生き延びるためなら再び部下になるのがいいだろう。

「生憎と俺はお前の下につくのはごめんね」

「そうか。残念だよ」

特に残念がる表情はせずにするフリーザ。そのまま右手人差し指で挑発してくる。

いいだろう。その挑発乗ってやるよ。

「はあああああ！」

「何をするつもりだい？」

俺は空中に無数のサーズデイレイを放つ。

フリーザは興味を示している。舐め腐ってやがるよ。

少しその表情……崩してやる。

「くらえー！」

まずは二つのサーズデイレイをフリーザに移動させ、俺は接近する。

「こんなもの……ぐー！」

フリーザに放ったサーズデイレイを誘爆。視界を塞ぎ背後に回り込み、蹴り落とし地上へ。

俺はフリーザが地上にぶつかる前に先回りして再び上空へ蹴り上げる。

「どりゃー！」

「ぐはー！」

「くらえー！」

フリーザに向かいサースデイレイを今度は誘爆せずにつける。

「調子に乗るなー！」

「ぐあー！」

だが、フリーザは爆煙の中から俺に蹴りを喰らわしてくる。避けることは出来なかった。

「きえー！」

フリーザは地上に倒れた俺に追撃を仕掛けてきたので、すぐに体勢を整え、紙一重で避ける。

……危ねえ。

こいつ俺の頭潰す気だったのか。

「はああー！」

「ふ」

俺は避けた後、すぐにエネルギー弾を放つもフリーザは片手で弾いた。

「まだまだだね」

「くそ」

フリーザはエネルギー弾を弾いた後、接近してくる。

体勢がまだ崩れているせいで攻撃を喰らってしまう。

「かはー！」

フリーザから攻撃を受け、岩山に背中をぶつける。

岩山にぶつかる前、空中で威力を殺そうとするが、ダメであった。

大したダメージは入っていないからよしとしよう。

「まだ余裕ありそうだね？」

「どうだか」

フリーザは俺が立ち上がるのを待ってくれたようで言葉を発した後高速で移動し、背後から尻尾の攻撃。

「ふ……はー！」

「ぐー！」

俺はそれを躲し、右拳打でフリーザに攻撃をした。
フリーザは地上に倒れる。

「隙だらけだぞ？」

攻撃を放つ、避ける瞬間の死角からの攻撃は通用しやすい。

これが俺の出した結論。フリーザは強いがムラがある。今まで努力したことがない。そのことに感謝しなきゃな。

訓練しなきゃこの弱点は克服できない。

だが、それでも覆らないのが俺とフリーザの実力差。

フリーザはまだ全力を出していない。

「本当に強いよ。僕の本気の一割くらいはありそうだね」

本気だろうが……流れるに念のため聞いておく。

時間も稼げるし、なるべく長い時間戦うために。

「ハツタリか？」

「ハツタリかどうか……試してみるかい？……地上戦と空中戦。どっちがいい？」

地上と空中か、どちらがいいかと問われれば地上だろう。

地上なら足の踏ん張りが利く。戦い方次第では長く戦うことができる。

「……地上戦で頼む」

「わかったよ」

フリーザは空中に飛び辺りを見渡しちょうど良い小さい島を探す。

この場でも良いかと思うも、戦っていて少し島が壊れていて狭い。

フリーザは戦う島を見つけたのか手招きをしてきた。

俺はフリーザについて行く。

ふと、俺とフリーザが移動が終わった後、二つの気が動く。

……クリリンとデンデの2人。

完全に注意が離れたから悟空のもとへ向かったのだろう。

悟空がもうすぐ来る。

なら俺の行動は決まってくる。ひたすら接近戦を続け、攻撃を受けまくる。

「本当に地上でやってくれるんだな」

「僕は心優しいんだ。少しは楽しめるようにしたんだよ」

「……そりゃ随分と舐められたものだ」

「残念ながら君の実力の底は見えているからね。今まで君……全力だったでしょ？」

バレてんのかよ。確かに本気でやっても敵わなかった。

「どうだろうな？……もしかしたら力を隠しているかもよ」

「ふーん。なら、やってみなよ」

バレてんのかよ。ま、別にいいが。

俺がやることは決まっている。

少しでもフリーザの全力を引き出すことだ。

ラディッツ、死にかける

「はあああー！」

フリーザに対峙している俺は気を最大限高める。フリーザに本気を出させるには攻撃を繰り返し、怒らせること。

まだ離れた位置にサーズデイレイもあるので俺とフリーザのいる上空に移動させる。

「来ないのかい？」

「いくぞおおお！」

気を高めた俺は特攻を仕掛ける。すでにサーズデイレイの移動も終わりいつでも攻撃できる。

俺はフリーザに左拳打を放つ。

「ふ」

フリーザは上空に飛び上がることで躲した。俺はそんなフリーザの注意を引くため迎撃用のエネルギー弾を放つ準備だけする。

「くらええー！」

視線が俺に向いているのを確認し、上空からサーズデイレイを降下させ、フリーザにぶつける。

「うおー！」

ドカン。

空中から放たれた三つのサーズデイレイが直撃する。

少しは効き目があったけど欲しいが……だめらしい。

「はああー！」

俺は追撃でエネルギー弾を放ち直撃させ、フリーザが爆煙の中にいるうちに視界に入らないような岩陰や水中にサーズデイレイを合計十発放つ。

「きえええー！」

フリーザは気合いで土煙を吹き飛ばし、上空を見上げ話し始める。

「姑息な手だ……はあー！」

フリーザは上空に浮いているサーズデイレイを全て破壊した。俺は破壊された瞬間上空に飛び上がりフリーザに攻撃を仕掛ける……

しかし。

「ふん！」

「ぐあー！」

攻撃は空を切りフリーザの蹴りを喰らい、地上に落下する。フリーザはそのまま俺を追撃してくる。

「はあー！」

地上に落下直前、エネルギー砲を地面に放ち体勢を整える。そのままフリーザにエネルギー弾を放とうとするが……見失う。

「こつちだよ」

「ぐうー！」

背中から痛みが。

あの一瞬で背後に回り込まれ攻撃を喰らってしまうもそれだけでは終わらない。

勢いを殺して静止しようとするが。

「どうした？」

「ぐはー！」

再び背後から攻撃を喰らい、再び蹴り飛ばされる。

フリーザはまたも同じように背後に移動した。少し変化をつけてみるか。

このままなら同じように喰らうだけだ。

俺は飛ばされている状態でエネルギー砲を放つ準備をする。

「こつち……」

「今だ！」

「ぐあー！」

俺は声が出た瞬間エネルギー砲を放ちスピードをあげ、フリーザに激突する。

フリーザは体勢が崩れ、俺はその隙に体勢を整える。

フリーザはすぐに威力を殺しその場で制止したのでそのタイミングで接近、拳打、蹴撃を繰り返す。

「うりゃーだ！だ！だ！だ！」

「その程度ですか？」

全てを避けるフリーザ。話す余裕があり受け止める素振りすら見せない。

本当に怪物だよ。だが、少し戦って気が読めてきた。

「きえー！」

「ぐあー！」

全てをよけ切り、左右に捌き俺の真横から拳打を喰らう。

フリーザは基本的に格下相手に遊んでいる時、実力をわからせるために真正面からは攻撃を仕掛けない。

真横や後ろなどから攻撃を仕掛けてくる。

ま、確証はないけど。

「ふー！」

俺は地面に両手をつけてバク転しながら体勢を整える。

フリーザはそのまま正面から俺に接近してきたので近づいたタイミングで右拳打を繰り出す……が。

「遅いよ」

「ぐはー！」

空を切り右脇腹にフリーザの蹴りを喰らう。

すぐに勢いを殺して体勢を整えるが、またも見失ってしまった……だが、なんとなく居場所は予測できる。

俺の真上……一体何をする気で。

「こんなのはどうかかな？」

なんとなくだが、これを喰らうのはまずい気がした。

今までとはフリーザの雰囲気が違うし、意図的に何かをしようとしているようだ。

「はー！」

フリーザが何かをしようとする前に合掌をして気を最大限高め、全力で周囲に気を放出させる。

フライデリバーシ。

気を周囲に勢いよく放出させる緊急回避のための反射技。

ドラゴンボールの物語で気のバリアを使うキャラがいたから参考にした。

だが、これはただ防ぐのではなく反射をさせるので別物だが。
フライデリバーシにより俺の周囲を囲うように現れた赤い気が発
散する。

「なにー！」

「うりゃー！」

「ぐあー！」

「ざまあみろ」

突然のことで動揺するフリーザの顔面に左拳打を放つ。

おそらく、奴は金縛りで動きを封じ俺で遊ぶつもりだったか。

そういえば物語では悟空も食らい、ボールみたいに蹴られて遊ばれ
ていたな。

「はあ…はあ…はあ」

戦ってそんなに時間が経っていないのに…もう呼吸が乱れてき
た。

「今のを避けるなんて…やるね」

「はあ…はあ…そうかよ」

フリーザは平然と歩きながら話しかけてくる。顔面へのパンチ全
く効いてねえわ。

ある程度の距離を詰めたフリーザは俺の様子を見て話しかけてく
る。

そしてフリーザは。

「ふー！」

「ふがー！」

俺の視認できない速度で接近し拳打をしてきた。

…マジかよ。全然見えなかった。

真正面から来たのはわかったけど時間が飛んだようだ。

「誇つてもいいよ。…この僕に少し本気を出させたんだから」
「ぜ…全然見えなかった」

ついに少しは本気を出してくれたらしい。

そして、タイミングとしてはちょうどいい。クリリンとデンデの気
の動きが止まった。

宇宙船についたか。

なら、直に悟空がくる。

「はあああー!」

「無駄なことを」

俺はフリーザに接近して拳と蹴りをひたすら繰り返す。

全てをよけられそして。

「遅いよ」

「ぐはー!」

すぐに凄まじい速度で反撃を喰らう。……それでも。

「ぐはー!」

懲りずに接近して……背後に回り込もうとして……足元を攻撃しようとして。

ただひたすらにさまざま角度から攻撃を喰らい続ける。

「があ……はあ……はあ」

「無駄なことだってわからないのかい?これだから猿は嫌なんだよ」

俺の行動に呆れるフリーザ。

だが……まだ攻撃は喰らえる。速度にも少しなれた。

目で見えなくても気を探れば攻撃のタイミング、方向がわかるようになってきた。

これでも何割の本気かわからない。

なら最後に本気の一撃を喰らいたい。

よかった。保険で技を仕掛けておいて。挑発するにはもってこいの技だから。

「その猿に攻撃を喰らった間抜けはどこのだいつだ?……どんな気分だ?俺のようなサイヤ人ごときに攻撃をされたのは」

「……死にたいのかな?」

額に血管が飛び出るフリーザ。

……ああ。やりすぎたか?これで死んだらシヤレにならん。

「はあー!」

ドカン!

あらかじめ設置しておいた計十発のサーズデイレイがフリーザに

直撃した。

俺は全身の感覚を使いフリーザの気を探る。

「かはー」

「もういいや」

フリーザは20メートルあった距離を今までで最も早い速度で接近し俺の腹を貫いた。

フリーザは俺の腹から腕を引き抜き空中に投げ飛ばす。

こんなの……まともにもやったら勝ち目ねえよ。物語で界王が言っていた。フリーザと戦ったらいけない。

それが身に染みてわかった。

……何をされたか全くわからなかった。ここまで実力差があると想像していなかった。

こんな怪物を本気にさせたので何処か嬉しかったのだが、逆にこうも思う。

こいつは最終形態にさせてはいけなかったと。

正直潜在能力を解放してもらったから互角かと思っていたが、考えが甘かった。

「ばいばい」

「あ……はは」

こんなやつに挑んでいたのかよ。

もうアホらしくなってきた。

フリーザから放たれたエネルギー砲が俺に迫るが、冷静でいられた。

このエネルギー砲は当たることがないからだ。

「……待たせたな」

「かかる……と」

やつときたか悟空。タイミングはばっちりだ。

死にかけたが、これでフリーザの動きはある程度予測できるようになった。

これで数分なら持ち堪えられる。

ラディッツ、秘策準備に取り掛かる

「デンデ、にいちゃんの治療をしてくれ」

「は、はい！」

「待て……フリーザの視線がある。離れてからにしてくれ……まだ大丈夫だ」

悟空は俺の容体を見るなり一緒に連れてきたであろうデンデに治療をお願いしようとした。

だが、残念ながらそれをするとうデンデが殺される。

腹に風穴空いてるけど、まだ死にそうにないから大丈夫だ。

サイヤ人の生存本能はすごいと実感する。

「どうだった……フリーザは」

「強いさ……潜在能力解放させてもこのザマだ」

悟空の質問に端的に答える。

この返しが正しいかはわからないが。

「だが、安心しろ……事前に話していたことは……終わった。後は作戦通りー」

「いや……待ってくれにいちゃん」

フリーザを倒すための秘策。

それを達成するために俺はフリーザと戦った。本気を出させて速さを把握するために。

目的は悟空が来る前に達成した。だから後はデンデに回復させてもらって悟空と2人で遂行するだけなのだが。

「我儘言ってるわい。……オラどうしてもフリーザと戦いたいんだ。

……今のオラの実力がどこまで通用するのか」

「……カカロット」

フリーザを見ながらそう言った悟空は笑っていた。強者との戦闘を楽しみにしているのか。

「お、おい悟空。まさか一人で戦うつもりなのか？ラディッツの言っていた秘策を早くやった方が」

「いや、すまねえクリリン。オラ……今心の底からワクワクすんだ。

……すまねえが」

クリリンには事前に勝つための策があると伝えてあった。だから、それをいち早く実行してほしいのだろう。

だが、こうなったサイヤ人は誰も止められない。

「クリリン……やらせてやってくれ」

「……ああ！わかったよ。悟空、くれぐれも死ぬなよ。無理だとわかったらすぐに言うんだぞ」

「すまねえな」

クリリンは諦めたようだ。

「頑張れよ……行くぞ、ラディッツ、デンデ」

「ああ」

「はい」

クリリンは最後に悟空に一言言つて俺を支えて移動をした。

悟空はそのままフリーザから視線を逸らすことなく見続ける。

目が輝いていた。

ワクワクすつぞつてやつかな。

「まだ雑魚が残ってたなんてね。よっぽど死にたがり屋のようだ」

移動している時、フリーザは俺を追うことはなかった。

俺は悟空が地上に降りるのを見ながらクリリンに連れられ離れた

島に下ろされ、デンデの力で治療してもらった。

……完治したわ。

それにどこか力が湧き出てくる。

瀕死から回復すると戦闘力が上がる。

これがサイヤ人の特徴か。

まあ、これでもフリーザには勝てる気しないが、動きに反応できる。

反応できれば俺の技は通用する。

俺はそのままクリリン、デンデと共に遠くから悟空の戦いを見守るのだった。

デンデに治療してもらった後、ピッコロたちの元へ向かった。

そこにはベジータもいて腕を組み、黙って悟空の戦いを見ていた。戦いを目に焼き付けて自分の糧にしているようにであった。

ベジータは俺が近づいているのに気がついたのか話しかけてきた。

「ラディッツ……おめおめと逃げてきたのか？」

「違うさ……カカロットがフリーザと一人で戦ってみたいと言っ
な」

「ふ……カカロットといい貴様といい……甘さはあるがサイヤ人らし
くなったということか……こんな絶望な状況で戦いを楽しんでやが
る」

ベジータは悟空の戦闘を見ながら口角を上げ話す。

俺も悟空もベジータに認めて貰えたということだろうか？

「フリーザの野郎はとんでもない化け物だ。あの形態になる前に倒し
て仕舞えばよかったものを……。倒せるんだろうな？」

お前のせいでこうなった。遠回しにそう言われたように受け取る。
たしかに俺の責任かもしれないが、俺じゃなくてもベジータや悟空な
ら同じことをしていただろうに。

「倒してみせるさ……俺とカカロットでな」

確証は持てない。だが、やらなきゃいけない。

あの圧倒的強者を倒すために。

その後は誰も言葉を発することなく悟空とフリーザの戦いを見守
る。

やはりこうなったか。

悟空はフリーザに圧倒されていた。

10倍界王拳でも通じない。

俺よりも力も速さも上回っているがそれでも通じない。

「お……おいラディッツ早く悟空に加勢をした方がいいんじゃないか
？」

「そうですよおじさん……このままじゃお父さん殺されちゃうよ！」

クリリン、悟飯が俺に話しかけてくる。

「まだだ」

俺の言葉に二人は黙る。その後は戦闘が進む。

呼吸が乱れてきた悟空の動きは鈍くなる。今までは悟空から攻撃していたのに今は防戦一方になった。

今、連続で攻撃を喰らい、尻尾で首を絞められている。

「おじさん！」

「おいラディッツ！このままでは悟空が死ぬぞ！」

悟飯、ピッコロが話しかけてくる。二人は怒りからか気が上がっている。

……本当にこいつらの目は節穴か？

「カカロットが助けろと言ったのか？」

「僕！お父さんを助けに」

「黙って見てろと言っている！」

「でも！」

悟飯はフリーザに掛かっていこうとする。俺は肩に手を置き制止する。

「いいか！カカロットは助けに入られることを望んでいない！あいつはまだ勝てないと諦めていない！」

未だに首を絞められている悟空。……だが、次の瞬間。

フリーザの尻尾を噛みついて離脱、拳打をくらわせた距離を取る。

「……大丈夫と言ったろ？」

この場にいる全員、安心した表情をした。

……だが、悟空は限界だ。次の一撃で全てを賭けるつもりだろう。

「ピッコロ」

「なんだ？」

物語だと、地球の神はテレパシーを使って界王とやりとりしている描写があった。

やり方知ってそうだし聞いてみよう。

「界王と話がしたい……どうすればいい？」

「……俺に聞かれても知らん……だが、界王はナメック星の様子を

探っているだろうしー」

『ワシになんのようにだ?』

ピッコロとの会話中にどこからか話し声が聞こえる。

他の連中を見るも、あたりを見渡していないことから俺だけに話しかけているのだろう。

俺は界王にある提案のため、話を始める。

ラディッツ、秘策実行

(俺だけの心の中に話しかけているのか?)

『そうだ。……全く……お主のせいで大変なことになっておる。どう責任を取るつもりなんだか』

おそらく状況は把握しているらしい。

……なら、話が早い。

悟空の次の一手で倒せなかった時のために話を進めておく。

(安心しろ界王……様)

『なんじゃ今の間は』

(なんでもない。……頼みがある。今すぐ地球にいる神に地球のドラゴンボールが集まっているか聞いてくれ)

『な……今度は何をするつもりなんだ』

(いいから早くしろ!)

『ぐ……何様のつもりだ全くもう……ピッコロといいお主といい……このワシをもう少し敬ってほしいものだが』

(御託はいい!早急に頼む)

『わかっておる……少し待っておれ』

会話中にも悟空との戦闘は続く。

悟空は決死の20倍界王拳を使いフリーザに攻撃を喰らわせる。

そして、全力のかめはめ波をフリーザに繰り出した。

『ラディッツ!わかったぞい。どうやら、もうすぐ集まるらしい』

(そうか!地球の神に確認してほしい。地球のドラゴンボールは複数人の人間を復活させられること、フリーザに殺された人を復活させられるか、寿命で死んだ最長老様は生き返るのか……それを確認してほしい)

『いっぺんに話すでない』

(時間がない。続ける。可能だったなら地球のドラゴンボールで叶えた後、ナメック星のドラゴンボールで俺、カカロット、フリーザ以外を地球に転移させるようお願いしてくれ。もしもダメならまた俺に教えてほしい)

物語では可能なことだ。

おそらく今から俺と悟空の秘策を実行するとナメツク星は壊れる可能性が高い。

俺と悟空が命がけでフリーザを倒す。これは事前に話して決めたことだ。

『……………いいだろう……………だがその前に教えるんだ。ラディッツ……………一体お主は悟空と何をするつもりなんじゃ?』

(界王様なら見当がついてるんじゃないか?……………元気玉だよ)

『……………やはりそうか』

(もうフリーザを倒すにはそれしかない)

もう会話は打ち切りだろう。

悟空の放った渾身の一撃はフリーザには通じなかった。だが、ある程度のダメージは残っているだろう。

『……………だが、元気玉を放つには時間がかかる……………その隙を許すような相手ではなからう?』

(安心しろ……………その時間は俺が作る)

悟空はもう力をほとんど使い果たした。

それでも勝てないと……………悟空はもう勝てないと判断した。

(界王様、いつでも会話をできるように繋げておいてほしい)

『……………いいだろう』

これで準備は整った。

後は俺次第。

「う……………嘘だろ……………今ので倒せないのかよ」

クリリンは悟空の限界を超えるかめはめ波を食らっても平然としているフリーザを見て体が震えていた。

他の皆も同じである。

だが、そんな中別の理由で俺は体が震えていた。

再びフリーザに挑めると……………俺が一番自信を持っている技で圧倒的強者に挑めるのだと。

武者震いのような感覚。悟空ならばここは「ワクワクすつぞ」と言うのだろうか。

だが、俺は100%楽しみにしているわけじゃない。恐怖や不安が半分を占める。

俺なりに言うならこうかな。

「ゾクゾクすつぞ」

「……へ？」

思わず呟いてしまった。誰か反応したが、気にしない。

「俺は行く。……安心して見ていろ」

その言葉で安心できるかは不明だ。

だが、今俺に言えるのはこれくらいだろう。

俺はその場から飛びフリーザに接近、エネルギー弾を放つ。

「くらえええー！」

フリーザは俺の掛け声に気がついたのか、ため息をしながら弾き飛ばす。

「フリーザああー！」

「また貴様か……目障りだ！」

フリーザは腕を振り上げ俺を叩き落とそうとする。

苛立っているから手を抜くことはない。これを喰らえば致命傷になる可能性もある。

だが、これが目的だ。単なる奇襲ならこんな目立つ行動はしない。

では、何故こんな愚行をしたのか……それはフリーザに俺の技を意識させるため。

俺はフリーザに接近を続け、拳打が当たる間合いに詰める。

もうすでにフリーザの拳は迫っており叩き落とされる……本来なら。

俺は落ち着いたまま合掌をする。

すると、視界がクリアになりフリーザの攻撃が良く見えるように。これはナツパとの対決でも体験したこと。

死の直前になると人間は視界がスローモーションになるという。原因はわからないが、脳内物質の過剰分泌で集中力が極限状態になったときにそうなるのかもしれないらしい。

あの時、俺は訓練で行っていた感謝の正拳突きでナツパにとどめを刺した。

入院中もその感覚が忘れられなかった。そしてもう一つ思ったことがある。

それが任意でできるようになったら武器になるのではないかと。

だから、退院後修行を重ねた……それで行き着いた結論は合掌。

両手を合わせ、気を最大限貯める。両腕を腰につき……正拳突きを
する。

俺が憑依して体に染み付くまでひたすらに磨き続けた動作。

ナメック星にくるまでひたすら100倍の重力でさらに磨き続け
無駄を省き続けた必殺の一撃……合掌拳。

その一閃の拳は宇宙の帝王フリーザに届きうる唯一の刃と化した。

「でいあー！」

「ぐがー！」

フリーザの攻撃は届くことはなく、俺の拳打が炸裂した。

ラディッツ、堪える

フリーザは何が起こったのかわからないでいた。

攻撃した……そう思った瞬間に逆に攻撃を喰らい戸惑う。

「このゴミが……不意打ちとは……猿がやりそうなことだね。お前は半殺しにしたはずだが……なぜ回復している？どんな手を使ったんだい」

「さあな。……答える義理はない」

「そうか……なら、吐かせるまでだよ」

「出来るもんならやってみろよ。……さっきの一撃……痛かったろ？」

「……調子に乗るなよ猿が！」

プライドが傷つけられたフリーザは怒る。そのせいで冷静さを失っていく。

「いくぞフリーザああ！」

ラディッツはフリーザに接近する。あくまで目的は元気玉を放つまでの時間稼ぎだから。

「うりゃーだーだーだーだー！」

蹴り、拳打でがむしやらに攻め続けるラディッツ。その猛攻はフリーザに全て避けられる。

(なんだ?)

ここでフリーザ再び疑問がよぎる。動きは少し早くなった……だが、大差ない。

先ほどの一撃はなんだったんだ？

もしかして自分が食らった攻撃はまぐれか。そう思えてならない。だが、このまま目の前にいられることすらムカついている状況。

さっさと終わらせてやろう。

フリーザはラディッツの攻撃を捌き距離をとる。少し距離をあけラディッツの左上に一瞬で移動、そのまま蹴りを喰らわせようとして。

「ぐあー！」

だが、フリーザの攻撃はラディッツに当たることなく……拳打を喰らう。

フリーザは飛ばされ地面に倒れる。

さほどダメージは大きくない。

だが何故自分が倒れている。

「貴様何をした」

「答えるわけねえだろー！」

再びフリーザに接近をするラディッツ。

その行為にさらに苛立ちが増す。

また全てを避け続け……今度は背後から攻撃を仕掛ける。しかし。

「ぐがー！」

再び攻撃を喰らう。

「どうした？……宇宙の帝王がこの程度か？」

「……調子に……のるなああ！……ぎあ！」

ラディッツの煽り。右手でこいよと挑発をされフリーザがラディッツに正面から右拳打をしようとするも吹き飛ばされる。

「ふざけるな……何故こんな猿如きに……認めんぞ！」

フリーザの腸が煮え繰り返えるような激怒。今まで感じたことのない怒り。

フリーザはいらつきながら地団駄をする。

格下だと思っていた雑魚にしてやられる。煽られる。今までになり経験であった。

「この猿があっ！」

フリーザは右手からラディッツに向かってエネルギー弾を放つ。

ドカン！

ラディッツは正面から拳打で迎え討ち、爆煙から退く。

「きええー！」

フリーザは爆煙から出てきたラディッツに飛びかかり死角から左蹴りを繰り出す。

だが、ここにきてこの均衡は早くも崩れ去る。

ラディッツは再びフリーザの攻撃を超える速さで拳を放ったが、そ

の拳は空を切ってしまう。

「ぐはー」

フリーザの左蹴りが炸裂した。

この一撃はラディッツにとって致命的である。

フリーザはこの一撃で疑問を持ち、それが原因で冷静さを少し取り戻すことになる。

ミスった。

やらかしてしまった。少し焦りが出てしまった。冷静さが欠けていた。

この一撃は当てなければいけなかった。

悟空が離れた位置からフリーザに見つからないように上空に元気玉を作り始めた。

後は俺は合掌拳でフリーザの相手をするだけであった。

始めは順調だった。

気を読みタイミングよく技を放つ。

初めのほうは自分から攻め込んでいたが、流石にそれを繰り返すと怪しまれる。だから、煽って攻撃を誘った。

だが、俺は未だにフリーザを見誤っていた。フリーザの潜在能力は底がしれない。

怒りのゲージが上がるにつれてスピードが速くなってきた。

そして、俺はミスをしてしまった。

タイミングも気の読みも、フリーザの位置もなんとなくわかった。

だが、俺は焦ってしまい、フリーザに放った拳を外してしまい、左蹴りを受けてしまった。

当たりどころは悪くなかったので戦闘にはさほど問題ない。

何が悪いかといえばフリーザが少し落ち着きを取り戻してしまっただからだ。

「なるほどな。……何故この俺が一方的にやられていたのか……わかったぞ」

俺はフリーザの攻撃を受けたあと立ち上がる。フリーザは立ち上がる俺を見て話しかけてくる。

……少し不味いな。

「何がだ？」

「本当に馬鹿らしくなってるよ……こんな簡単なことに気が付かなかったなんてね」

フリーザは腕を組み思考する。それからある結論を導き出したようだ。

……気づかれたな。

合掌拳のみフリーザ相手に真正面から戦える。合掌から繰り出される閃光の拳はフリーザのスピードを上回る。

だが、弱点が多すぎる。

接近戦でしか使えない。距離をとられ遠間から攻められると使えない。だからひたすら接近を続ける。

フリーザの速さは普通じゃ目で追えないので気を読み勘で放つしかない。合掌拳は集中力を極限まで上げる。その発動は合掌から拳を放つまでの短い期間だけ。だから気を読んでタイミングを測り放つしかない。

俺は悟空が来る前にフリーザと戦い本気を引き出した。フリーザの気を察知するため、動きのパターンを読むため、フリーザの位置を予測するため。

怒るとフリーザは動きが単調になる。それは戦闘慣れをしている人ならば冷静になれるのだが、フリーザはできない。戦闘はいつも格下相手、同等の実力や格上相手と戦ったことはほとんどないだろう。

そのため戦闘経験が少なく、油断や慢心が多い。

それが俺が付け入ることのできる隙。だから冷静にさせないために接近を続け、煽り、攻撃を誘った。

だが、それがもう通じない。

「さあ、また馬鹿みたいにかかってきたらどうだ？」

手招きをしてくるフリーザ。

気づかれたかもしれない。

だが、接近戦に持ち込めば。

「ああ……お望み通りな！」

俺はフリーザに接近するも。

フリーザは俺から距離をとりはじめた。

「きえええー！」

「ぐああー！」

そのままエネルギー弾を放ち俺を近づけさせない。

「……チツ！」

その場で舌打ちをする。

あの時……ミスをしなければもう少し戦えたのに。

「ようは近づけさせなきゃ何もできない。……小賢しい真似しやがっ

て。両手を合わせていたが……それも関係してそうだな」

「どうだかな」

強がりをするもバレてしまっている。

だが、ここで朗報が心に聞こえる。

『にいちちゃん待たせた！』

『ラディッツよくやった！悟空の元気玉が完成したぞい！地球のドラゴンボールも集まったそうじゃ！』

悟空と界王様の声が聞こえたのだった。

ラディッツ、決死の一撃を仕掛ける

(界王様！俺のお願いしたことはどうなった？)

『それなのだがな……地球の神ははつきりと断言できないそうさ』

(そうか……だが、やるしかないだろう？)

『……本当にいいんだな？』

(ああ。頼む)

ここでフリーザを倒さなければいけない。

悟空の元気玉は物語に比べて威力がある。

元気を集めるのに集中できたのと、時間があつたから。

その時、界王を通じて、悟空が話しかけてくる。

『待つてくれよ。ここに残るのはオラ一人で十分だ。にいちちゃんも一緒に地球に帰ってくれ』

(だめだ。ナメック星のドラゴンボールを呼び出した時、空は暗くなる。その時にフリーザを引きつけるやつを残さなければいけない。確実にあいつを倒すためには俺が必要だ)

『でも！』

「先程から黙り込んでどうした？」

悟空と心の中で話しているとフリーザに話しかけられる。

どう答えるべきか。

「なに……どうすればいいかと思つてな」

「そうか……なら何かやったらどうだ？なんならさっきのもう一人のサイヤ人を呼んできてもいいぞ？」

「そうかい」

(界王様！早くしてくれ。カカロット、ナメック星の神龍が願いを叶えたら元気玉を放て！)

『わかつたぞい』

『だめだ！したらにいちちゃんも巻き込みまう』

界王、悟空がそれぞれ答える。たしかに元気玉は巨大だ。

フリーザの近くにいるから巻き込まれる。

だが、もちろん考えはある。

(安心しろカカロット、どうせナメック星も壊れるだろう。死ぬのが早くなるだけだ)

『たしかにそうかもしれないねえけど、絶対じゃねえぞ！だったらやつぱにいちちゃんも一緒に地球に』

(それこそ絶対じゃない！確実に仕留めるためには俺が必要だ)

悟空は俺ごと元気玉を放つのがいやらしい。

……しようがない。できるかわからないけど、あれを試してみるか。

(ならこうしよう。フリーザがドラゴンボールに気が付いて気がそれたら、その意表をつけて攻撃する。それでいいな)

それに俺が残りたいのはそれだけが理由じゃない。そういえばまだこの星に残りたい理由を話していない。

(カカロット……死ぬ時は一緒だ。お前だけ一人死なせないさ)

『……にいちちゃん。……わかった』

(……念のためギリギリまで元気は集め続けている。大丈夫だ。ナメック星のドラゴンボールは死んだ人間一人ずつだが何回も生き返らせられるらしいしな)

『……わかった』

悟空は納得してくれた。

これで準備は整った。後は俺次第だ。

『悟空、ラディッツ、これからドラゴンボールで願いを叶える。……頼んだぞー！』

(『ああ』)

その後界王のテレパシーを使い、願いを叶えてもらった。空は暗くなり、複数の気が一気に現れた。

どうやら死んだナメック星人が生き返ったようだ。

「な……あれはー！」

ふと、フリーザがポルンガが現れたことに気がつく。

フリーザは口角を上げ、空を見上げた。

俺はフリーザが見せた隙を逃さない。

これはまだ発想の段階だったので使うのを控えようとした。

だが、今ならいいだろう。

一撃だけで終わるのだから。

俺は合掌し、気を一瞬で高め、右足に気を集める。

いつでも接近できるように準備する。

「な……何が起こってるんだ！……あ、あれは！」

「……さあな」

俺はしらばつくれ、フリーザがポルンガの近くに行かないように少しでも動こうとしたら特攻できるよう注視する。

「ふふふ。僕は運がいい。……あの巨大な化け物が現れたということは」

不老不死の夢。

それを捨てきれていなかったらしい。

ま、させないが。

今界王がデンデに願いを言っている最中だろう。

頃合いだ。

フリーザは飛び立とうとしている。行かせるわけには行かない。

右足で思いつきり地面を蹴り、ポルンガの元へ向かおうとするフリーザに接近する。

「ぐー！」

右足に激痛が走る。だが、今は気にしていられない。

俺は再び合掌する。

今度はいつも通り両腕に気を集める。

「?!」

俺が接近した時、フリーザは気が付かなかった。

合掌拳を応用した身体強化で接近した速さは今までの比にならない。そして、接近した俺がフリーザの近間に入った時、すでに拳は放てる体勢になっていた。

「ぐー！」

突進の威力が上乘せされた渾身の合掌拳。フリーザはその威力を殺すことが出来ず、岩山に飛ばされた。

そして、同時、復活したナメック星人たちの気が消えて、それを確認した後悟空の元気玉がフリーザに向けて放たれた。

ラデイツツ、失念する

悟空から放たれた巨大な元気玉はフリーザに直撃した。

ナメツク星も壊れてしまうと思ったが、どうやら持ち堪えてくれたようだ。

ただ、元気玉が放たれた場所は大きなクレーターができており、それを中心に地上にひび割れが星全体に広がっていた。

星は壊れる寸前であった。

何はともあれ、結果よければ全てよし。ドラゴンボールを使用しナメツク星人たち及びクリリンたちの避難は終わった。

ナメツク星が持ち堪えてくれたので俺も悟空も死ぬことはなかった。

本当によかった。

「おーい！にいちちゃん！」

「……カカロット」

内心安心してしていると上空から呼ばれる。声がした方向を見るとゆっくりと俺に近づいてくる悟空の姿があった。

「やったな……カカロット」

「おう！」

お互い言葉を掛け合う。全て終わったことを確認し合うように。

「ナメツク星……壊れなくてよかったよな」

「そうだな。もし元気玉で壊れちゃったら今頃オラたち死んじゃってたからな」

「ああ」

ふうーつと安心したように深呼吸し周囲を見渡す悟空。

俺は相槌をする。

「これで無事終わったことだし。けえるか」

「……そうだな。……ふうう」

「?!……どうした！」

安心してしまい急に体に力が入らなくなり仰向けに倒れる。

悟空は心配で驚いていたのですぐに安心させるため声をかける。

「大丈夫だ。少し疲れたただけだ。精神的にな」

「精神的?……なんでだ?」

いや……なんでもって聞かれても。

「俺はフリーザ相手に二度も戦ったんだ。そりや疲れるさ」

一度目は風穴を開けられた。デンデに治してもらっても精神的な疲れは回復しない。

合掌拳を初めて実戦で使い余計に疲れた。これらから一気に緊張から解放されたので蓄積された疲労がどつときた。

「何故お前は笑ってるんだ。……疲れていないのか」

「いや、オラも疲れたさ」

「ならなんで」

「……何て言えばいいんか分からないんだけどよ」

悟空は思考した。

少し経って考えがまとまったのか、話始める。

「宇宙にはもつともつと強い奴らがいるつちゅうのがわかって嬉しんだ」

「……は?」

「今回でフリーザのようにすげえ強い奴がいた。もしかしたら想像もできねえような強い奴が、わんさかいんじやねえかと思うんだ」

まあ、確かにその答えはあっている。

今後人造人間や魔人ブウ、破壊神がいるくらいだしな。

目を光らせる悟空。

あ、こいつもしかして喜んでるな?

「ワクワクしてこねえか、にいちゃん?」

しねえよ。

これからのことを考えたら体が震えてゾクゾクしてくるわ。

「だから、もつともつと修行して……強くなろうぜ!」

「そうだな」

強くなることには賛成だ。だが、俺は強い奴と戦いたいが、悟空のように積極的にはなれない。

まあ、フリーザを完全体にして戦いたいと思ったのも今思えば、突然沸いた感情だし。

多分サイヤ人としての本能だと思う。俺もサイヤ人の血が色濃くあるし、元のラディッツと心が一つになって混ざり合っている途中だからだろうな。

「さ、もどるか……地球に」

「おうー」

俺の言葉に悟空は元気の良い返事をする。

「ほら」

「……ありがとな」

立ちあがろうとしたら悟空が手を差し出してくれた。

俺はその手を取り立ち上がる。

……痛い。

そういえば今右足を痛めてるんだった。

すっかり忘れていたわ。

それにしてもなんで俺って戦闘終わった後こんなにもボロボロなんだろう？

地球に戻ったら少し療養しよう……うん。

だが、その前に俺はやらなければいけないことがある。

それはギニュー特戦隊が乗ってきた宇宙船でヤードラット星に行くこと。

そこで瞬間移動とフュージョンについて学ばないと。

今後のことを考えたら必要になる。

なんなら悟空も誘っていくか。

「なあ、カカロット」

「うん？」

「よかつたらなんだ……が」

「なんだ……」

だが、俺は言葉を途中で止めた。

悟空も異変を感じ取ったのか聞いてくることはなかった。

「な……なんで生きてやがるんだよ」

突然ある人物が流れ着いてきた。
それは死んだと思っていた人物。

「フリーザ」

下半身が水に浸かり上半身が地上に乗っている。

見える範囲でだが、後頭部の一部がなくなり、身体中はボロボロでところどころに欠損があり、左腕はなくなり右腕は肘から先がなくなっていた。

本当になんでこの姿で生きていられるんだよ。

普通なら死んでるよ。G虫みたいな生命力だ。

だが、それを見て安心した。

こいつはもうまともに戦える力はない。

完全に息の根を止める。

「待ってくれにいちやん」

「なぜ止めるカカロット」

悟空に制止され理由を求める。

「とどめを刺す必要はねえだろ。こいつはもう戦えねえ……」

「だが、どうする？こいつがもしも生きながらえてたら？……今度は地球に攻めてくるぞ……そうしたら今度は地球が終わる」

「……なら今度は倒せるように強くなればいいだろ？」

「……勝手にしろ」

悟空の意志を尊重する。

悟空は強者と戦い勝利することに喜びを見出すサイヤ人。

おそらくだが、フリーザにとどめを刺さないのは強者と戦うことのできた一つの感謝の表れなのかもしれない。

「よくも……よくも……よくも」

「まだ立ち上がれるのか」

フリーザは一人悔しがり、ゆっくりと立ち上がる。

体はフラフラとしており、満身創痍。

「殺してやる……猿ごときに」

「フリーザ……もうオメエの負けだ」

「なに……」

悟空の言葉に苛立ちを増すフリーザ。

だが、俺はフリーザを倒して気が緩んでいた。

失念していた……追い詰められた奴が何をやらかすか分からない
ということを。

「きえええー！」

フリーザは自分の足元にエネルギー砲を放った。

ラドイツツ、……決断。

「何をしたー！」

「ち……パワーが足りなかったが……惑星の核を破壊した。もともとこの星は壊れかけてたしな……あと30秒つてところか？」

悟空の元気玉でこの星は壊れる寸前、フリーザは核を壊してとどめを刺した。フリーザの言った時間が正しいかはわからない。

……それでも急がなくては。

「急ぐぞカカロット！」

俺は悟空の手を引き、フリーザの乗ってきた宇宙船に向かう。だが、その前にフリーザにとどめをさす。

「死ねえ！フリーザ！」

上空からフリーザに向けてエネルギー砲を放つ。生死を確認している時間はない。

今は急がねば。

「オラたちが乗ってきた宇宙船はあっちだぞ！」

「間に合うか分からないんだ！なら、少しでも希望が残ってる方に向かう！」

今から向かったところで俺たちが乗ってきた宇宙船には間に合わないかもしれない。

いつ壊れるかわからない星なんだ。あまり時間はかけるべきじゃない。

操作ができるか……それも不明。だが、俺と悟空が助かるにはそれしか道はない。

俺と悟空は近くの宇宙船に向かう。

それから秒で着いた。

さほど距離がないのと実力が上がった俺らには移動に時間はかからない。

フリーザの宇宙船は地面の裂け目にギリギリで横になっていた。

俺と悟空はすぐに宇宙船に入る。

「動くか？」

「知らん！とにかくボタンを押せ！」

焦ったせいでまともに考えられない。だが、複雑な構造で操作がむずい。

ブリーフ博士が作った宇宙船に比べボタン一つで操作できるほど簡単ではない。しかも俺と悟空にそれを操作するための知識もない。

だから、ひたすらボタンを押す。

「だめだ！動かねえ！どうするんだ！」

「ちくしょう！」

だめだ。焦って思考がまとまらない。

もしかしたら俺たちの乗ってきた宇宙船に行った方がよかったかもしれない。

「考えろ……考えろ！」

どうすれば良い？思考を止めるな。

………あ、そうだ！

ギニュー特戦隊が乗ってきた宇宙船。

物語では悟空はそれに乗って助かった。

ギニュー特戦隊は五人。探せば宇宙船はあるはず。

「カカロット！外に出るぞ！外に宇宙船の心当たりがある」

「本当か！」

俺と悟空は外に出て探す。

「いいか！丸い宇宙船だ！探せ！」

「あ！ベジータたちが地球に乗ってきた奴か！」

「そうだ！近くにギニュー特戦隊が乗ってきた奴があるはずだ！」

悟空に端的に指示し、血眼になって探す。

どこだ……くそ！地形もだいぶ変わってしまったている。

もう時間がない。

頼む……見つかってくれ。

「にいちゃんあったぞ！」

「でかした！」

悟空が指差した方向に向かう。

そこには……地上に一つの宇宙船が。周囲を見るも地面は多くの
ひび割れがあった。

運が良く一つだけ残っていたらしい。

「やったな！これで助かるぞ！」

「……そうだな」

この宇宙船は一人用だ。

二人も乗るスペースはない。どちらか一人しか助からない。

……なら。

「カカロット」

「ん、なんだ？早く乗ろうぜにいちゃん！早くしないと」

「すまん」

「何を……うぐ！」

俺は悟空のお腹に拳打をする。

「な……なんでだ」

「これは一人用だ。……助かるのは一人」

こうなったのは俺の責任だ。フリーザが第三形態のまま倒してい
たら、あの時、悟空の意見を尊重せずにとどめを刺していたら、俺が
失念していなかったら。

挙げたらキリがないほどの要因。

悟空にも原因はあるかもだが、大部分は俺だ。

「カカロット……元気でな」

「ま……まて……待ってくれえ」

俺は悟空を宇宙船に入れる。そして中からボタン操作をして行き
先を見る。

……ヤードラット星か……ちようどいい。

時間もない。

「カカロット……俺を兄と呼んでくれてありがとな……嬉しかった
ぞ。また会おう」

「に……いちゃん」

多分クリリンたちは俺をドラゴンボールで生き返らせてくれるだ
ろう。

だから、今生の別れではない。
俺はそのまま宇宙船を起動した。

この宇宙船の操作は覚えている。操作できてよかった。
宇宙船のドアが閉まり、上空に飛び立つ。

悟空は宇宙船の窓を叩き何かを訴えていた。

「……………」

笑いが止まらない。

なんで最後に締まらないんだ、

「最長老様との約束……………守れなかった」

せつかく力を引き出してもらったのに、私情を優先したからこのザマか。

「畜生……………畜生！」

俺は心の内から煮え返すような激しい怒りを地面を両手で叩きながら八つ当たりをする。

……………俺にもっと力があれば。

「……………あれ？」

そこで自分に変化が起こったことに気がつく。

力がみなぎり、少し理性が飛びそうな感覚。

「は……………はは」

サイヤ人は穏やかな心を持ち、激しく怒るとスーパースイヤ人に覚醒する。

俺はもともと別人格の穏やかな心を持っていた。地球ではラオたちと過ごしてサイヤ人のS細胞が増え続けたのだろう。

「今更遅えよ……………こんな力」

空中に揺れるように逆立つ金色の自分の髪の毛を見て呟く。

本当に今更だな。

「……………もう終わりか」

ナメック星はマグマが地面から噴火し始めており、それがリミットを示しているようだ。

俺は黙って目を閉じてその場で待機する。それから数秒で消滅するナメック星と共に命の灯火が消えた。

「なんでだよ……」

悟空は宇宙船の中から悔しがっていた。

「オレが……止めなければ」

ラディッツがフリーザにとどめを刺すのを止めなければこんなことにはならなかった。

「くそ……くそ……くそ！」

悟空は己の行動、力のなさに苛立ちが増していく。

だが、今の悟空は気がついていない。

自分の一人称が変わっていること、己の体に変化が起こっていることを。

悟空はこのままヤードラッド星に向かう。

「ナメック星が……消滅した」

「なんだって！……フリーザは元気玉で倒したんじゃないのですか！」

界王は星からナメック星の様子を窺っていた。

ラディッツからの提案で地球の神とやりとりし、生き返らせた者を地球に避難をさせた。

その後、元気玉でとどめを差した。だが、ナメック星は消滅するこ

とはなかった。

全てが無事に終わった。

そう思っていたのに。

「元氣玉をまともに喰らってもなお生きておったのだ。それでもう後がないと判断したフリーザは……ナメック星を破壊したのだ」

「で……では、悟空も……ラディッツも」

ヤムチャは界王に確認をするように話す。

だが、界王は首を横に振る。

「悟空だけは……ナメック星爆発前に脱出した」

「悟空……だけ？」

「そうだ。……ラディッツは死んだ」

「そんな」

皆ショックを受ける。

悟空が生き延びたことに喜ぶも、ラディッツが死んでしまった。

一度も会ったことはなく、会話もしたことのない人物。

人伝で存在は知っていただけの人物だが、返せないほどの恩を感じていた。

地球を守るために仲間であったサイヤ人たちと戦ってくれた。

自分達を生き返らせるため、ナメック星に行き、悟空と共闘しフリーザと戦ってくれた。

ヤムチャ、チャオズ、天津飯は俯く。

だが、その時、天津飯が界王に話しかける。

「界王様……あのギニュー特戦隊とか言う連中のようにラディッツをこの星に呼ぶことは可能ですか？……直接会ってみたいのです」

「ふふふ。ワシも思っておった。閻魔大王にすでに話して許可をもらっておる。直にここにくるだろう」

界王の言葉に三人は少し表情が明るくなる。

界王は閻魔大王に頼んで肉体を残してもらおうようにした。

仮にドラゴンボールで蘇らせたとして、魂が消滅したナメック星にあると復活はできない。その対策の一環も入っている。

「ここは？」

「おーきたか待っていたぞ！」

気がつくとも目の前にヒゲを生やしたツノがある巨人が椅子に座っていた。

あたりを見渡すと天井が遙か上にあり、白い壁に巨大な窓。

ここは一体。

「ここは天国か地獄かを決める裁判の場だ」

「……そうか。……それで？俺は地獄行きか？」

「いや……過去に犯した悪事はあるが……改心し過去を覆す功績がある。……行くとしたら天国だな」

「そうか……そりゃよかった」

こいつは閻魔大王か。

だが、天国ならいいか。

フリーザとまた会いたくないし。

それにしてもなんで俺は肉体があるんだ？

「何故俺はここに？」

「なに……界王様からお願いされてな。貴様に肉体を残すよう頼まれたんだ」

「……なるほど」

……ありがたいな。後でお礼言っておくか。

閻魔大王が右を示して話しかけてくる。

「詳しいことは界王様から聞いてくれ。今案内人を呼ぶ。そっちで待っておれ」

「わかった。……あ、いくつか聞きたいことがあるんだがいいか？」

「なんだ？ワシは忙しいんだが」

「すぐ終わる」

俺が閻魔大王に確認したいことは悟空とフリーザの生死。

ここならおそらく確認できるだろう。

「俺がここに来る前にカカロット……孫悟空とフリーザという名の奴が来なかったか？……俺と死ぬタイミングは同じくらいだったんだが」

「……ちよつと待っておれ」

閻魔大王は分厚い何をパラパラとめくり調べる。

「いや、来てないな」

「そ、そうか」

悟空が生きている安心とフリーザが生きている驚愕する。

やはりとどめをさせなかったか。

……おそらく物語と同じように地球に来る可能性が高い。

「感謝する。……それで、こっちだったな」

「ん？ああ、そうだ……もういいのか？」

「知りたいことはわかったからな」

「そうか、なら行ってくれ」

「ああ」

俺は閻魔大王に礼を言つて示された方向に向かう。

界王が何故俺にそのようにしたのかはわからない。

だが、ありがたい。どのみち魂がナメック星にあったらドラゴン

ボールの願いを一つ消費しなきゃいけない。

俺が界王星にいればその願いは消費することはない。

界王の能力を使えば地球にいる人たちと話もできる。

フリーザは生き延びている。……だが、地球に来るまでは時間がかかるだろう。

だが、平気だ。あの時、俺はスーパーサイヤ人に覚醒した。

まだ、それを制御するための時間がかかるが、それも界王星に行けば修行ができる。

とりあえず今は早く界王星に向かおうか。
行ってみないことには何も始まらないのだから。

無印編

ラディッツ、奇襲に合う。

蛇の道。

閻魔大王様のところから界王星までを繋ぐ一本道。距離は1000万キロメートルで悟空がサイヤ人編で死んだ後、界王星に着くまで約半年後、修行後、戻るのには1日かかった。

俺も到着するまで時間がかかると思ってた望んだが。

「軽く走って一時間……か」

自分自身の成長に驚く。

走り始めて一時間ほどで蛇の道の尻尾にたどり着いた。

ナメツク星に到着してから最長老様に潜在能力を解放してもらい、一度死にかけた。

自分の成長に驚きつつも、今は早く界王様の元へ向かった。

「……誰もいない」

蛇の道の終わりからポツンと浮かぶ小さな惑星に降りる。

だが、人影は見えない。

ここには界王様はもちろん、サイヤ人編で死んだはずの天津飯たちもいるはずなのだが……。

「はいやあー」

「うおおー」

「?!」

突然俺にかかってくる二つの気配。俺は反射的に捌いて反撃をす

る。

「……ぐ」

そうか、気配を消していたか。

俺に反撃をされるも、すぐに体勢を整える二つの影。

ヤムチャと天津飯の姿があつた。

「……かかつてこい」

「はあ！」

武道家を相手に全てを言うまい。

拳で語りたいと言うのなら相手をしてやろう。

ヤムチャと天津飯は同時にかかってくる。だが……遅い。

実力の差は歴然だ。

「うりやあああ！」

「はいやああ！」

俺は天津飯、ヤムチャの攻撃を全て捌く、受けるを繰り返す。

……ギニュー特戦隊よりは強いな。

純粋な力ではギニュー特戦隊の方が上かも知れない。だが、ギニュー特戦隊の奴らは武術という概念はなかっただけの力任せの暴力だけ。

だが、二人は流石は武道家だと賞賛する。

俺が単純に捌いて様子見る一方、二人の息があつた連携。テンポを変え、リズムを変え、間合いを少し変えたりフェイントを入れたり工夫を凝らしてくる。

こちらでも戦っていて参考になり、戦闘でも取り入れられそうな技術がある。

何年も修練を重ね、実戦を積み上げた成果なのだろう。

もう少し続けたいと思うも、戦闘を切り上げる。

「な！」

俺はその場で体勢を低め、ヤムチャに足をかけ転ばせる。

そのまま天津飯の顎に右拳打を寸止めした。

「ま……まいった」

「こ……降参だ」

勝敗を決した二人は苦笑いを浮かべたのだった。

「随分と早かったな、ラディッツ。ハエのようにはえーなあ……なんつって……ぶははは！」

……界王様よ、どうしてくれようこの空気。

せつかく戦闘で温まった空間が氷と化した。

「随分な歓迎だな？奇襲とは武道家のやることか？」

「すまなかった。界王様の提案だったんだ」

「少し話してからの方がいいって言ったんだがな……界王様にやれって言われて」

界王様のせいで冷えた空気も戻り、天津飯たちと改めて会話を始める。

俺の嫌味に天津飯、ヤムチャが謝罪してくる。餃子は様子を窺っている。

少し言いすぎたか？

「冗談だ……お前たちが天津飯、ヤムチャ……そして餃子……だったな。弟から話は聞いている。俺はラディッツだ。よろしく頼む」

改めて自己紹介をすると……何故かその場にいる者は目を見開き俺を見ている。

「……なんだ？」

「いやあ……なんつうか……悟空の兄貴にしてはその……礼儀正しいと言うか」

「意外だ」

ヤムチャ、天津飯が俺に話す。

俺は状況によってはそれなりの態度を取れるが悟空は無理だろうな……うん。

「まあなんだ、知っていると思うが、改めて俺はヤムチャだ。よろしくなラディッツ！」

「天津飯だ。……先ほどの組手……見事だった」

「ボク、餃子……よろしく」

それぞれが自己紹介をする。

餃子だけが少し警戒しているのか、天津飯の後ろに隠れている。

だが、歓迎はしてくれているようで何よりだ。

こうして無事に初対面を果たした。

ラドイツツ、子供を騙す。

界王星についた俺は皆にナメック星での詳細を話した。

「すげえ奴が仲間になってくれて心強いぜ！」

「本当だな」

「本当心強い！」

全てを話し終わるとヤムチャ、天津飯、餃子が喜んでいた。

少し盛って話したものの、ここまで盛り上がるとは思わなかった。

「……今回は運が良かっただけじゃというのに……だが、結果的によかったのか？フリーザも瀕死になったことだし……じゃがなあ。まだ生きている可能性が……はあ」

だが、界王様は一人ブツブツと呟いている。

まあ、あんなに戦うかと念押ししてたくらいだしなあ。

「まあまあ、界王様いいじゃないですか、無事ことが済んだのですから」

「はあ……それもそうじゃな。終わったことを考えても仕方ない」

界王は天津飯の言葉に一人納得した。いや、考えを放棄したと言った方が良さだろうな。

迷惑をかけたのは確かだし、お礼を言わなくてはな。

「界王様、結果はどうあれナメック星の一件、あなたがいなければ、解決できなかった……感謝を」

「……ふ、わかっておるならいいわい」

あ、こいつちよろいかも。

一瞬その考えがよぎるが、失礼にあたるので考えを改める。

界王様がいなければフリーザ相手に負けていた。

だが、こう言つては失礼だが、界王様の能力は便利だ。

死んでいても生きている人間と会話ができるのだから。

そのおかげで地球にいる人たちと会話ができる。一先ずやらなければいけないこと……悟空のその後の確認とタイムとの約束。

「界王様、頼みがある。……少し会話したい相手がいる。……力を借

りたい」

「……いいだろう。して相手は？」

「まずはヤードラット星に向かっているはずのカカロットの安否と……地球にいるライムという子供とラオ・チュウという老人と話がしたい。」

「ワシは連絡手段ではないのだがのう……いいだろう」

界王は触覚を使い悟空を探す。

どうやら遠くにいるらしく、探すのに手間取っていた。

「お！悟空がいたぞ。……だが、今は宇宙船の中で眠っているようだ」「いや、無事だとわかればいい。……地球にいるラオにつなげてほしい」

悟空は今宇宙船の中で寝ていると言うことはいずれはヤードラット星に到着するだろう。

一先ず安心だ。さて、次の問題について考えるか。

ライムについて。……これが一番の問題かもしれない。

どうにかなるか？

とりあえず、うまく行くことを願い、ラオに話しかける。

(ラオ……聞こえるか？……俺だ、ラディッツだ)

『はて？ラディッツさんの声がどこからか……気のせいかな？』

(気のせいではない……今、お前の心の中に話しかけている)

『は？……なんの冗談で？どこに隠れているのですかな？』

(だからー)

俺はラオにこの詳細を伝えた。ナメック星での戦い……死んでしまったことを。

『そ……そんなまさか』

(今話したのは本当のことだ。だが、安心してほしい、一年以内に地球に蘇る)

『それを聞いて安心したが……一年か』

(ライムのことか?)

『ええ。実は7日経っても来ないと拗ねていてな……どうしたものかと』

(伝えたら……大泣きするかもな)
『ええ』

……どうしようまじで。

だが、一度した約束を破っているわけで。

一年前も出て行こうとして……大泣きされたっけ。

(なんでもいいから約束を取り付けて説得できんか?……以前もそうしていたではないか)

『……少し話してみるかの。……条件はなんでもよろしいので』

(ああ。それでいい。だが、俺のできる範囲で頼む)

『やってみましょう』

全て任せきりにして申し訳ないと思うが、そのまま黙って会話を聞くのだった。

だが……。

『うそつきー!』

『だからな、ライム』

『7にちつていったもん!もう8にちめだもん!おじさんくるもん!』

……ダメそうだ。

どうしたものか。

(ライム、聞こえるか!)

『あ!おじさんきた!もうおじいちゃんダメだよそついちや!おかあさんいつてたよ!』

つい会話に入ってしまった。

……どうしよう。

(ライム……実は)

だが、なんと言えば良いのだろう。相手は子供……何かこじつけで言い訳してみるか。

(実は悪い魔法使いに透明にされてしまったんだ)

『えー……じゃあ、いまここにいるの?』

いやあ、なんとはいえいいんだ?

(実は……俺はいい子にしか見えないんだ)

『…………えっ？…ライムわるいこ？…………わがままいったから？…………いいこになるから』

泣きそうな声で話すライム…………どうしよう。勢いで酷いこと言っちゃったなあ。そういえばライムは医者になりたいと言っていたっけ。

(…………これから勉強頑張って…………いい子に勉強してればいつか魔法は解ける)

『…………ほんと？』

(本当だとも。…………今度会えたら遊園地でも行くか?)

『うん！ベンキようがんばっていいこにしてるね！』

子供というのは単純なことで…………いや、俺を信用しているのか？

…………その純粹さにつけ込んで嘘をつく…………俺、最低だ。

だが、このままいけばうまくいきそうだ。

申し訳ないが、許してほしい。

だが、これで納得させなきゃライムは将来どんな大人に成長するかわからない。

『これからおじさんがさびしくないように、いっぱいおはなしするね！』

ライムはそのように発言したが…………毎日は無理だ。

(実は話すのにはいっぱい力が必要でな…………えー。7日に1回、少ししか話ができないんだ)

『そうなの？…………うーんわかった！』

…………わかつたんだ。…………ならいいや。

(あ…………もう力が…………ライムまた7日後にな。ラオ、後は頼む)

『えっ…………おじさん？』

『…………ラディッツさん、わかつた』

逃げるように俺は界王様の肩から手を外す。

…………最後のラオは少し困っていたがどうにかなるだろう。子供の扱いに慣れたご老人に頼るとしよう。

「……………なんだ界王様」

「いやあな。お主も苦勞してるのお」

ただ、界王様には今の会話を聞かれていたので、俺に言葉をかけてくる。

だが、何故か嬉しそうにしていた。

そういえばこいつ、会話の途中肩が震えていたような……笑つていやがつていたな。

……いや、ここは我慢しよう。まだ、界王様をお願いしなきゃいけないことあるしな。

この後、再び界王様の力を使い、ブルマとクリリンにナメツク星、悟空のことを説明した。

少し驚いていたが、クリリンは俺に修行つけてくれるんじゃないかだったのかよ、と小言を言われたが、謝罪して生き返ったらビシバシ心が折れるまで厳しい修行つけてやると約束した。

そして、ナメツク星のドラゴンボールが130日で復活することを聞くと、最初に餃子、ヤムチャ、天津飯の三人を蘇らせた後、次に俺を甦らせるように伝えたのだった。

ラディッツ、約束す。

界王星で数日過ごし、俺は悟空がヤードラット星に到着した後、再び界王様に頼み心に話しかけていた。

(カカロット！……聞こえるか)

『にいちちゃん……飯まだなんか……むにやむにや』

こいつ……寝てやがるのか？

(起きんかカカロット！)

『ふえ！……いつてえ！……あれ？今にいちちゃんの声が聞こえたようなの？』

(カカロット、俺だ。ラディッツだ！)

『に……にいちちゃん！生きてたんか！』

……どうやらやつと起きたらしい。

(いや、残念ながらナメック星消滅と共に死んだ。今、偉大なる界王様のお力を借りて話しかけている)

『そうなんか……オラだけ助かつちまって……すまなかつたな』

(こちらこそすまなかつたな。お前だけヤードラット星に行かせてしまった。それでどうだ？……うまくやれているか？)

悟空はそこまで怒っている様子はなく、元気になっていた。

お互いに謝罪を済ませた。これ以上なにもいう気はない。

『でえじようぶだ。……ヤードラット星人のみんなと仲良くなつてよ……よくしてもらつてんだ』

(そうか……よかつたな。そういえば、ヤードラット星人は奇妙な技を使うらしいが……まさか)

『ああ！まだ見せてもらったばっかだけどな！それに、オラ……すげえ変身できるようになったんだ』

すごい変身……まさか。

(その変身というのは……髪が金色になるやつか?)

『知ってたんか！……ああ。今ヤードラット星人たちの技を学びながらその変身になれるよう修行してんだ』

(そうか……お前もになれるようになったんだな……スーパースイヤー

に)

『ほえーおでれえた。まさかにいちちゃんもか!』

(ああ)

どうやら懸念しすぎたらしい。悟空は次に向けて前進しているようだ。

俺もうかうかしてられないな。

『オラぜってえ強くなるかな……にいちちゃんよりも』

(そうか)

『あーそうだ。界王様のところにいるんなら、みんなに伝えてくれねえか?地球にはそのうちけるって』

(わかった。伝えておこう。満足行くまで修行しろ)

『あんがとな!』

その後は少し話をしてまた地球で再会しようと伝え終えた。

悟空と一度会話した後はそれ以降は話すことはなかった。

ライムとの定期的な会話を界王様に協力してもらいつつ、ヤムチャ達と修行をする生活をした。

界王星の10倍の重力にヤムチャや天津飯の達人たち。

気を可能な限りヤムチャや天津飯たちと合わせての互角の組手、休憩時間では一人で瞑想でのイメージトレーニング、感謝の正拳突きを繰り返す。

フリーザとの戦いは俺の財産だ。未だにフリーザとの戦いは頭から離れることがない。

死人だから特に睡眠とかは必要ないのだが、生きていた時の癖で一定時間睡眠をとっている。

だが、寝たら必ず夢に出てくる。

フリーザとの戦いの光景が。

「俺は……もつと強くなれる」

これからフリーザ以上の敵がいる。そのためには力をつけなければ

ばならない。

まだ、足りない。技の練度、戦術、攻防……修行次第で向上できる。特に合掌拳を極めれば格上相手に戦える。

何倍もあつた実力差も数分であるが持ち堪えられたのだ。

それに合掌拳の原理を応用する身体能力向上もできるようになれば戦いの選択肢も増えてくる。

フリーザの時は体が持たずに一度しか使えなかったことを克服できれば……。

課題が山積み、スーパーサイヤ人になるための制御もしなければいけない。

ナメツク星のドラゴンボールは120日で使えるようになる。それまでに可能な限り訓練しなければ。

時は進み、ナメツク星のドラゴンボールが使用可能となった。

叶えられる願いは三つ。

もちろん残るのは俺だ。

俺が残るのが妥当だ。正直まだスーパーサイヤ人の制御が完璧じゃない。スーパーサイヤ人の制御は死んだ状態の方が効率がいい。

生きているときは肉体の負担がかかってしまうが、死んだ状態なら気にせずに修行ができる。

まあ、ずっと死んだままでいたいわけじゃないが。

「世話になった……先に行く」

「ああ、今度は現世でな」

ヤムチャ、餃子とドラゴンボールで生き返り、天津飯の順番となる。

生き返った人たちは俺と界王様に礼を言って去っていった。

「ラディッツ、最後に一つ頼みがある」

「なんだ？」

だが、天津飯だけは違った。俺に一言別れを告げた後話を続ける。

「一度……スーパーサイヤ人になり、全力で戦ってほしい」

「なぜだ？」

「お前との差が知りたい……今後の励みにするために」

天津飯の言葉に感心する。

物語に初期から出てきたキャラはインフレについていけずに引退する人が多い。

餃子然り、ヤムチャ然り、クリリン然り。

過去に悟空の敵、ライバルと立ち塞がったものたちは引退していく中、天津飯だけは研鑽を続けそのインフレに食らい付いていた。

「……いいだろう」

「感謝する」

「はあああ」

俺は未だに制御できていないスーパーサイヤ人に変身する。

なるまでに時間がかかる。

変身に10秒の時間を要した。

「はあああ………いくぞ」

「……ああ」

変身を終え、天津飯に向かい合い、相互構える。

隙がない天津飯の構えに感心するも、スーパーサイヤ人になった俺と天津飯には埋められない差がある。

「はー」

「……まさかこれほどまでとは」

俺は天津飯の背後に回り込み寸止めで拳打する。

だが、天津飯が気がついたのは寸止めをされた後、反応が遅れていた。

今までスーパーサイヤ人は制御の練習をただで本気で動いたことはない。

「ありがとうラディッツ……では今度は現世でな」

「ああ」

その後天津飯はドラゴンボールで蘇っていった。

「界王様、後130日世話になる」

「随分と寂しくなったのう」

界王様は少し寂しがっていたが、長く生きていく中で界王様の星に人が頻繁に出入りするようになったのは悟空がきてからだだったな。

今まではゴリラのバブルス、虫のグレゴリーと一緒にいたが、新しい来客というのはあまりなかったのではないだろうか。

あくまで予測の範疇に過ぎないが、あながち間違いではないかも知れない。

今の界王様を見ているとそう思えてならなかった。

その日から一人になった俺はスーパーサイヤ人の制御訓練、気の消費を抑えるためスーパーサイヤ人で生活をした。

そして時は流れ130日が経過、無事に復活を果たした。

「これから地球に向かうよ……パパ」

戦いで死んだ人たちが生き返る中、地球に迫る脅威。

それは倒されたと思われていたフリーザの存在。

フリーザは父コルドの助けにより一命を取り留め、欠損した体を機械で補い復活を果たした。

だが、復活した直後、すぐにコルドに次なる目的を掲げたのだった。

ラディッツ、悩みができる。

「ラディッツ！」

「伯父さん！」

俺はカプセルコーポレーションにいた。

ドラゴンボールで生き返ったあと、蛇の道を通り閻魔大王様の元へ移動、地球の神様に頼み地球に連れて行ってもらい、カプセルコーポレーションへと移動した。

俺の肉体はナメック星で宇宙のチリと化した。魂だけ界王星にあったのでその場で復活を果たした。

「久しぶりだな」

俺はカプセルコーポレーションで待っていた人たちに一言告げる。

ドラゴンボールキャラ勢揃いかと思ったが、この場に天津飯と餃子、ピッコロ、ベジータはいなかった。

修行の旅に出たのかなんとか。ベジータは宇宙船に乗り込み宇宙にいるらしい。

今頃フリーザ軍の残党を殺しているだろう。どうも、復活した後のヤムチャたちに俺や悟空の話聞き、焦りが出たのかそのまま宇宙船に乗り込んだとか。

ナメック星人たちは一つ目の願いを叶えると二つ目の願いで新しい星へ移動したらしい。

願いを叶えるとき、ナメック星を元に戻す案も出たらしいが、再びドラゴンボールを求める輩が迫ってくるのを危惧したそうだ。

俺がついた時には事は全て済んだ後だ。考えてもしようがない。今は再会を喜ぶとしよう。

ブルマが祝い席を用意してくれたので堪能するとしよう。
久々の地上での食事だ。

「おじちゃんー」

俺に勢いよく抱きついてくる赤毛の子供が一人、ライムの姿があっ

た。ラオ一家も呼ばれていたのか。

「おじいちゃんがいつてた！まほうとけたんだね！」

ライムの発言を聞き周りはほっこりとしていたのだった。

少し恥ずかしいがよしとしよう。

その後パーティーは始まった。

俺は戦闘鎧をぬぎ、ワイシャツにジーンズに着替えた。

「ラディッツ、あんたこれからどうするの？」

日は暗くなりつつある。パーティーが進み、ライムや悟飯は就寝していた。

ラオ達も、少し疲れてしまったらしく、先に建物の中でゆつくりしている。

そんなとき、食事の最中にブルマから声がかかる。お酒が入っているようで顔が少し赤くなっている。

「まだわからん。……とりあえず修行だな」

「あんたも孫くんと同じなのね」

否定はしない。修行するのは今後現れる敵に対応するためだ。

人造人間に魔人ブウ……今のまま挑んだら負ける。

負けは死を意味し、地球も滅亡してしまう。

クリリンとの約束もあるしな。

「クリリンと修行の約束もある……それにいつ、新たな敵が現れるかわからない。精進するのに悪いことはない」

「たしかにそうね。でも、ヤムチャから聞いたけどスーパーサイヤ人？……になれるようになったんでしょ？孫くんも今修行中って聞いているし、もうあんたら兄弟にかなう悪者現れる想像できないわね。そんなに思い詰めなくてもいいんじゃないの？」

まあ、たしかに新たな敵の存在を知らない人たちからするとそういう反応するのは仕方ないだろう。

だが、今そのことを伝えるのはやめておこう。

「たしかにそうかもな。……今は訪れた平和を満喫するのも悪くないかもな。だが、俺は誇り高き戦闘民族だ。精進を怠ることは俺自身が許さない」

「ふーん……結構なことだ」

ブルマはワインを口に含む。

感心してくれていると受け取っておこう。

今のブルマは俺に対して友好的に接してくれている。

恋人のヤムチャは無事に復活した。

あの時の約束は果たしたのと、ナメツク星の一件を通して俺を仲間と認めてくれたのだろうな。

「そういえばアンタの髪って長いわね。邪魔にならないの?」

「……どうだろうな? 気になったことはない」

ブルマは俺の長髪に触れながら話しかけてきた。

今まで気にならなかったが、長すぎる髪というのも邪魔になるかもな。

スーパーサイヤ人になった時も髪の毛は逆立つし、今後邪魔になる可能性も否定できん。

憑依前、ラディッツが何故今まで髪を切らなかったのかが不思議だ。

「邪魔になるかもな」

「なら、あたしが切ってあげる」

俺がなんとなく発言した後提案してくるブルマ。

……短髪にして心機一転もいいかも知れない。

「いや、いい。他の人に切ってもらおう」

「なによ?……あたしじゃご不満?」

なんで不機嫌になるんだよ。

違う違う。

「ヤムチャが嫉妬しそうだがな?」

「……別にいいのよあんなやつ」

ブルマの勘違いを訂正するもさらに不機嫌になり、別方向に睨む。

「ああ……うん」

その光景を見てどのような反応をすればよいのかわからない。

この祝いの場にはもちろん酒もある。

ヤムチャは酒に酔っていて、街中に出歩いている女性と仲良く話し込んでいた……鼻の下を伸ばして。

一応界王星で過ごした仲だ。フォローを入れておこう。ヤムチャは悪いやつじゃない。

「英雄色を好むと聞いたことがある。いつときの気の迷いなのだ。気にすることはー」

「ヤムチャが何回浮気したと思ってるの？」

「……」

「なに？……アンタも女侍らせたいと思ってるの？」

「それはない」

ブルマの冷や汗が出るほどのドス黒い声にビビる。

うん、ヤムチャは悪いと思う。

浮気はいけない浮気は。

俺はブルマの味方だ……うん。

「一度、ヤムチャと話した方がいいんじゃないか？いつそのこと結婚するとか。身を固めれば流石のヤムチャも変わるだろうに」

「……あいつすぐ浮気するのよね。……あたしも新しい人探そうかしら？」

「……なんで俺を見ながら発言するんだ？フラグを立てた覚えはないぞ？」

かなり酔いが回ってしまっているようだ。さらに顔が真っ赤になっっている。

ヤムチャが堂々と浮気していることにストレスを感じて勢いで飲み過ぎたようだ。

「はあ……少し水を飲んだらどうだ？酔いすぎだ」

「あたし別に酔ってないわよ……ありがと」

俺はテーブルに置いてあったコップに水を注いでブルマに渡す。

ブルマは否定しつつも小さくお礼を言って飲み始めた。

なんで酔っぱらいの介抱せなきゃいかんのだ。

こういうのは俺の仕事じゃないというのに。

内心愚痴るも俺は近くの椅子を持ってきてきて座らせる。

「動くと余計に酔いが回るから、少し休んでいろ」

「……へえ、……孫くんと違って紳士的なのね」

「カカロットと比べるな。少し待っている、ヤムチャを呼んでくる」

「え？……ちよつとなんでそうなるのよ」

俺がヤムチャの元へ移動しようとする、腕を掴まれ、上目遣いで言ってくる。

「こういうのは俺じゃなくてヤムチャの役割だ」

「……あんなやつ放っておけばいいのよ。……あ、アンタがその……」

か……介抱してくれればいいじゃない？」

はあ……どうするんだよこれ。

そんなに不満が溜まつているなら話し合えばいいだろうに。

「一度ヤムチャと話した方がいい。酒が入っているが、その方がお互い本音で話せるかも知れないだろ」

「……………」

「また愚痴なら聞いてやるから、一度勢いで不満をぶつけるのも悪くないかも知れないな」

無責任なことを言っている自覚はある。

だが、乗りかかった船だ。これでヤムチャとの関係が前進するも後退するも別にいいだろう。

ブルマはヤムチャと恋人になって数年単位の付き合いだ。今更喧嘩で仲が拗れることはないだろう。

物語でもベジータという存在と深く関わるようになってからようやく二人は別れた。

まだ、別れるのは先の話。

俺の発言にブルマは黙って頷いた。

「おいヤムチャ」

「なんだよおラディッツ！」

俺の気苦労も知らないで、女の子とイチャコラしてらあ。

「え？何お兄さんの知り合い？」

「へえ？髪長すぎでマジウケる?!」

「でもよく見れば怖い顔してるけどかつこいいじゃん！」

ヤムチャに声をかけるとギャル三人組に絡まれる。

……面倒くさいな。

「俺の友達なんだ！もしかして、ラディッツも混ざりたいのか!?なんだ、そうならもつと早く言えよな！」

余計なことを言いやがって。

こいつ酒入ると浮気癖が悪化するのか？

もう、ヤムチャが余計なこと言ったせいでギャル達が盛り上がりつつちやつてるじゃん！

「おじさん、いくつ？」

「は？」

「だから、何歳？」

……なんだよ急に。

年齢か……記憶によると。

「……29だが？」

「え？そうなの!!全然見えなーい！」

「うっそだあ」

サイヤ人は戦うために若い姿でいる時間が長い。

なるほど、年頃の女性にはそう見えるのか。

自分の容姿について再確認していると、背後から迫りくる者がいた。

足取りは重く、気のせいじゃなければドスン、ドスンと効果音が聞こえそうだ。

「……ねえ」

「ひーぶ……ぶ……ブルマ！」

今までに聞いたことがないくらいの冷めた声。

腹の底から怒りが込み上げ、いつ爆発するかわからないブルマ。

ヤムチャなんて酔いが一気に覚めたのか顔が真っ青になり怯えている。

そんな怯えるなら浮気しなきゃいいのに。

「ヤムチャ、ブルマの介抱してやれ」

「え？……何言ってるんだよラディッツ」

「世話をしてやれという意味だ。お前も酔いが完全に冷めているみたいだしな」

「お、お前がやってやれば」

「こういうのは恋人の役割だろ」

俺に助けを求めようとするヤムチャ。

だが、自業自得だ。

「え？お兄さん今フリーって言ってたのに！」

「嘘なのお」

「……………へえ」

「ちー違うんだブルマ！話せばわかる！」

……………。

ヤムチャ……健闘を祈る。

ブルマはヤムチャの腕を引き、連れ出し始める。

「じゃ、髪の毛長いお兄さんが相手してくれる？」

一瞬何かに睨まれるような……ゾクつとした感覚に襲われ、空気が凍るような感覚に陥る。

「断る、お前達の相手をするのはごめんだ」

「……………何それ」

「感じ悪う」

「いこみんなー！」

気に障ったのかギャル達三人はその場を後にした。

面倒ごととはごめんだ。……人間関係のいざござは特に。

「待ってくれ！ブルマ！話せばわかる……な！」

振り返るとブルマはヤムチャを連れ建物の中に移動する光景が視界にはいる。

その日、ヤムチャはパーティに戻ってくることはなく、パーティは

終了した。

パーティが終わった後、少し酔いは残っていたが、上機嫌であったブルマに髪を切ってもらった。

「ヤムチャと別れたわ」

「……………は？」

髪を切っている最中、サラッと重要なことを言われ、今日一番驚いた。

ちなみに数日間経ったら髪は元の長さに戻っていた。

そういえば純粋なサイヤ人は不思議と生後から髪型が変わらないという発言されていたことを思い出した。

サイヤ人とは……………不思議な生物だな。

ラディッツ、いざ修行へ。

パーティから次の日となった。

俺はカプセルコーポレーションに泊めてもらった。

それはクリリンや孫一家、ラオ達一家も同様であった。

1日羽目を外したので、随分と気晴らしになった。

驚くことがいくつかあったが、さほど問題ではない。ヤムチャとブルマは将来的にわかれる運命だ。それが早まっただけのこと。

「ふう……」

早朝、朝日が差し込み始める時間。

体に染み込んだ習慣というのは取れないらしい。

生前、毎日早朝から修行していたので、自然と目が覚めた。

一応、界王星にいた頃から睡眠時間などはなるべく守るようにしていた。

生活リズムは壊さぬように。

「……今日からまた再開するか」

修行をしなければ。

だが、次の戦いまで時間がある。

それまでに少しでも実力を上げなければ。

「……もう一つやらなければいけないことがあるな」

それは仕事探した。

今までは修行で余裕がなかったが、今は違う。

界王様の元で充分修行ができた。

今は生き返ったのだ。このままプー太郎で過ごすのは前世の社会人としてのプライドが許さない。

「おお、やはり早いなラディッツさん」

「……ラオか」

老人は朝が早いというが、その通りらしい。

以前からラオは健康維持のため、朝早く起きていた。

「ラディッツさん、久々に組手でもせんか？」

「どうしたんだ急に」

「いや何、少し体を動かしたいと思ったのでな」

「いいだろう」

ラオの提案で組手を開始した。

休憩を挟みながらしていたが、ついつい熱中してしまい、気がついたら朝8時前、朝食の時間になっていた。

「腕を上げたな?」

「ええ、まさか現役よりも実力が上がるとは思ってもおらんかったわい。……気の制御のおかげかもしれないな」

そんな会話をしながらもみんなが待っている食事の場所へ向かった。

「クリリン、今日から始めるぞ。覚悟はできているな?」

「あ……ああ」

食後、俺は一人椅子に座りくつろいでいるクリリンに声をかけるも、歯切れの悪い返事をされた。

「……どうした?やめるか?」

「い、いや。そうじゃないんだ」

「思うことがあるなら言え」

慌てて否定するクリリンは何か不安や悩みがあるのか俺と視線を合わせようとしない。

「俺と修行しても無駄じゃないか?」

「……は?」

「いやほら、ラディッツはスーパーサイヤ人に成れるわけだし……俺なんかよりもピッコロとかと修行した方がいいんじゃないかと思っ
てな」

……あ、クリリン遠慮しているとかじゃなくて。

「怖気付いたな?……ナメック星で話した時の決意はどうした?」

「いや……それはあ」

「正直にいえ」

「……ラディッツと悟空がフリーザと戦っているのを見ていたらな……サイヤ人でもない俺じゃどんなに修行したところで一生追いつけない気がして……それほどまでにお前たちサイヤ人との差は開くことはあれど近づくことはできないって思ってた」

クリリンは何かを勘違いしているらしい。

俺がクリリンにさせようとしている修行は強者と戦う術を身につけさせることだ。

「はあ……断言しよう、クリリン、お前がどんなに努力しようが、俺たちサイヤ人には一生かけたとしてもまともにやりあうことは無理だろう」

「……ああ」

「まともなやり方では限界があるからこそ、お前がこれから強者と対等に戦うための術を身につけなければならない」

クリリンにこれから身につけてもらいたいのは合掌拳などの圧倒的強者と戦い抜くための一つの刃。

「……ごめん、言っている意味が」

困惑するクリリンに俺は追加で説明をする。

「カカロットが元気玉を準備している時、俺とフリーザの戦闘を見ていたか？」

「え？……ああ。あのフリーザ相手に圧倒していたな」

「……なるほど、そう見えていたか」

一つ、勘違いを正そう。

「クリリン、少し俺と距離を空けろ」

「え？……ああ」

俺はクリリンに離れるように促す。

「いいか、見ていろ。一瞬だ」

そう言っつて、俺はその場で合掌からの正拳突きをする。

「な?!」

「……今、何をしたか見えたか？」

「い、いや。……わからなかった。……立っている体勢から……音が遅れて……時間が飛んだようにしか」

戸惑うクリリンは自分で見たことを率直に言う。

俺はそのまま説明を続ける。

「そうか。……今見せたことが俺がフリーザに対してしたことだ。合掌する、拳を腰につけ、重心を落とす、正拳突きをする。……ただそれだけだ」

「う……うそだろ？」

「うそじゃないさ。俺はフリーザ相手にこの技一つでやり合った。俺との修行では、この技の基礎を覚え自分だけの技を編み出してもら」

クリリンが今後の戦いで戦士として生き延びるにはこれしか方法が無い。

たった一つでも格上に通用する技があればあとは立ち振る舞い次第で戦える。

天津飯がいい例だろう。

新気功砲。

鶴仙流の気攻砲を進化させ、セル、魔人ブウにも抵抗してみせた。第二形態とはいえ、セル相手に足止めをした。

ゴテンクスを吸収した魔人ブウのエネルギー弾を弾き飛ばす威力に進化させた。

「合掌拳の基礎を身につける過程でお前なりの技を編み出せるかはお前次第、そのための相手をする、格上相手の戦い方も俺で試せるだろう」

「お……俺にできるのかな」

そう問いかけるクリリンであったが、その目にはやってみたいという闘志が見えた。

できるとは断言できない。

「何度も言うがお前次第だ……だが、やってみる価値はあるだろう。……少なくともお前一人で修行するよりは効率がいい。無理だと思つたら途中でやめてもいい。無理強いはしない」

クリリン自身が合掌拳を戦闘で使うことも可能かもしれないが、残念ながら差が開きすぎている相手には通用しない。だから格上と戦うための技が必要だ。

「このまま独力でやったとしても限界は近い。カカロットに並び立ちたい……置いていかれるだけになりたくないなら、俺の相手をすることを薦める」

最後に言いたいことを伝える。

これで断るのならこれ以上は何も言わない。

クリリンは少し考え、答えを出した。

「よろしく頼む」

頭を下げ、そう言ったのだった。

ラゲイツツ、行動開始。

俺はクリリンとともに東の都の近くの荒野に移動し修行を開始した。

修行に出る前、ラオ達一家をチャズケ村に送り、また一週間後に会う約束をした。ただ、驚いたことに飛行機で移動中、ライムは今まで勉強の成果を自慢したいのか、色々と覚えた知識について話してくれた。

血の流れは心臓から肺に行き、心臓に戻ってくる肺循環と、心臓から全身に回り、心臓に戻ってくる体循環の二つあると、真剣に語っていた。

医者になりたいから必要な分野の勉強しているのだろう。

とりあえず相槌をして知識披露が終わるタイミングで頭を撫でて褒めたら喜んでいた。

これ、本当に将来医者になりそうだ。

パーティーでも、話があったのかライムは悟飯の話をよく聞いていて、今度一緒に勉強しようかと約束していたな。

子供同士仲良くなって良かったのだが、悟飯の将来の嫁を考えると少し不安である。

まあ、色々俺が関わったことにより大きな変化が生まれてしまっている。……なるべく物語に添いたい俺からすると良くない展開なのだが……もうどうすることもできない。

ライムと悟飯の仲を壊すわけにはいかなく、ヤムチャとブルマの寄りに戻すように動くこともできず……もうなるようになれ。

もうすでに手遅れだ。いつそのこと開き直ってしまうのも一っだ。今はできることをしよう。修行だ修行！

さて、クリリンと修行を開始したわけだが別に朝から晩までやるわけではない。

時間、修行内容を決め、ひたすら繰り返し返す。

午前中には終わり、それからは自由時間をすごす。

早朝から修行を始める。

実戦に近い形で組手をひたすら繰り返す。俺はクリリンの全力に気を合わせて互角で行い、次に全力の俺に対してクリリンはひたすら避ける、捌くを繰り返さず。格上相手に戦うための地力を底上げする。

適度な休憩を挟み行う。

クリリンは疲労や俺の攻撃により気絶してしまったが、それでも無理やり起こして再開させる。

この訓練は強い精神力を身につけさせるのも目的もある。

「今日はここまでだな」

「……………これを……………はあ……………はあ。毎日続けるのか？」

息が絶え絶えで仰向けになっているクリリン、かなりキツそうだが、毎日こんな修行はする気はない。

「今日のは3日に一回だ。明日は別のことをする。明後日は休み……………

これをひたすら繰り返す」

「……………そうか。……………たすかったあ」

クリリンは安心したように深呼吸した。

俺も鬼じゃない、苦しいだけなのは修行じゃない。

明日は感謝の正拳突きを教えるつもりだ。

「修行は午前のみ午後は休みだ。好きに過ごせ」

「ああ……………すまないが、運んでくれないか？……………もう指一本動かさないんだ」

「そうか、頑張って戻るんだな」

「え……………」

……………冗談のつもりなのになんでこの世の終わりみたいな表情してんだか。

「冗談だ」

「あ……………はは。やめてくれよタチ悪いなあ」

「まあいい。部屋に連れて行くまでだ」

「すまん」

俺は倒れるクリリンを担ぐとホイホイカプセルを取り出す。

これはブルマが用意してくれた持ち運び用の家……らしい。
修行に行く前、ブルマの厚意で用意してくれたものだ。
まだ俺には先立つものがないので、ありがたく貸してもらった。

クリリンを運び家に入ると、風呂にぶち込み着替えをさせる。

家は3LDKの部屋なのだが、その一室が広い。

5、6人が一度に入れるくらいの風呂場もある。ブルマはただの一般的な家と言っていたが、やはり感覚が狂っているようだ。

そんなことを思いつつ、クリリンをソファに座らせ冷蔵庫に入っていた飲み物を手渡し、少し話をする。

「あはは、すまないな」

「しつかりと休むんだな」

「あ…ああ。それにしてもブルマさん気前いいよなあ。こんな家用意してくれるなんてな」

「それには同意だ。最初はカプセルコーポレーションに泊めてくれようとしていたがな」

「そっちの方が良かったんじゃないか？お手伝いさんとかいるだろうし」

「いや、それはできない」

「なんでだ？」

ソファに座りながら話す。まあ、当たり前の疑問だよな。せつかく樂ができるのにそれを無視するんだ。

「ヒモになるのは嫌なんだ」

「……へ？」

クリリンは素っ頓狂な声を上げるが、気にせず説明を続ける。

「カカロットは金を一銭も稼がず、修行だけして生きていたらしい」
「確かにそうだなあ。……お金を稼いだといっても武天老師様のとこ
ろで修行したのと……あ、天下一武道会で優勝したときの賞金くらい
だな。……あ、俺も仕事してねえわ」

……現在ドラゴンボール戦士無職で大丈夫かよ。いや、ヤムチャ
は助っ人でプロ野球選手やってるから無職じゃないか。

「……これから暮らすために金を稼ぐ手段を持つておきたい。……修
行は合間でもできるしな」

「ラディッツと悟空つて本当に似てないよな、性格とか特に。……そ
れにしても仕事かあ……俺も探そうかな」

「お前は今は修行のことを考えろ。しばらくはきついペースで修行を
するからな。働きながらできるのか？」

「……無理そうだな。……そう言うラディッツはどうなんだ？仕事す
るとかいつているが目処は立ってるのか？」

「ああ。問題ない。修行の合間で動く予定だからな」
「そうか」

「すまない、時間だ。俺は行く」
ちようど時計も午後2時になっていた。少し余裕を持って出かけ
る。

「どこ行くんだ？」

そういえばまだクリリンにいつていなかったっけな。別に隠して
いることじゃないし、いつておくか。

「教習所だ」
「……………は？」

この時のクリリンは目が点になっていた。
俺がとるのは大型車の運転免許証。

現代日本において、ほとんどの国民が持っていた自動車免許。この
ドラゴンボール世界でも免許が存在しており、その資格さえ有れば運
送の仕事にすることができると驚くことに、ドラゴンボール世界の教習は運転歴とか関係なく飛行

機も含めて免許を教習所を卒業できればもらえるらしい。

持っていれば身分証明証にもなるし、今後のことを考えれば持つていて損はない。

ブルマに身元保証人になつてもらい教習のお金も出してもらった。マジで頭が上がらない。

俺は未だに目が点になっているクリリンを放つておいて教習所に向かうのだった。

「ラディッツさん、そうそう上手ですねえ。もしかしてお車の運転経験御ありなのですか？普通初めて運転すると距離がわからなくなつてしまうものですが」

「いや、初めてだ」

前世で普通車運転してましたなんて言つても信じないだろうな。教習所到着後、手続きを済ませた。

大型車の免許をとるには段階を踏まなければいけないらしく、普通車から始まり、徐々に車体の大きさを上げて行くらしい。

ま、前世の経験から運転は楽勝だ。クラッチ操作が一切ないしな。

その日は教習内容を終わらせて帰宅した。

帰ったらクリリンが爆睡していたので、起こさずに夕食を用意し、起きて来たクリリンと談笑しながら食べた。

ラドイツ、内定。

クリリンと修行を始め早半年が経過した。

修行を開始してからは自立できている。

食料も水も自給自足、電気は太陽光発電により料金かからず。

この生活が成り立っているのはブルマのおかげだ。

時折顔を出すように連絡が来る、あまり行く気はなかったのだが、教習所の金とか身元保証人とかの件の話を出され、どうしても断れなく不定期だが、お邪魔している。

一番初めはクリリンを伴い行ったのだが、その次以降は行っているのは俺だけだ。

理由を聞いても行きたくないとの一点張り。

「どうしたクリリン……ブルマに何か言われたか？……なんなら一度俺から話を」

「それだけは頼むからやめてくれ！一生の頼みだ！」

そんなことで一生の願いを使ってもいいものかと思ったが、必死なクリリンを見ていると悪いと思ったので、これ以上の追求をやめた。

そんなクリリンだが、俺との修行で目を見張る成長をした。

もともと肉体的には限界を迎えていたものの、戦闘技術は向上した。

合掌拳の訓練は順調とはいかないものの、形にはなっている。弱音を吐くかと思っていたが、文句一つ言わずに黙々と続けている。

最近では手応えを感じているのか、クリリンは午前の修行が終わった後自主的に修行を始めている。

向上心があつて何よりだ。

俺自身も成長できているので、やはりクリリンとの修行は間違っていないかった。

「……何か地球に来たな」

「悟空じゃないか！」

「……いや」

クリリンと修行中、何か大きい気が地球に現れた。

クリリンは悟空かというもの、来るのはフリーザが来るタイミングと同じはず。それに感じる気の大きさも失礼だが、ナメツク星の悟空の気より小さい。

そういえばベジータの乗っている宇宙船の燃料が切れるころだとブリーフ博士も言っていたし。

「ベジータだな。ブリーフ博士も宇宙船の燃料がなくなると言っていた」

「あ、そうか。なんだ、少し期待しちゃったなあ」

「そう焦るな。満足したら戻ると言っていたではないか」

「あ、そういえばお前死んでる時悟空と話したんだっけな。元気にやってんかなあ。それにしてもどんなに強くなつて戻ってくるやら」
クリリンは空に微笑みながら話す。

悟空はもう少しで帰ってくる……はずだ。いつくるか断言できないが、近いうちに地球に帰るはず。

ベジータといえば生き返ってから一度も会っていないが、会いに来たりするのだろうか？

これからベジータはカプセルコーポレーションで過ごすことになる。

ま、来たところで今更戦うことはないだろう。スーパーサイヤ人を見せるように言われるかもしれないが。

「とりあえず問題はないな。ここにベジータが来るかもしれないだけ言っておこう」

「ええ……」

「露骨に嫌そうな顔をするな。おそらく危害を加えることはないだろうし、するようなら俺が全力で止めるさ」

クリリンが嫌な顔をしたのでとりあえず補足の意味も込めて一言伝えておく。

ベジータは宇宙の修行で実力が向上している。

今思えばベジータは強くなるためなら24時間修行を続けられる

ようなやつだ。

俺が地球でのんびり修行している時も倍以上はやっていただろう。もう少し休むことも大切なのだがなあ。

伝えたところで今のベジータが聞く耳持つわけもなく、逆ギレするのがオチだ。

とりあえず、今は気にしてもしょうがないので、ベジータの対処は来たときに考えようと思う。

「じゃ、俺はこれから出かけてくる。お前は どうする?」

「俺は休憩が終わったらもう少し修行をするさ。……もうすぐ新技のヒントが掴めそうだからな」

「そうか。なら、頑張れ」

そう言つて俺は家を出てあるところに向かう。

向かう先は教習所ではない。

これから俺がするのは……就職活動だ。

免許は早い段階で取ることができた。

だが、仕事をするにも、修行を第一に考えるとなかなか条件が絞られてくる。

最も俺に適した仕事といえば戦うことだろうな。ボディーガードとか良さそうと思ったが、守る対象とずっと一緒にいなきやいけない。

武道家の道もいいかもと思ったが、腕一つで食っていけるかと言われると無理だ。調べたが、武道家の収入は大会賞金だけの収入。

安定的に収入を得られるわけじゃない。

可能なら最低限の労働時間で暮らせるだけの収入を得ること。

かつ、これから攻めてくる敵に街を壊されることのない都で仕事を見つける。

南と東の都はだめだ。

いつかは壊される。

……そう考えて消去法で選んだのは中の都と西の都で見つけること。

そして、選んだ職種は。

「それで、大丈夫なのですか？職歴もない……それに学歴も。何より武道大会の実績もないです。あなた今まで何やっていたのでですか？」

「武道家として山に籠り修行をしていた」

「……求人を見ましたか？実績のない人物を採用するわけにもいかないですよ。危険が伴いますし、何より失敗したらこちらは大誤算です。……あなた一人の責任では償いきれないですよ」

面談に向かった先は中の都だ。

スーツ不要と書かれていたのでラフな格好で来た。

相手は男性が二名。

職種内容は現金輸送。

賃金も高いし、輸送が行われるのは人気のない早朝だけ。銀行間を行き来して、金を届けるだけなので、結構単純な仕事だ。

ただ、輸送には車を使うので狙われやすい。

ホイホイカプセルを使った方が良いかと思っただが、それは過去にミスを犯した奴がいるらしい。

気がついたら大金が入ったカプセルを落とした奴がいるとか、そのカプセルをスラれてしまうとと言う失態をした奴がいるとか。

ちなみにこの事例は俺が今面接を受けている会社ではない。

輸送には車を使い、かつ襲われても対処ができる人材を探していたらしい。

街によっては軍に依頼をするところもあるが、基本は民間警備会社の委託業務だ。

中の都はそこまで治安は悪くない。前任の人が辞めてしまうので、その引き継ぎをできる人を探しているらしい。

だが、賃金がいいが、命の危険がある。怪我をしたら働けなくなる。割に合わない仕事なので、求人に応募は俺一人らしい。

こういう反応されるのはわかっていたが、ここまで露骨な態度を取られるとは。ま、気持ちはわからなくはないが。

俺は今日持参したカバンの中から映像が入ったディスクを取り出す。

事前にラオに頼んで焼き増してもらったサイヤ人戦の映像だ。

「実績については問題ないと思うが？以前、テレビで宇宙人が地球に襲来した事件は知っているな」

「え？…話には聞いていますが。それが何か？」

「なら、話が早い。俺はその宇宙人を追っ払った人物の一人だ」

「はあ…そんなこと信用するとも？」

「調べればわかるさ。映像も残っているんじゃないか？…今日はその録画映像を持参した。確かめて欲しい。動画に俺が写っているし、戦闘の映像も。それをみてもまだ疑うようなら実技試験でもしたらどうだ？…俺を雇って後悔はさせん。依頼達成率100%を保証してやろう」

「あなたのその態度もさつきからなんなんですか？動画の加工ってご存知ですか？…」

「待ちなさい」

ふと、俺の話に対して文句を言ってくる若い男性に隣から話を遮るように話しかけてくる40代の男性。

「まあ、こつちも事情が事情だ。確認するだけでもいいではないか。もしも彼が言っていることが本当なら即戦力だろう？」

「それはそうですが。…わかりました。…ラディッツさん、少し待っていてください」

「ああ」

そう言われ俺は一人部屋に残された。

そして、それから10分ほど時間が経ち、戻ってきて、少し実技試験をされると言われた。

内容は動画の内容をその場で再現するように言われた。高速移動、空へエネルギー弾を放った。

「ラディッツ様、先程までの態度は失礼しました。これからよろしく願います！」

そして、先程までとは比べ物にならないくらいの丁寧な態度で接しられ、無事に内定がもらえた。

仕事内容の説明をされると、基本は早朝、週に数回現金を銀行間や

企業へ輸送する。

時間も2時間も掛からず業務は終了する。

車の乗車には書類をやり取りする人物が同行するようで、俺はただ運転と現金の護衛だけ。

ここまでの高待遇に驚くも、その日は契約を済ませ、仕事のやり取りをするための携帯電話を支給された。

そこまで信用しても良いかと思っただが、免許証があるから、登録されている住所はカプセルコーポレーションの場所、身元保証人もこの家の人になっていたので問題ないそうさ。

こうして、俺は修行をするのにもってこいの高待遇で就職先を見つけてることができたのだった。

「良かったなラディッツ！おめでとうー！」

帰ってからクリリンに報告すると、お祝いを言ってくれる。

「その仕事……俺にもできそうだなあ……なあ、俺もその仕事紹介してくれないか？」

なんとなく、これから働く俺を羨ましがっているのか？

「いや、無理だな……その会社は俺一人で十分らしいからな」

「マジかあ」

「別に焦って仕事を探す必要はないと思うが？」

「でも、ラディッツ働き始めるのに俺だけ何もしないのもなあ……なんか気が引ける」

どう言っただけなのか。多分クリリンは本気で言っただけじゃない。

なんとなくで俺に聞いているのだろうか。

「一区切りがいたらでいいんじゃないか？」

「一区切りって言っても……どこで区切りをつければいいかわからない」

区切りか……いやでも仕事をしなきゃいけないと考えるなら。

「結婚したらでいいんじゃないか？」

「……………へ？」

「結婚したら家族を養わなきゃならんしな」

「結婚かあ……できるかなあ？」

美女の相手が現れるよ。

残念ながら本人には伝えられないな。

「カカロットとチチは戦いの中でお互い出会ったと聞いている。なら、お前も強くなればそのうち会える」

「なんだよそれ……無責任だなあ。……でも、確かに悟空も強いからチチさんに会えたわけだし……もう少し頑張ってみるか」

クリリンは決意を改めたのだった。

「パパ……あれが地球だよ」

ラディッツが無事に就職し数ヶ月経過し、地球に脅威が迫る。

それはナメック星で死んだと思われていたフリーザとその父コルドであった。

フリーザは悟空とラディッツ兄弟に敗北後、コルドにより救出され生きながらえた。

改造手術を施されたフリーザは怒りが煮え繰り返していた。

「ただじゃ殺さないよ。……この僕をコケにしたこと……後悔させてあげるよ」

ラディッツ、静観される。

内定から早数ヶ月が経過した。

早朝に仕事が終わり次第クリリンと修行、午後からは個人の修行をする生活を続けた。

充実した毎日を送る中、突然事件は起こった。

「な……お……おいラディッツ……この馬鹿でかい気は」

「……フリーザの気だな……もう一つは知らん」

「何呑気にしてるんだ！フリーザだぞ！もう一つはそれ以上の気を感じる……ああ……終わりだ」

確かに気を感じることができ。だが、残念ながら今の俺にとっては敵になり得ない。

それに物語なら未来からトランクスが来るはずだ。

「そんなに慌てることないだろうに。俺がいるんだぞ？……対処は大丈夫だ」

「……二人同時に相手できるのか？」

ああ、クリリンが心配していたのはそのことか。

そういえばクリリン相手にスーパーサイヤ人の状態に慣れるため組手をしていたが、全力を出したことがなかったな。手加減して相手をするとは言った。

手加減ミスってうっかり殺さないように二割くらいを意識していた。

「安心しろ。お前も俺の強化は身に染みてわかるだろう？……それに
お前相手に二割しか出してない」

「ば……バケモンかよ。あんなに死にかけたのにまだ上があるって」

「死にかけてたって大袈裟だ。精々骨にヒビが入るか骨折したくらいだ。その程度で大袈裟すぎだ」

ブルマがナメック星から持ち帰ったメディカルポッドの液体、まだ研究の段階で、ブルマから試作品を大量にもらった。治癒能力を飛躍的に上げるその液体は骨折やヒビ程度なら数時間漬ければ完治してしまう。そのおかげで俺が手加減の微調整を気にしないで修行

できた。

「お前を基準にするな！」

「……………すまん」

なんか怒られたので一応謝罪をした。だが、今のやりとりのおかげで緊張がなくなつたようだ。

「よかつたじゃないか。緊張……………解けたようだな」

「あ……………確かに。……………だが、どうするんだ？一回みんなと合流した方がいいんじゃないか？みんなの気が移動し始めてるし」

わかる範囲でだが、ベジータを含め複数の気が一つに集まってる。

「いや、俺とお前は直でフリーザの元へ向かうぞ」

「……………は？ラディッツはわかるがなんで俺まで？」

「なぜだど？修行の成果を試しに行くだけだ」

「……………まさかと思うが……………フリーザと戦えってわけじゃないよな？」

「ふ……………」

察しが良くてなによりだ。

だが、俺はそんなに鬼じゃない。トランク스가フリーザたちを片付けるなら問題なし。

もしもフリーザ戦に間に合うようなら少し実戦でクリリンの成果を試そうと思つたのだ。

「雑魚処理と少しフリーザと対峙してもらうくらいだ」

「……………俺、一回生き返ってるから地球のドラゴンボールじゃ生き返れないんだけど」

「大丈夫だ。本当に初撃だけだ。無理なら俺が守つてやる。大船に乗つたつもりでやれ」

「……………ええ」

こいつ何言つてんだみたいな顔はしないで欲しい。

せっかくなつきつい修行で自信をつけた。実戦で試してさらに自信をつけさせたいと思つた。

「……………近づいてきたな……………これで降りてきそうな場所の予想がつく。よし、急ぐぞクリリン」

「……………」

フリーザの宇宙船が着陸しそうな場所がわかったので、向かおうとするも……何故かクリリンから返事がない。

振り返りクリリンを見ると呆れていた。

「どうした」

「いや……無茶苦茶なところはお前も悟空と似ているんだなって思っただけだ」

「はあ……なにを言っているんだか……モタモタしているとフリーザたちが到着してしまう、さっさと行くぞ」

「あ、ああ」

時間もないので急いでクリリンと共に向かった。

「……フリーザたちが現れたか。もうすぐラディッツさんがくるはず」

フリーザの乗ってきた宇宙船が着陸し、多くのフリーザ軍兵士と、フリーザ、フリーザの父コルドが地球に現れた。

だが、剣を背負った青髪の青年は何もすることなく気配を断ち、岩陰に隠れていた。

「悟飯さんはフリーザたちが到着するタイミングで現れたって言うんだけど……いや、今二つの気が近づいている」

青髪の青年は近づくと気を感じ取り、さらに気配を殺すことに専念する。

「あの長髪……あの人がラディッツさん。すると近くにいる人がクリリンさんか」

現れた二人、白いTシャツに黒いジーンズを履いている長髪の人

物、オレンジ色の胴着を着ているスキンヘッドの人物を見て青髪の青年は目的の人物がきたことに安心する。

「さて……見させてもらいますよラディッツさん。あなたの実力を」

青髪の青年は期待に胸を膨らませ陰から今から起こる戦闘を見始めた。

ラディッツ、成長を喜ぶ

「な……なんだよ、この数……」

「ビビることはない。あくまで強いのはフリーザともう一人の奴だけだ」

フリーザたちが地球に現れた。

クリリンを連れてきたが、ついた時にはフリーザ軍が地球に攻め込む寸前であった。

「おやおや……まさかそちらから死にくるなんて……やはり愚かな猿だね」

「その猿に殺されかけた奴はどこのだいつだ？」

「このー」

俺の存在に気がついたフリーザは馬鹿にしてきたので挑発をしておく。

……それにしても体が機械になっている。失ったはずの手足は機械となり、失った体の一部は機械が埋め込まれている。

トランクスは現れたのだろうか？

気を感じない。

「パパ……こいつは僕がじっくり苦しめて殺すから……手を出さないでね」

「好きにするがいい。今度は油断をするなよ」

「わかってるよパパ。……ほら！他のものは地球人の始末に行くんだ」

フリーザの指示でフリーザ軍の兵士は動き始める。

「まてー！」

だが、俺は待ったをかける。このまま行かせる気はない。

「どうしたんだい？急に大声をだして……命乞いでもしたいのかな？」

「ふ……クリリン、事前に言っていた通り、雑魚処理と宇宙船を破壊しろ」

「……わかった」

クリリンに手短かに指示する。

「今さら何を話しているんだい？……今度はそのチビと二人で戦うつもりかい？……別に構わないよ」

「違うさ」

フリーザは何か勘違いをしたようだが、そんなことはない。

フリーザの相手は俺一人でやる。

クリリンがフリーザと対峙したら簡単に死んでしまう。

「はあ……くらええー！」

クリリンは気をため、フリーザに向けエネルギー砲を放つ。だが、直撃することなく上空へ操作する。

その後、上空で拡散させ、フリーザ軍兵士を殲滅、宇宙船に穴を開け破壊する。

クリリンが放ったのはサイヤ人編で使っていた拡散エネルギー弾だ。

なにが違うかといえば、発射から着弾までの速度にある。

もともと遅いと指摘され続けた技だが、俺との修行でそれを改善した。

「……貴様」

フリーザはクリリンの行動に怒る。その怒りの対象は俺ではなく……クリリン。

「お……おいラディッツ……大丈夫なんだよな」

あまりの迫力にビビるクリリン。

まあ、そりゃ怒るわなあ。部下が殺されたことじゃなくて、宇宙船を壊されたことに。

「猿の前に貴様から殺してやる」

フリーザは人差し指をクリリンに向け、デスビームを放つ。

放たれた光線はそのまま一直線にクリリンに向かう……だが、その光線は。

「うわーびつくりした！」

「……なに？」

クリリンは紙一重で避け、フリーザは避けられたことに動揺した。

本当にこいつは変わっていない。想定外のことが起こると動揺する。少しは成長したかと思っただが、絶対の自信を持ち、プライドの高いやつは改善しないんだな。

それにしても、クリリンはフリーザのデスビームに反応できた。物語ではナメック星にいた時は視認すらできなかったはずだ。

クリリンも驚いているのか自分の体とフリーザを交互に見ている。「よかったじゃないか、クリリン。フリーザの一撃を躲した。今の攻撃はナメック星の時と同じ速さだったぞ」

「お…俺がフリーザの…マジかよ。全く見えなかったのに」
「成果を試すには十分だろう。下がっていい。後は俺がやる」

「ああ。……頑張れよ」

クリリンは俺に一声かけて退散しようとする。

「逃すわけないだろう？」

だが、フリーザはそんなクリリンに向けて再び複数のデスビームを放ってくる。だが、俺はクリリンに向かうデスビームを全て弾き飛ばす。このままだとクリリンへの怒りが残りそうなので、煽って俺に注意を向けるか。

「宇宙の帝王も地に堕ちたな……俺らに負けた後、なにもせずに地球まで来るとは……がっかりだ」

「……調子に乗るなよ猿風情が……殺してやる」

「フリーザ、そう怒るな」

「……やっぱりこいつはすぐに殺すよパパ」

怒るフリーザであったが、コルドの一声で落ち着きを取り戻す。

クリリンは十分離れた。もういいだろう。

フリーザが現れたがいまだにトランクスは現れない。……まさかと思っていたが最悪の事態だ。

俺が現れたことにより、未来が変わった。

未来トランクスが現れない世界になってしまったかもしれない。

……このままだと悟空が心臓病で死んでしまう。

……いや、今はその考えはよそう。とりあえずこいつらを仕留めよう。

「フリーザ……いいものを見せてやろう……はああああ」

「一体なに……を」

大地が揺れ、雲がゆっくりと動く。フリーザは俺の姿が変わっていくことに驚いたのか言葉が詰まる。

「なんだいそれは？」

「……スーパーサイヤ人だ。お前のよく知っている、な」

「……なに？」

フリーザからは余裕のあつた表情が消え、動揺の色が見え始める。本来なら少しサイヤ人の状態でフリーザの全力と戦いたいところだが、それをして地球が壊されたらシャレにならない。

今回は全力で行かせてもらう。だが、もしも地上にいられてナメツク星のようなことになったらごめんなので、まずは上空に行かせる。ちようどフリーザとコルドは近くにいるので二人同時に仕留めよう。

俺は二人に接近をする。

「でいあー！」

「ぐー！」

「なー！」

コルド、フリーザは一瞬のことに驚く。そのまま接近し、大柄のコルドを顎に拳打を、次に回し蹴りでフリーザを上空に飛ばす。

俺は両手に気を集め、フリーザとコルドに赤いエネルギー砲を放つ。

「ウィークエンドー！」

両手から放たれた赤いエネルギー砲はフリーザとコルドに直撃し、消滅した。

「地球の危機は去ったか……だが」

これでこの世界線はトランク스가来ない世界……悟空が死に人造人間により戦士が殺される未来ということだ。

俺がもたらした影響のせいかな、元から未来トランク스가来ない世界だったか。

「これから……精進せねば」

人造人間に絶対に殺させない。

最悪な未来は俺が潰してみせる。

「誰だ！」

だが、急に背後から気を感じる。最悪の事態に気が立っていたからつい怒鳴りながら後ろを向く。

「驚かせてすいません。……あなたに危害を加える気はありません」

「……ほう」

声をかけてきた青年は背負っていた剣を地面に置いて両手を上げる。俺はその人物を見て先ほどの不安が少しだけ消えたのだった。

ラディッツ、安心する。

青髪の青年が現れる。ジーパンジャケットに肩に背負っている剣……何より青髪。

だが、せめて名乗ってもらうまでは確信は持てない。せめて名を聞こうか。

「お前……何者だ？」

「……すみません。今は訳あつて名乗ることができません……敵では……な！し、信じてください」

俺は掌を向け気を込める。目の前の青年は慌てて弁解をしようとする。

「名も名乗れぬやつを信用しろと？……笑わせるな。先ほどフリーザ一味がいたんだ……お前も仲間かもしれないだろ？」

「決して違います！僕は孫悟空さん……そして、ラディッツさんにお伝えしたいことがあつてきたんです」

「……なに？」

慌てて用件を言ってきた、気になることを言われたのでとりあえず掌を下ろす。

悟空の名前だけじゃなく俺の名まで出してきた。

……こいつは悟空に薬と未来を教えにきたんじゃないのか？何故俺まで？

「何故俺と弟の名を……」

「……それについては後ほど説明しますので……その……」

「もういい。敵意がないのはわかった」

「ありがとうございます」

安心したようで青年は肩の力を抜いた。

そういえば物語だとフリーザを倒したのは多分この青年のはずだが。

なんでこいつじゃなく俺が倒す流れになったのだろう？

「そういえば先ほどカカロツ……孫悟空の名前を出していたが、残念ながら今は不在だ。話すのは日を跨ぐ可能性がある」

「いえ、今日中にお話しします。悟空さんは今日、地球に帰ってきますから」

「ほう……何故わかる?」

「それは……」

これを質問するのは妥当だろう。

だが、その質問に答える前に、クリリンたちが到着した。

「ラディッツ、無事フリーザを倒したんだな……それでえつと……お前の隣にいるのは誰だ?」

到着するが、俺と謎の青年がいたので戸惑う一同、代表してクリリンが質問してきたが……なんというべきか。

「俺も知らん……何もいえないの一点張り……少なくとも敵ではないらしい。もしも何かしようものなら俺がこいつを殺すから安心しろ」
とりあえずみんなを安心させる。

だが、俺の一言で青年は引き攣った笑みをしていた。

それから青年から孫悟空が帰ってくるという場所と時間を伝えられ移動した。

移動後は青年がホイホイカプセルからジュースを取り出したので、受け取り、飲みながら話すことに。

「それにしても、何故時間と場所がわかる?」

「……すいません」

「言えない……か」

「……はい」

ジュースをもらい、青年に話しかけても何も言わない。

おそらく未来が大きく変わること恐れているのだろうか?

クリリンたちと合流してからというものの、緊張してか固くなってい

る。

これ以上は追求しても無駄だろうな。

「……」

それにしても先ほどからベジータは何も言わずに俺を睨んでくる。視線には気がついていているものの、目を合わせづらい。

何を話せばいいのかわからない。

敵意を向けられているのは確かだ。

「ねえ、その服のマークうちの会社のよね？なんで？うちの社員なの？」

雰囲気を感じ取ったのか、ブルマが青髪の青年に話しかける。

「そ、そういう訳ではないのですが」

「ええ、それも秘密なの？名前も歳も？」

「……名前は言えませんが……歳は17です」

物語と年齢は同じか。

だが、こいつはなにも答えようとしな。質問攻めされるのも可哀想なので助け舟を出す。

「これ以上質問しても無駄だろ？どうせ質問したって返答は同じだ」

「それもそうね。孫くんが戻ってくるまで大人しく待ちましようか」

とりあえず気になることはあったが、どうせ話したところで変わらない。気になることも悟空が来なければ話さないだろうし。

何より、物語では青年は悟空だけに会う予定できたはず。フリーザとの戦闘は俺がやった。

クリリンたちみんなが来ることがわかっているのにわざわざ現れみんなと会った。

……だめだ。不可解な情報が多すぎる。

少し整理がしたい。

「3時間後にカカロットが地球にくると言っているんだ。無害……とは言えないが、大丈夫そうだ。少し待機してみるか」

この場で一番強いのは俺だ。もしもこの謎の少年が何かしようなら対処可能だとみんな理解しているから納得している。

青年は俺に礼のつもりか小さく黙礼したのだった。

「それにしてもクリリン、腕を上げたな？確かラディッツと修行して
いたんだったか？」

「え？わ…わかるか？あはははは」

全員が少し離れた位置に移動した後、天津飯はクリリンの成長を賞
賛し、クリリンは自分の成長を褒めてもらい嬉しがる。

ドラゴンボールで復活後、界王星でラディッツと修行をした天津飯
はその後も研鑽を重ねた。

復活前、ラディッツに頼み実力差を見せてもらい、それを励みに修
行をしていた。

だが、天津飯は額の目でクリリンを見た時、練り上げられた気の質
が大幅に変わっていたことに気がつく。

天津飯はさらなる修行を積んだはずであった……それにもかかわ
らず。

「一体どんな修行をしたんだ？参考までに教えてもらいたいものだ」

「うーん……なんて言えばいいんだろうな。強いていうなら組手と
……あとはそうだなあ……ラディッツに合掌拳を教えてもらったく
らいだな」

「合掌拳か……それで習得できたのか？」

「いや……まだ時間がかかるな。……でも、気を最大に高める速さは
飛躍的にあがったな」

「……そうか」

天津飯は内心焦りのようなものを感じる。いや、明確には武道家としてのプライドというべきか……天津飯は己の限界に直面していた。戦うための新技の修行を始めるものの、組手の技術向上は僅か。

復活後の天津飯はクリリンとそこまで実力が離れていなかった。むしろ天津飯の方が上であった。

だが、今では明らかにクリリンの方が上だ。

どうするものかと悩む天津飯であったが、その後悟飯やヤムチャが話に入り、同じようにクリリンを褒め、クリリンが照れるというのを繰り返す。

天津飯はその会話に入ってはいるものの、時折、一人離れた位置で考え事をしているラディッツに視線を向けていた。

ラドイツツ、未来を語られる。

待つこと3時間……青髪の青年が持っていた時計のアラームが鳴った。

「3時間経ちました。もうすぐ悟空さんがきます」

青髪の青年の言葉で皆騒ぎ出す。

仲間との再会を喜ぶ者、懐かしむもの、闘争心を燃やす者……それが悟空との再会を今か今かと待ち望む。

そして、空から悟空の気を感じてさらに喜ぶ。

空から球体型の宇宙船が現れ地上に落下しクレーターを作る。

「あれ？…なんでいんだ？」

球体型の宇宙船から出ていた悟空が驚いていた。

宇宙船から出てきた悟空との再会に一同喜び、話の話題はー。

「それにしてもにいちやん、腕あげたなあ。宇宙船からも感じたぞ」

「そうか。お前も元気そうで何よりだ」

ーフリーザについてだ。

陽気な雰囲気の話しかける悟空は俺の成長を自分のことのように喜ぶ。

「オラも相当修行したんだけどなあ」

「サイヤ人の成長限界はまだまだ先だ。これから修行すればいいだろう」

「そうだな」

悟空公認ということは現時点では地球最強だろうな。

だが、これから数年後にはどうなっているかわからない。

精進は続けよう。一番にこだわってはいない。地球を守ればそれでいい。

だが、今はそんなことよりも、もつと気になることは。

俺は視線を青年に送り話を進める。

「すまんが、今は余韻に浸っている場合じゃない。……こいつが俺とカカロットに話があるそうだ。……一応聞くが面識は？」

「いや、初めて会うぞ」

「……そうか」

一応確認を入れておく。一応、俺は知っている。だが、念には念を入れる。確認を入れるのは自然な流れだと思うし。

「少し離れた場所に移動しよう。お前もそれでいいか？」

「ええ……お気づかいありがとうございます」

俺は青髪の青年と悟空を連れて遠くへ移動した。

青髪の青年……トランクスは俺と悟空に正体を明かし、スーパーサイヤ人に変身するよう頼まれる。

願い通りスーパーサイヤ人になり、トランクスと少しだけ剣と拳を交えた。

それで何か確信を持ったようで大切な話があると伝えられる。

「今からお話することは……この先の未来についてです」

トランクスはそう話を切り出した。

トランクスから聞いた未来の話……それは俺が危惧していた未来
トランクスが現れなかった世界線についてであった。

ドラゴンボールでは悟空の病気は治すことができず。未来を知っ
ていた俺はその願いが叶えられないとわかるとDr.ゲロの研究所
の場所を教えてもらい研究所を破壊した。

だが、残念ながら寸前で17号と18号を起動されてしまい、戦う
ことになったものの、死人が出ることなく撃破した。

本来の未来の世界なら17号、18号にZ戦士達は殺され、戦士は
トランクスだけになってしまふ。だが、俺というイレギュラーが存在
する故本来の物語の未来は大きく変わった。

「謎の生物？」

「ええ……黒の肌色に白髪、尻尾が複数……声は女のように高いそう
です。……そいつが現れたことによりせつかく手に入れた平和は
……終わりを告げました」

セルが現れたのか？……そう思うも、特徴を聞く限り全く別の生物
だ。

その生物によりせつかく手に入れた平和も終わりを告げた。

そいつはベジータを含めたたくさんの戦士を吸収し始めたそうだ。

気配を断ち、こちらが一人でいるところに奇襲で狙った。

最初はベジータ、次にピッコロを吸収した。

始めは気が付かなかった。二人の気が消えたことで違和感を感じ
た。

だが、気がついた時には既に遅し、ラディッツ、悟飯、トランクス
を除き皆吸収されてしまったあと。

当時の未来の俺は悟飯と共に行動をすることが多かつたらしく、幸
いしてか狙われることがなかったようだ。

未来の俺は謎の生物を倒すため行動を始める。

だが、気配を感じることができないので探すのに苦労した。

謎の生物が現れてから数年、悟飯とトランクスは2人は未来の俺と
別行動をして罫を張った。

その作戦は成功。悟飯とトランクスを襲い、悟飯は瀕死寸前

になるも未来の俺が寸前で助け出し、対峙した。だが、戦士達を吸収した生物は強大であった。そこで決死の覚悟で未来の俺は……その生物諸共に自爆をして倒したそうだ。

それでやつと再び平和を取り戻したそうだ。

「……話は以上になります」

「……」

トランクスの話を終え……俺も悟空も黙ってしまう。

……俺がいたから助かった命もある……それでも俺がいたからこそ現れた謎の敵。

「……僕はそんな未来を変えるために来ました……ラディッツさんはいつも言っていました。悟空さんが生きていればと」

トランクスは悲しそうに言っていた。

確かにそうかもしれない。

悟空が生きていれば変わっていたのは確かだ。

「オラはそんな強いやつと戦う前に……死んじまうのか」

「……さすがですね。やはり悟飯さんの言っていた通りです。勇敢で、どんな強敵にも折れることなく立ち向かおうとする。……安心してください。実は未来には悟空さんの病気の特効薬があるんです。これを飲めば大丈夫です」

「ほんとか！やったああ」

トランクスは胸ポケットから三つほど小さな瓶を取り出した。

「……これ全部飲まなきゃ治らないんか？」

悟空は心配するように聞く。

確か物語だと渡したのは一つだけだったはずだが。

「いや、一つだけで大丈夫です。悟飯さんから悟空さんは大雑把だから、無くしてしまう可能性があるとのこと。後はウイルス性の病気なので多く持つておいて損はしないとのことですよ」

「え？オラなくさねえぞ」

「いや、絶対じゃないな。……やはり悟飯は父親を理解しているな」

俺は未来悟飯の意見に同意する。

悟空ならやりかねない。

「ま、とにかくこの薬があれば大丈夫なんだな」

「ええ」

悟空はトランクスから薬を受け取ると大切そうに懐にしまう。

「ほい」

「……何故俺に渡す？」

悟空は薬の三つのうち一つを渡してくる。

「こういうのはにいちやんが預かってた方が安全だと思ってな」

「……お前」

俺は呆れつつも、薬を受け取る。

預かる分には別にいいだろう。

「あ、あとラディッツさんをお願いがありました」

「なんだ？」

突然トランクスは慌てるように話しかけてくる。それにしても今度はなんだ？

「その……僕個人のお願いだけではなく……ある人のお願いというか……」

「なんだ、はつきりしろ」

急に吃るトランクス……何か言いづらいことでもあるのだろうか？

「……これを話すにはまず僕が誰の子供なのかを言わなければいけません」

トランクスは意を決したようにこう言った。

「母はブルマさんで……父は……ベジータさんです」

「ひよえええ！」

その宣言に悟空は驚き後ろに倒れたのだった。

ラディッツ、さらなる高みを求めて

「おつたまげたなあ！」

「ああ……意外だ」

俺と悟空はベジータの方へ向く。

俺は知っていた。だが、見るのは自然の流れだろう。

チラチラと見たので、ベジータの機嫌がさらに悪くなったのは見なかつたことにしよう。

「それで……その話が俺への頼みとなんの関係があるんだ？」

そこが話の肝だ。

俺はこのままだと話が進まないと判断したので、質問した。

「実は……当時僕を産む前の母さんはラディッツさんに好意を持って
います。……既にヤムチャさんと別れていたこともありまして
……その」

「いちいち気にすることはない。はつきりと言え」

「はい……実は。母さんとラディッツさんは一時期恋人関係にあった
そうで」

「は?!」

「ひよええええ！ええ！にいやんとブルマが！」

ひよええええ！

え？俺が……ブルマと？

俺はつい声を出してしまい、悟空は再び驚く。

「……すまないが、聞き間違いじゃなければ俺とブルマが恋人と聞こ
えたが……間違いはないか？」

「ええ……本当です」

「すまないが……可能ならどういった経緯があつたか説明を頼む」

落ち着こう……冷静さは大切だ。

俺は大きく深呼吸をした。

「えつと……ヤムチャさんと別れた当時……というよりナメック星に
いた時から母さんはラディッツさんに好意を抱いていたそうです。
悟空さんが病気で亡くなった後、消沈しているラディッツさんに寄り

添ったのがきつかけで」

「……は……はあ」

……今の俺からすると絶対にしない行動だ。物語崩壊、特にドラゴンボールキャラが生まれなくなる禁忌を犯すのは絶対にしないはず。未来の状況から察するに……精神的に参っていたらしい。

確かにその状態で優しくされたらコロツと行ってしまいかもかもしれない。

「えーと……それでどうなったんだ」

「はい……恋人になったまではいいのですが、その……付き合ったあと、少し経ったら心境の変化があったのか、ラディッツさんは修行や仕事ばかりで全然母さんと連絡は取らず……自然消滅してしまつたと聞いてきます」

「は……はあ。……えーと。うん」

どう話せばいいのだろうか？

「ちなみにだが、未来の俺はそのことをなんと行っていったんだ？」

「詳しくは教えてくれませんでした」

「そうか」

おそらく未来を大きく変えるのと、トランクスが生まれなくなる世界を気にしたんだな。だが、ならなんで一時的とはいえブルマを受け入れたんだ？

……わからん。

「そして、ラディッツさんとの関係があやふやになったあと……寂しそうにしている父さんを見て……その後なんとなく、くつついたそうです」

「なるほどなあ。……世の中わかんねえもんだなあ」

トランクスが話を終えたあと、悟空がブルマ達をみながら言う。

どう反応すればいいんだ？

「それで……俺はどうすればいいんだ」

「可能なら母と関係を持つのはやめていただきたいのです。それを嫌がる人がいるというか……僕が関わった影響で僕が未来で生まれなくなるかもしれないので」

「俺がブルマと関係を持つのを嫌がる……だれが？」

「あ、それは……すいません。僕が未来を教えてしまったので、大きく未来が変わると思います。なので、少しでも僕が生まれなくなる可能性を摘んでおきたいのです」

「……わかった。ブルマと関係を一切断ち切って過ごせばいいんだな」

そうすれば万事解決だな。

「え？いえ。そこまでしなくても……そこそこの距離感でお願いします。逆に怪しまれるかもしれないので……あと、このことは絶対に母さんと父さんには」

「……わかった。いいなカカロット」

「わかってる」

これからの立ち振る舞いを考えなきゃいけないな……うん。

「これ以上は何も聞かん。だが、いくつか確認したいことがある」

「なんででしょう？」

一番気になるのはなぜ俺以外に会ったかだ。話すだけなら会う必要はない。

「なぜ、他のやつらにも会ったんだ。話すだけなら俺だけでもよかつたろうに」

「いえ、これも悟飯さんの指示です。そうした方が話も進めやすいし、クリリンさん達にも話してほしい内容だったので、その方がいいって言うてました」

「なるほどな……ということは悟飯は生きているのか？」

「ええ。重症になっただけじゃありませんが、ラ……いえ、知り合いに腕の良い医者がいたのが幸いしてか、命に別状ありません。今は療養していて、学者を目指して勉強しています」

「それはよかった。未来の悟飯に頑張れと……治った後も研鑽も続けろと伝えてくれ」

「わかりました」

俺の存在で唯一救えたことは悟飯の存在だろうな。物語でも未来

悟飯の不遇っぷりには同情していたのだ。

「伝えたいことは話せましたので、僕はこれで失礼します。早く帰って未来の母さん達を安心させたいですし」

「おうーこれ、助かったって伝えたいでくれ」

「はい……ではまた未来で会いましょう。僕もタイムマシンのエネルギーが溜まり次第駆けつけます。三年後に」

そう言ってトランクスは飛んで行った。

「それにしても驚くことばかりだな……にいちやん」

「まあな……俺は人造人間のことよりも今話したブルマとの方
が気になりすぎているところだ」

今後のことを考えるとわからないことが多すぎる。

「早く皆に伝えるか」

「そうだな」

「……いや、すまないトランクスにまだ聞きたいことがある、先に行つていてくれ」

このまま向かおうと思つたが、気がかりのことがある。

セルの存在だ。

念のため伝えておくか。

俺は飛んで行ったトランクスの元へ向かった。

「トランクス」

「ラディッツさん、どうしたんですか？」

「いや、一つお前に伝えておこうと思つてな」

俺が向かうとトランクスはタイムマシンを出して空へ飛び立つ寸前であつた。

間に合つて良かった。

このことを他の人に教えるわけにはいかない。

俺は懐から紙とペンを取り出し記入する。

それはセルについての情報。俺が転生者ということは隠して、嘘を交えながら書き記す。

俺はなるべく知っている知識を外部に出す気はない。物語に沿って行動しようとするし、対策もする。

もしかしたら未来にまだセルが存在し、次に未来から過去に来る時に狙われるかもしれない。せつかく未来の俺が守った世界、壊させてたまるか。

「……これは？」

「未来に帰った後、読め。これはお前の胸のうちに留めておいてほしい内容だ」

「わかりました」

トランクスは胸ポケットにしまい、タイムマシンに乗り込み帰って行った。

俺も皆の元へ向かったのだった。

俺はトランクスについて大切なことだけ隠して要点を伝えた。

それでも、みんなの反応は好戦的であった。

新たな敵の存在に闘志をもやし、修行をすると意気込む。

ブルマはゲロを倒してしまおうと俺の両手を握り泣きながら頼んで来るが、トランクスに言われたこともあるので、突き放すように否定した。

若干ショックを受けていたが、こういうのはしっかりと線引きして

おいの方がいい。

その後ブルマは他の人の意見を求めるも皆否定、三年後に向けて修行し再開しようと約束する。

「おい！カカロット、ラディッツ！」

だが、今まで黙っていたベジータが急に話しかけてくる。

「スーパーサイヤ人になったからって調子に乗るなよ。俺はそのうち貴様らを叩きのめして見せるぞ……サイヤ人NO. 1は俺だと言うことを忘れるな」

そう言つてベジータは去つていった。

……だが、敵認識はしているらしい。いいように解釈すればライバルだと認めてもらえたと言うことだろうな。

「ピッコロ……にいちちゃん、オラと悟飯と一緒に修行しねえか？」

「いいだろう。望むところだ」

「わあーい！」

ベジータが去つた後、悟空は俺とピッコロを修行に誘ってくる。

ピッコロは了承、それを悟飯は喜んでいる。

「すまないな。修行はお前達3人でやってくれ。俺はクリリンとする」

「え？……そんなら一緒にクリリンもすりゃいいだろう？」

「いや、俺たちのペースがある。三年もあるんだ。段階を踏んで修行をしたい」

「すまないが悟空、俺はラディッツの言う通り、段階を踏みたい」

俺の発言にクリリンも賛同する。

「……なるほどな。クリリン、おめえにいちちゃんと修行してたんか。

……確かにナメック星にいた時に比べ強くなってるな」

「おーやっぱりわかーいってえ！なんで叩くんだよラディッツ！」

悟空はクリリンを見て褒めるも俺はクリリンが調子に乗る前に頭をペチンツと軽く叩く。

「調子に乗りすぎだ馬鹿者……この分なら修行の量を倍にしても大丈夫そうだな」

「そ……そんなあ」

俺とクリリンのやり取りを見てみんなは笑う。

ま、自信を持つのは大切なことだが、調子に乗るのはいけない。

ここいらでもう一回その自信をへし折っておこうか。

「わかった。にいちちゃんはクリリンとか……ヤムチャ達は どうする？」

悟空は納得するとヤムチャと天津飯、餃子に聞く。

「俺は遠慮する……正直、お前達の修行にはついて行けそうにないからな」

「俺達も遠慮する……ラディッツ」

ヤムチャ、天津飯と悟空の誘いを断った。

だが、天津飯は俺に話しかけてきた。

「俺達もお前達の修行に混ぜてもらえないか？」

「別にいいが……理由は？」

「界王様のもとで共に修行してお前から学べることは多かった。……

何より短時間でクリリンがここまで強くなった。……俺も正直限界を感じていたところで……何か新たな刺激が欲しい」

「餃子も一緒か？」

「ああ」

「構わん、勝手にしろ」

「感謝する」

「そんな畏まらんでもいい」

こうして、天津飯と餃子の修行加入が決まった。それにしても天津飯がこうまで言うとは意外だ。

常に修行は一人で行っているイメージがあったが。何か俺が関わって心境に変化でも起きたか？……まあ、どうでもいいが。

修行仲間が増えるのは悪いことじゃないしな。

「よし、じゃあ3年後のえーと……なんだっけ？」

「5月12日、午前10時だ」

「……と、そうそう。自信のある奴だけ集合ってことで」

悟空が再度確認の意味も込めてそう言って別れた。

だが、その前に言っておくか。

「悟飯」

「何伯父さん？」

「カカロットの病気のこと……気にかけてやって欲しい。少しでも症状が出たらすぐに薬を飲ませるんだ。……いいな」

「うん！任せよー！」

最後に悟飯に伝えて置いた。

これで悟空の病気の件は大丈夫なはずだ。

ここから先の未来は俺の知識が全く使えない未知の領域。

知っていれば対策もできるし、未然に防ぐこともできるだろう。

ナメック星編はフリーザの存在や性格を知っていたからこそ悟空と共闘して事前に策を練ることができた。だが、人造人間編はそれが全くできない。

強くなって行動するしかないのだ。

だから、強くなるろう。どんな強敵が現れても戦えるだけの術を身につけようと思う。

「お前ら、いくか」

「ああ」「おう！」「うん！」

俺の一声で天津飯、クリリン、チャオズが返事した。

俺は3人を連れ、悟空達と別れた。

三年後……運命の日に再会を約束して。

「師匠、あなたの願い……無事に達成しました」

トランクスはタイムマシンで未来に戻る前、腕を組むラディッツを見ながら一人呟く。

その表情は悲しみなど一切なく、ある種の達成感があった。

そして、タイムマシンが光り出し、ワープする寸前に遠くでこちらを見ているベジータが視界に入る。

「……………パ。パ」

トランクスは一縷の涙が頬に垂れる。

その直後、タイムマシンは光となり消えたのだった。

SS 短編集

【短編SS】気がついたら地獄に落ちた後だった件について

ードカン。

気がついた瞬間視界が真っ暗になる。

手足が動かない、何かが上から覆い被さっている状態。

「地獄で反省するんじゃないぞ」

渋い男の声ができるならゆつくりと視界が晴れてくる。

そして、見える範囲でわかることは巨大な机、ツノの生えた紫のスーツを着た巨人。

……え、どういう状況？

少なくともわかることは……俺は何故かペシャンコになっていることだけ。

「……は？」

そう呟いた時には再び視界が暗転した。

視界が再び晴れたのは数分後のこと、体が自由になった。

「しつかり罪を償っておに」

訳もわからないまま、突然後ろからかけられる。

振り向くと筋肉ムキムキの赤鬼が立っていた。

意味がわからない。

周囲を見渡すと空は血のように真っ赤だった。

周囲には一面血の池、針山、火の谷。

異様な空間に戸惑ってしまう。

「さ、ここに入って刑執行まで待つおに」

「……おい待て」

だが、流れるように牢屋に案内された。

意味がわからず聞き返してしまう。何故俺が牢屋？てか、なんでこんなところに俺はいる？

至って真面目な人生、犯罪など起こしたことないのに。

「俺は何もしていない。ふざけるな！」

「暴れる気おにね!? そうはさせないおに！」

俺はふざけたことを抜かす鬼を倒そうとする。

俺はどうやら力持ちらしい。拘束しようとした鬼数人を軽くあしらった。

だが、俺はすぐに無力化されてしまう。

暴れる俺を駆けつけた俺と身長に近い戦士が無力化した。

名前をパイカーハンとかいうやつらしい。

どうして俺がこんな目に。

だが、事態の把握にそこまで時間はかからなかった。

「やっとおとなしくなったおにね。最初からそうするおに。……あまり困らせるんじゃないおによ、ラディッツ」

赤鬼から突然呼ばれた名前、すると死ぬ前の記憶が流れ込んできた。

そして、自覚をしたんだ。ここはドラゴンボールの世界だと。

俺は孫悟空の兄、ラディッツに成り代わっていると。

そして、一番絶望なことに……気がついたのは地獄に落ちた後だと言ふことを。

それから俺が冷静に考えられるようになったのはいくつか刑が執行された後だった。

針山や灼熱地獄。

何回も死んだ。

だが、今は地獄には魂だけになっているため死ぬと言う感覚がない。

意味不明な感覚だが、とにかく俺は死んでも死なないということは

わかった。

眠気もない、食欲もない、性欲ない。

人間の三代欲求も全てない。

時間の感覚がない。

これが死んだという感覚だと嫌でもわからされた。

……だが、俺が何をしたというんだ。過去のラディッツがやった罪を何故背負わなければいけない。

そう自問自答する毎日だった。

だが、そんなある日俺はとある考えがよぎる。

あれ、今サイヤ人編が終了したってことは、今後やべえやつがいっぱい来るということでは？

ナツパやフリーザ様。そしてセル。

ラディッツの戦闘力は1500……このままじゃやばいんじゃないか？

フリーザ様は第1形態で53万とか言ってたし。

そう考えたら1500なんてゴミクズではないかと。

現段階で俺は地獄では一番の要注意人物だ。

だが、それも1年経つころには上のやつが来る。

俺はある結論に至る。

「強くなろう」

下手したらいじめられる、ここでは弱肉強食。地獄でも自由時間がある。

新参者は上のものにボコボコにされる、俺の場合はやり返したが。

おかげで俺が実質的な地獄のナンバーワン。この優越感に浸る毎日に満足していたが、このまま今のまま生活してたら肩身が狭くなる。

……そう考えが至ってから俺は訓練を始めた。前世でのいろんな修行方法。

死んでも死なないというアドバンテージを意識して。

アニメでドラゴンボールGTでは地獄に落ちた後のフリーザ様とセルは修行して強くなつたと発言していた記憶がある。

つまり、やり方次第ではどうにかなるのではと考えた。

最低限の、ドラゴンボールのインフレについていけるように。

セルに対等にやりあえるくらいには強くなりたい。

不眠不休で修行できるのはアドバンテージと捉えるべきだ。

ラディッツは弱虫ラディッツとバカにされたが腐ってもサイヤ人。

成長できるはずだ。

俺はその日から地獄での模範となるべく行動、修行の日々を開始したのだった。

地獄の刑を素直に従った。

悪さをしないのならと修行をすることは目を瞑ってくれた。

そして俺はいつしか地獄の模範囚になっていた。

修行は色々試した。

そして、まず最初に思いついたのは界王拳とワン〇ースのギアセカンド。

界王拳は原理が全くわからない。なので擬似界王拳をすることにした。

それで参考にしたのがワン〇ースのルフィのギアセカンド。

心拍数を早くして体内の血液の巡りを上げる。まあ。魂だけだが、少なくとも体の体内機能は動いていた。

なのでできるのではないかと思った。

体感時間にして半年かけてようやく形にすることができた。

体が爆発して何度か死んでしまったがすぐに体は蘇生する。

生きていたら絶対にやらないな。

そう思いつつ、訓練を重ねる。

その過程でわずかながら戦闘力も上がっていた。

それからしばらく経ってからだった。

「ふぎけんじゃねえ！」

地獄に来た瞬間、大暴れするやつが現れた。

そいつは体がデカく、ハゲていた。

「……ナツパか？」

多分そうだ。

つまり、ベジータに汚ねえ花火されて地獄に落ちたのか。

ああ、気づけば一年たっていたのか。

時が経つのは早いな。時間の感覚鈍ってきてるわ。

そう思いつつ、関わりたくないの、何も見なかったことにしてその場を去ろうとする。

「抵抗するんじゃないおに！」

「うるせえええ！」

だが、地獄に来た当初の俺と同じよう暴れ出した。

すると緊急の警戒ベルが鳴り響き、地獄の鬼たちが集まりだす。

あーあ。めんどくせえ。俺は絶対に関わらないぞ。

どうせ強い戦士がここに来て対処するはずだ。そう思っていた矢先だった。

「ふははは！雑魚が！」

「うべー！」

「た……助けておに」

「閻魔大王さまあー！」

だが、次々に薙ぎ倒されていく鬼たちの悲鳴が聞こえ足が止まる。

俺には前世の善人としての正義感があった。

気づけば体が動いていた。

不意打ちからの一撃をナツパに食らわせていた。

「ぐべらー！」

蹴りを喰らわせたナツパは地面に顔が埋まる。

「なんだ、くそー！ペツ……ペツ」

ナツパはすぐに立ち上がった。

蹴られた方へ視線を向けてきて……額に血管が僅かに浮かぶ。

「……テメエ……この俺様を蹴りやがったな……弱虫ラディッツの分際で」

俺を見るなりイラついたナツパ、弱虫ラディッツ……懐かしい呼び名に俺は少しイラついた。

俺は……俺はもう以前の弱虫ラディッツではない。

「俺を弱虫ラディッツと呼ぶなああ！」

それは心の底から溢れるような怒りだった。

俺は無意識に擬似ギアセカンドを発動させる。

体から赤い蒸気が噴き出し、体に力がみなぎる。

「なんだ？ 芸でも覚えたのか？」

小馬鹿にしてくるナツパ、俺はそんなナツパを。

「……あれ、消えた……ぐは！」

目にも止まらぬ速さで圧倒、鳩尾に拳打し無力化した。

「……ふははは。俺は……強い」

ニヤケを堪えられないほどの達成感、歓喜。

何故かわからないが、強くなったことに充実感を抱いていた。

その後はナツパは無事収監された。

その後も地獄に送られてきたフリーザ様やコルド、人造人間19号、20号が地獄に送られてきたが。

「人王拳！」

何かと格好つけて技名を叫びたい俺はいつしか人間の限界を超えられる人王拳と勝手に名付けてそれを駆使し、激闘の末無力化した。

その結果、以前から模範囚の扱いを受けていた俺は閻魔大王から特別で罰が軽減された。

といつても天国行きになることはないが、地獄でも刑は緩和され地獄の1丁目と呼ばれる茶屋があつたり、罪をしつかりと償っているものが集まる比較的平和な地獄の場所で過ごすことが許された。

地獄の守衛みたいな立ち位置になった。

こんな信頼を寄せて良いのかと問うたことがあつたが、魂が綺麗になつているからもう悪いことはしないと判断されたとのことだ。

てか、面倒事を片付けた俺が地獄の囚人たちの抑止力になることで仕事の閻魔大王の負担が減っていくらしい。

妙な信頼を寄せられたものだ。

「なら、天国に行かせてくれよ。ゴズとネズから聞いたぞ？ 大界王とかいうところに強いやつが集まってんだって？ そこに行かせろ」

「無理に決まっておろう！ 何があっても地獄行き判定は覆らん！」

とまあ、こんな感じに言われた。

別に今の待遇に満足しているのでこれ以上は言わないが。

ただまあ、死後は暇なもので娯楽がない。

不眠不休で修行しているが、それ以外はすることがない。

だが、そんな変わり映えしない日常で事件が起こったとすれば人造人間セルが地獄に来た時だろう。

なんとセルがギニューなしの特戦隊4人とフリーザとコルドを連れて地獄を支配しようと行動を起こした。

本来なら俺が対処すべきなんだが、その時滝修行の要領で自分の限界を越えるための灼熱地獄で精神修行していたため初動が遅れた。

ゴズから急いで向かうように言われて行動を開始したんだ。

ああ、アニメオリジナルストーリーでそんなこともあったなあと薄れつつある記憶を思い出し、今の俺にセルを倒せるかを考える。

修行をしたとはいえ、フリーザたちに苦戦をしたんだ。

でも、最近超サイヤ人になれるようになったので、人王拳と組み合わせればいけるかなと考えセルの元へ向かう。

人王拳と超サイヤ人の組み合わせは偉大だ。生身でやったら絶対死ぬ。

死人の状態でしかできない大業。

少し行けると思った。

「……貴様は何者だ？」

そばに着くとところどころ緑の斑点のある台所で嫌われている虫を発想させる人間型の生き物がいた。

「俺はラディッツだ」

「知っているぞ？ 貴様は孫悟空の兄だな。そんな雑魚が私になんによ

うだ？」

雑魚って……久々に言われたな。

そう思いつつ、要件を伝える。

「俺のテリトリーで暴れられられては困るんだが？」

「つまりこのボスになるには貴様を従えればいいということか」

何故そうなる？

まあ、どのみちこいつは倒さないといけないわけで。

「はあああ」

気を上昇させ超サイヤ人になる。

一応前世の知識から気の消費が激しいのが超サイヤ人。

なので、なった時の嫌な感覚を無くしてスムーズになれるようにした。

アニメで悟空と悟飯が精神と時の部屋で修行してなった状態。

まあ、俺は超サイヤ人の限界を越えられていないが。

「はーその程度でこの私に挑みにきたか」

やはり気を上昇させてもダメらしい。

ま、わかっていた。一人での修行では限界があると。そのまま心拍数を早めていく。

「人王拳！」

赤と金色。

そのオーラが混ざり合う。

この状態になるのに何回も死んだ。

死を繰り返しやつとなれるようになった新形態。

「……ほう、少しは骨がありそうだ」

「いくぞおおー！」

俺はセルに立ち向かっていく。

実力は拮抗しているがセルにはあと一步及ばない。

スピードは俺が優っているが、決定打を与えられない。

戦いの最中徒党を組んでいたフリーザたちは巻き込まれて底なし

沼や針山に刺さっていた。

俺は気にせず戦い続けた。

だが、勝敗は想定外の方法で決着がついた。
外部からの横槍だった。

俺と同等の速さで死角からセルに攻撃を加えるものが現れた。

「はあ…はあ…はあ」

呼吸を整えながら元の状態に戻る。

そいつは忘れもしない人物だった。

俺を無力化した人物。

「パイカーハン……だったか」

鋭い赤い瞳に厚い唇、ピッコロのような緑色の肌。

クールな印象が強い人物。

セルを倒しにきたらしい。

だが、俺もその対象に入っているかもしれない。

だから、俺は両手を上空に上げて降参をアピール。

「俺はセルを止めるために戦っていただけだ。お前と戦う意思はない」

「久しぶりだな……ラディッツだったか、腕を上げたな」

「そりやどうも」

皮肉にしか聞こえない一言を発してパイカーハンはクールに去っていく。

まあ、こいつが介入しなきゃ勝敗はまだつかなかったわけだ。

「……ラディッツじゃねえか！なんでおめえがここにいんだ？」

だが、この場に駆けつけたのはパイカーハンだけじゃないらしい。

声の方向を向くとそこには孫悟空がいた。

「……カカロット」

思いがけない再会に微妙な雰囲気になる。

俺は顔を合わせたくなかったのでその場から逃げるように去った。

「おい待てよおー！」

悟空はそう声をかけてきたが、振り向くことはなかった。

だが、孫悟空というのは独特なコミュニケーションをする生き物らしい。

「いやあ、おめえも地獄で強くなつたんだな……閻魔大王様から聞い

たぞー！」

「何故お前が地獄にいる」

「ん？大界王様から閻魔大王様に頼んでもらったんだ」

なんでもありかよ。悟空は何故か俺が地獄の一丁目にいる時に来るようになった。

それから悟空はたまに俺の元に来て組み手をかわすようになった。

悟空は格上だ。

一人だと限界があるのでちようどいいと思った。

自分も高みに進みたいと思つたのでたまに悟空の組み手に付き合つた。

そうして、悟空とできた縁、結果的に。

「にいちちゃんまたなあ」

いつしか兄と呼んでくれるようになった。

悟空と死後の世界で和解をした後も共に修行をした。

そんな日々を送る中で再び事件が起こる。

「なあ、にいちちゃんも行くこうぜ！ぜってえ楽しいからよ！」

「無理だ。俺は地獄の人間だ」

「なんならオラが閻魔大王様に頼んでやっから」

悟空と再会して7年が立ったある日のことだった。

不定期にくる悟空からとある誘いが来た。

内容は1日だけこの世に行けるから天下一武道会と一緒に参加しようとの誘い。

だが、俺は断固拒否した。

まず、地獄にいる人間は1日だけ地球に行くことはできない。

そして、魔人ブウ編が始まるので巻き込まれなくなかったからだ。

悟空は俺が拒否したが、閻魔大王にその場で聞きに行った。

「無理に決まっているだろ！何を考えておる！」

と、閻魔大王に即座に否定された。

悟空は珍しくガツカリしていた。多分悟空なりに俺を気遣ったことだったのだろう。

なので、俺は悟空が1日だけ地球に向かうギリギリまで修行に付き合ったのだった。

「達者でな」

「ああ、いつてくる」

そして、悟空は地球へ行った

俺は久々に寂しくなるのを感じる。

アニメだと悟空は魔人ブウ編で蘇る。

地獄に来ることは2度となくなる。

会うのは後数回か。

少し寂しさを感じていた。

それから時は流れ、悟空は24時間よりも早くあの世に戻ってきた。

やはりアニメ通り進んで魔人ブウが現れた。

魔人ブウとの戦闘で無理して超サイヤ人3になり、早く戻ってきたらしい。

「よう、ただいまあ」

何故わかるかと言われれば悟空は律儀に地獄に挨拶に来たんだ。

「地球は大変らしいな」

「ああ、魔人ブウっちゆう強いやつが現れたんだ」

「テレビで見えていた。……カカロットが倒せば良かったらうに」

「いや、オラはもういないはずの人間だからな。オラがいねえと守れねえようじゃ先が思いやられる」

「ベジータもカカロットもいない地球を守るのは無理ではないか？」

「それについてはでえじようぶだ。フュージョンちゆう技を授けてきたからな」

とまあ、こんな感じに少し雑談した。

その後悟空は界王神界に向かった。

悟飯の元に行ったんだな。

この後俺はテレビでこの世の様子をリアル中継で見っていた。

途中、物陰に隠れてトランクスと悟天のフュージョンを見てなんとなくポーズの練習を試みたりした。

合体懂れるじゃないか。

男のロマン。

「ら…ラディッツさん何やってるおにか？」

だが、赤鬼の一人に見つかってしまい、恥ずかしい思いをってしまったのでおとなしくこの世の様子をずっと眺めていた。

だが、魔人ブウにより、殺された地球人が何千万と閻魔大王の元へ送られる。

魔人ブウが現れてから不眠不休で働いている閻魔大王様たち。人の供給が足りていない状況。

俺まで役目を与えられた。

といっても俺は地獄からの脱走者が現れないように入り口前の監視だ。

地獄の一丁目は地獄からの脱出口。

閻魔大王の机の引き出しに直接つながっている唯一の入り口が存在する。

その入り口の管理を任された。
と言ってもただ座っているだけ。

地球の様子を窺っている。

だが、地球では最悪な出来事が続く。

地球人の全滅。

ゴテンクス、老界王神によって潜在能力を引き出されたアルティメット悟飯のZ戦士たちが魔人ブウに挑むも吸収された（ピッコロも）

その後、悟空と閻魔大王の機転により蘇ったベジータがポタラ合体により、ベジットとなり挑む。

だが、ベジットも舐めプした挙句吸収されてしまった。

まあ、吸収された人たちを助け出すためにわざとだが。

それを俺は知っているため、特に動揺することはなかったが、俺はテレビ越しに映る圧倒的強者に挑みすらできない現状に苛立ちが増す。

「ラディッツ！出てこい！ラディッツ！」

突然だった。

背後から閻魔大王の声とドカという強く扉を叩く音が聞こえる。

そこは地獄から出るための唯一の入り口、気のせいかと思ったが、ドン、ドンと鳴り止むことはなかった。

「何事だ？」

絶対に出てはいけない入り口を俺は初めて出た。

入り口を出るとそこには顔が真っ青になっっている閻魔大王の巨大な顔が見えた。

そのまま舞空術で机から外へ出て周囲を見渡す。この場はお通夜状態で全員が俯いていた。

中には涙を流している者もいる。

そして、意を決した閻魔大王が言葉を発する。

「ラディッツ、貴様は充分罪を償った。よって特例で地獄から天国行きとする」

「……は？」

唐突なことに疑問符を浮かべる。

俺が……天国行き？何を言っているんだ？

「そして地獄での貢献に伴い貴様に肉体を与える」

「だからー」

『ラディッツちゃん聞こえるう？』

淡々と告げる閻魔大王、訳を聞こうとすると頭に老人の声が聞こえてきた。

「何者だ！」

『わし、大界王て言うんだけどね。知ってると思うけど、今全宇宙の危機なのよ。だから、今から地球行って戦ってきてくれない？』

「ふざけるな!!」

大界王と名乗る老人から突然の頼みにブチギレる。

いや、意味わからない。

「おい！大界王様になんと言う口の聞き方だ！」

『あ、閻魔大王ちゃん気にしないでいいよ。今は急いだほうがいいしねえ。でも、今魔人ブウ倒せる可能性あるのラディッツちゃんしかないんだよね。お願い』

いい加減なことを言ってくれ。

「無理だな。俺はカカロットのようになれなれない。こんな俺が戦ったところで負けは確定している」

『そこは大丈夫よ！ちゃんと秘策があるから』

「……秘策？」

そう聞いて俺はある程度予測できている。

俺が今の魔人ブウと戦うには一つしか手段がない。

俺にはサイヤ人特有の尻尾がいまだに残っている。

『ラディッツちゃん尻尾あるでしょ！人工的に月作って大猿化すれば可能性あるよお』

超サイヤ人4。

アニメ「ドラゴンボールGT」に出てきたアニメオリジナル形態。

……だが。

「意識を保てず暴走するかもな」

『大丈夫だと思うよ。だってラディッツちゃん……魂二つあるんだから、暴走することはないと思うなあ』

思わず鼓動がドキリと大きく跳ねる。

何故知っているんだ……そう問いたかったが、恐怖したので聞くのをやめた。

「……後で問い詰めてやる」

『てことは了承してくれたってことでいい?』

「……ああ」

どんな形であれ俺は嬉しさが込み上げる。

了承した後は大界王から秘策を聞き、俺は占いババに頼みそのまま地球へと向かう。

「……頼んだぞ」

向かう時閻魔大王に一言頼まれた。

俺はそんな閻魔大王に。

「まかせろ」

その一言を交わし転生後初めての地球へと舞い降りた。

「ここが地球か」

「では、頑張るんじゃないぞ」

地球に到着後、占いババは即座に撤退した。

魔人ブウの次元が違いすぎる気を遠くに感じる。

だが、その強大な気がこちらに向かっている。

「気づくの早すぎだろ」

俺は急ぎ準備を始める。

気を溜め、上空にパワーボールを作り出す。

太陽から発せられるブルーーツ派を反射できるほどのもの。

だが、完成までは僅かに時間が足りない。

「……ちようどいい」

今の限界がどこまで通じるか……どうせ賭けが失敗すれば死ぬんだ。

なら、思い残さないように。

「誰だ貴様は？初めて見るな」

目の前に圧倒的強者がいるにも関わらず恐怖で竦むことはなかった。

むしろこんな強敵に出会えたことに感謝しつつある。

「俺は地獄からお前を倒しにきた戦闘民族サイヤ人のラディッツだあ！」

俺は名乗りながら超サイヤ人に変身した。

「ふ、サイヤ人と言うのは愚か者しかいないらしいな。虫のように湧く。この私との次元の差もわからんとは」

「行くぞお」

「暇つぶしに遊んでやろう」

「おりゃあああ！」

俺はそのまま仕掛ける。

拳打を蹴りを繰り返すも全て空を切る。

「どうした？遅すぎてハエでも止まるかと思ったぞ」

「くたばれええ！」

両手から気攻砲を繰り出す。

ードカン

その一撃は魔人ブウに直撃した。

しかし、手応えはほとんどなかった。

「埃でも飛ばしたのか？」

ブウは小馬鹿にしながら言ってきた。

……圧倒的な実力差、絶望的な状況。

本当にめちやくちやだよ。

「かはー！」

「すまんすまん、あまりに鬱陶しかったからつい手を加えてしまった。

……よかったしっかりと手加減できた」

全く反応できなかった。

しかも一撃だけなのにダメージは身体中に広がる。

すると、ブウは触覚で俺の首を吊し上げる。

「この程度で地獄からきた？……何か他に策はないのか？」

……化け物。

「気になってたんだが、上に浮かんでるあれはなんだ？」

「……なんのつもりだ？」

だが、ブウは俺を解放した。

そのまま後ろに下がり人差し指を上に向けて発言する。

「10秒何もしないでやろう。……あれが貴様の秘策なら試してみろ」

ああ……その舐めプがありがたい。

「10、9……ふ、逃走か、がっかりさせる」

10秒時間を数え始めたので俺はそのまま距離を空ける。

秒数は聞こえない。だが、今は少しでも距離を空ける。

もう準備はできていた。

ブウは相手を見下す習性がある。アニメでもそうだった。

圧倒的な自信を持っているからだ。

その賭けは当たった。

俺はそのまま逃げ続けながらも上空を見上げる。

そして、空に浮かぶパワーボールを……爆発させた。

「……か……ぐ……あ」

そのまま体に変化が生まれる。

体が巨大になっていく。金色の剛毛が生えてくる。

だが、自然と意識が飛ぶことはなかった。

大界王が言っていたことは正しかったようだ。

「うおおおおおー！」

変身が終わり身体中から力がみなぎる。

体が大きくなりその辺にある岩山が小さく見える。

そのまま全身に気のバリアを貼る。

だが、変化はすぐにきた、徐々に体が小さくなる。

超サイヤ人4になるための条件。

サイヤ人の限界を超えること。

意識を保ったまま大猿になること。

「……貴様何をした？」

「律儀に待ってくれたのか……随分と良心的じゃないか」

体が縮み、元の俺の大きさに。

髪の色は黒色のままだ。

だが、胸元をのぞいて上半身には赤い体毛でうまっている。

「待たせたなあ。貴様のおかげでなれたぜ」

ま、待ってくれなくても大猿になった時点で気のバリアを張っていたから対処できていたが。

「さあ、第二ラウンドを始めようじゃねえか」

超サイヤ人4に覚醒できた。

ドラゴンボールZのサイヤ人は皆尻尾を捨てていた。

超サイヤ人4になれるのは今や俺だけだろう。

「ぶ……ふはははは！姿が変わったからってなんだと言うんだ」

「今にわかるさ」

今はこの力を早く試したくてしょうがない。

戦いから生じる高揚感、今は長らく忘れていた超サイヤ人になった時の興奮。

俺は気を大きく込める。

「はあああああ！」

気を上昇するにつれてブウから余裕が消えた。

俺は空中に左右上下に高速で動き、魔人ブウの背後に立つ。

「……………どこだ！」

俺のことは見失ったブウに後ろから声をかける。

「どこを見ている……………こっちだ」

「がはー！」

振り向いた瞬間、本気の蹴りを喰らわす。

俺はそのまま背後に回り込んで上空へ蹴り飛ばす。

「ぐわああー！」

蹴り上げたブウは上空へ。

だが、俺は追撃することなかった。

ブウは上空で勢いを殺し静止した。

これで自爆しようとしてもすぐに対処ができる。

すぐに消すことはできるが、可能ならば悟空たちが戻ってくるまで待ちたい。

このままではベジータが完全に消滅してしまうからだ。

「きぎぎー！」

だが、何かを言おうとした瞬間魔人ブウは急に苦しみ出す。

……………ああ、やっとか。

それから10秒ほど経つと背後から何者かが現れた。

そいつはよく見知った人物。

しかも周りには吸収されたはずの悟飯たちと何故か太っている魔人ブウまでいた。

「よう、カカロット……………無事だったようだな」

「やっぱにいちちゃんか……………なんつう気だ。オラ驚いたぞ！」

「き……………貴様……………ラディッツなのか……………」

何故か悟空は俺の今の姿を見て喜び、反対にベジータは震え悔しがる表情をした。

「久しぶりだな……………ベジータ」

そう挨拶すると何故か噛み締める表情をした。だが、今は話している余裕はない。

「話は後だ……まずはあいつを仕留めるとしよう」
両手に気を集め、気攻砲を放った。

「ウィークエンド！」

俺の最強火力によりブウを消滅させた。

そのまま俺は元の姿に戻った。

こうして無事に魔人ブウを倒すことができた。

その後は俺はすぐにあの世に戻るようになる。

24時間の制限付きだったが、超サイヤ人4は力を使いすぎてしまうようだ。

戻ってから占いババにそのことを知らされて少し焦ったのは内緒だ。

地球ではドラゴンボールを使い魔人ブウにより壊された地球を元に戻し、死者は皆復活した。

俺はナメック星のポルンガにより地球に再び来ることができた。

復活すると周りには多くのZ戦士がいた。

皆驚き、身構える者もいた。

「俺は誇り高き戦闘民族サイヤ人のラディッツ、カカロットの実の兄に当たる」

初めましてと挨拶をした。

これからの人生は長い。

ゆっくりと親睦を深めればいい。

「さーにいちやんさっさとやろうぜ！」

「ラディッツ、今は貴様がナンバーワンだ。だが、すぐに超えてやる覚悟しやがれ」

悟空とベジータは好敵手を睨まれている。

その姿に呆れる一同、その光景を見て俺は皆と打ち解けることはそう難しくなさそうだと悟った。

く完く

